鴻臚館

鴻臚館跡15

－平成14年度発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第８３８集

２００５

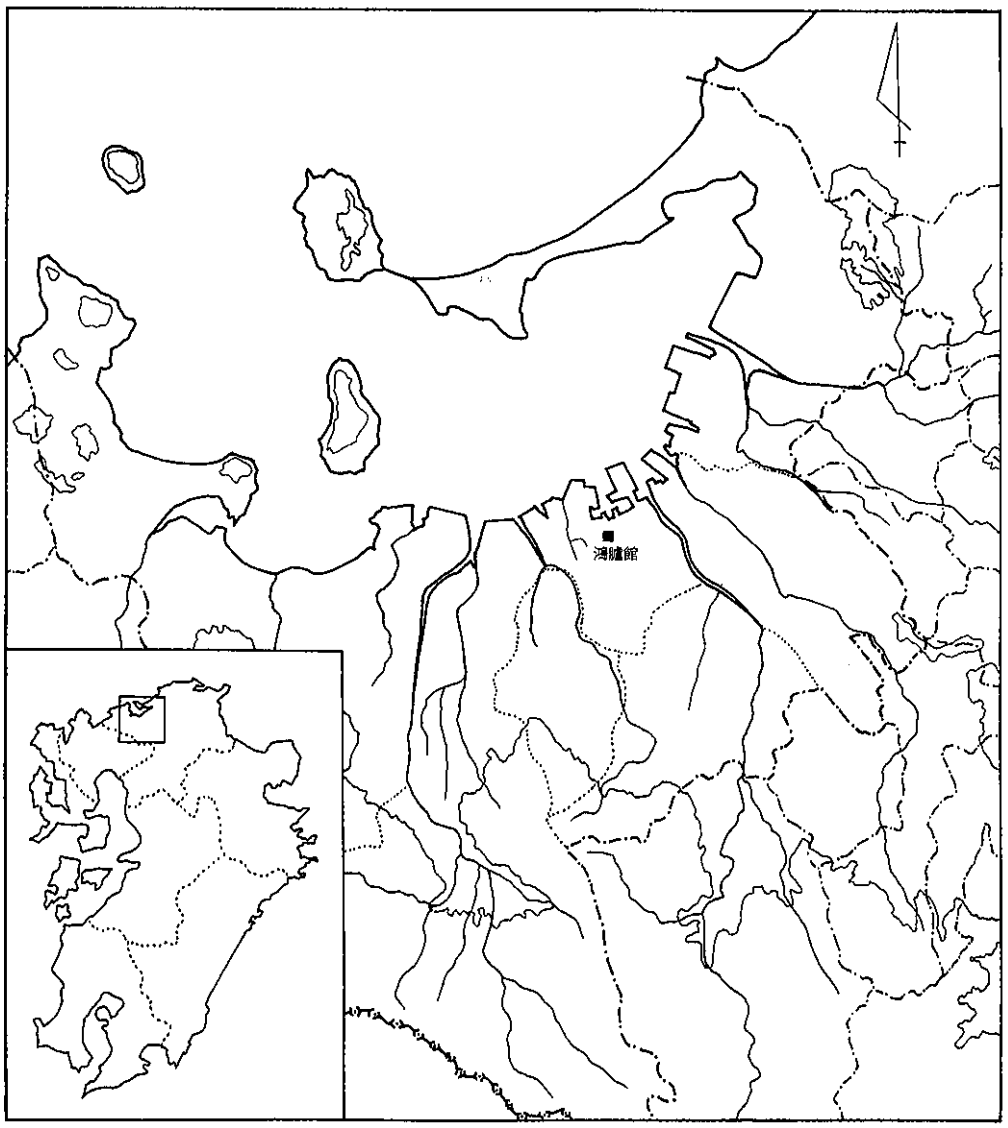
福岡市教育委員会

鴻臚館

鴻臚館跡15

－平成14年度発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第８３８集



２００５

福岡市教育委員会



１．平成14年度調査区遠景（南西より）



２．平成11～15年度調査区　モザイク写真（南より）

巻頭図版２



１．ＳＸ14528出土新羅陶器蓋



２．ＳＫ14271出土長沙窯水注



３．ＳＰ14258出土砂金



４．左からＳＫ14188青磁，ＳＫ14534白磁，ＳＫ14271青磁碗



５．ＳＯ14512出土装身具

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始いたしました。平成15年度には国に史跡指定申請を行ない、平成16年９月30日付けの官報号外で告示されました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を継続して推進しております。

これまでの調査で、鴻臚館の遺構が広がると予想されておりました平和台野球場は平成10年度に解体撤去工事が行われ、平成11年度からいよいよ平和台野球場跡地の本格的な発掘調査に着手いたしました。

平成11年度の調査では、これまで見つかっていた鴻臚館建物の北側にも、谷を埋め立てた堀状の遺構や、多量の瓦や陶磁器を検出するなどの新しい発見があり、平成12年度の調査では奈良時代の建物区画が見つかり、堀北側にさらに別区画の建物が存在していたことが明らかになりました。

平成13年度の調査では、この建物が南北同一構造、規模であることが判明し、更に平安時代の文献に現れる「鴻臚北館」の一部と思われる礎石建物も新たに見つかりました。そして、平成14年度調査では、鴻臚館を造営するにあたって行われた大規模な造成工事の一端が明かとなりました。その後の平成15年・16年調査では、南館と北館を隔てる谷の底から柱穴を検出し、北館と南館が橋で結ばれていたことが明らかになりました。また、南館の敷地内から、梵鐘鋳造遺構を検出、石製の印が出土するなど、大きな成果を上げてまいりました。

本書は、平成14年度に実施した、平和台野球場跡地の発掘調査成果を内容とする報告書です。本報告書が、鴻臚館跡をはじめ本市の埋蔵文化財に対するご理解とご認識の一助となれば幸いであります。

発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただいた財務省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成17年３月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　言

1．本書は、平成14年度に実施した鴻臚館跡第20次調査について報告するものである。
鴻臚館跡第20次調査は、平成15年度に刊行した『鴻臚館14』福岡市埋蔵文化財調査報告書第783集の第二部でその概要を報告したところであるが、その時点では整理が終了していなかったことと、予算上の制約から、報告に洩れた遺構・遺物が少なくなかった。本書においては、それらの遺物・遺構を新たに加え、すでに報告した遺構・遺物についても再録して一書を編んでいる。鴻臚館跡第20次調査で検出・出土した遺構・遺物は多く、本書においてもすべての遺構・遺物を網羅することは、紙数の制約から出来なかったことを明記しておく。

2．本書の編集・執筆は、大庭康時が担当した。

3．第20次調査検出の第Ⅰ期・第Ⅱ期石垣に関わる石材調査は、西南大学名誉教授唐木田芳文先生に依頼し、報告原稿をご執筆いただいた。これについては、『鴻臚館14』福岡市埋蔵文化財調査報告書第783集の第二部で、付篇として掲載したのでご参照頂きたい。

4．鴻臚館跡の発掘調査においては、平面直角座標系第Ⅱ座標系に則って測量を行なっており、本書に使用した方位もこれによる。真北方位より、0° 19′ 西偏する。

5．遺構番号・名称については、平成14年度を著す“14”に続けて3桁の通し番号とした。
遺構の性格を示す英文字の略号は次の通りである。

例　塀・柵列：ＳＡ、 建物：ＳＢ、 溝・堀：ＳＤ、 道・通路：ＳＦ、 池：ＳＧ、
炉：ＳＨ、 土坑：ＳＫ、 古墳：ＳＯ、 柱穴：ＳＰ、 性格不明の遺構：ＳＸ

6．本書で使用した航空写真、及びそれに基づくデジタルモザイク写真に関しては、（株）写測エンジニアリングに撮影・作成委託した成果である。また、第Ⅱ期石垣の写真実測も、同社に委託したものである。

7．本調査に関わる遺構実測図は、大庭康時、降矢哲男（九州大学）、丸尾弘介（九州大学）、竜知江（福岡大学）、岡部牧人（東京大学）、多可政史（東京大学）、ゴチョウ・メネス（九州大学）、Rasmus Brethvad（デンマーク、オーフス大学）が作成した。

8．遺物実測は、大庭、降矢、竜、陳洪（九州大学）、宮園登美枝（整理調査員）、井上涼子（整理調査員）、赤坂有美（整理調査員）がおこなった。

9．遺構実測図・遺物実測図の浄書には、大庭・宮園・井上・木下華代があたった。

10．古墳出土鉄器の錆落し、クリーニング、接合には、大庭智子があたった。

11．平成14年度の調査は、以下の方々の参加で実施した。記して感謝の意を表します。

[発掘作業]

牛尾成正、大橋善平、嘉藤栄志、鐘ケ江正良、清原ユリ子、斎藤善弘、坂本ハツ子、佐藤テル子、芝三郎、島津明男、杉村文子、鈴木敏男、高田甚一郎、谷吉美、堤篤史、土斐崎初栄、永井鈴子、仲野正徳、沼田昌信、原幸子、古山昭、脇坂レイコ、降矢哲男（九州大学）、丸尾弘介（九州大学）、竜知江（福岡大学）、岡部牧人（東京大学）、多可政史（東京大学）、ゴチョウ・メネス（九州大学）、Rasmus Brethvad（デンマーク、オーフス大学）

[整理作業]

整理調査員　赤坂有美、井上涼子、降矢哲夫、宮園登美枝

整理作業員　関山蘭（福岡大学）、金石邦子、木下華代、富永静子、堀一恵、佐藤志津香

本文目次

第一章　序説…… 1
　1．調査計画…… 1
　2．遺跡の立地と既往の調査…… 2
　3．平成14年度の調査事業概要 …… 5
　　（1）発掘調査の組織 …… 5
　　（2）調査事業の概要 …… 5

第二章　平成14年度発掘調査の概要 …… 6
　1．発掘調査の経過と概要…… 6
　　（1）発掘調査の経過 …… 6
　　（2）上層遺構群の概要 …… 8
　　（3）下層遺構群の概要 …… 8
　2．平成14年度調査検出の遺構と遺物…… 14
　　（1）遺構の遺存状態について …… 14
　　（2）戦後構築物 …… 14
　　（3）旧陸軍歩兵24連隊関係遺構 …… 14
　　（4）福岡城関係遺構 …… 14
　　（5）中世の遺構 …… 16
　　　ＳＸ14340・ＳＸ14340Ｂ…… 16
　　　ＳＫ14341 …… 18
　　（6）筑紫館・鴻臚館関係遺構 …… 19
　　　①第Ⅰ期 …… 19
　　　ＳＢ14601…… 19
　　　ＳＡ14602…… 21
　　　ＳＡ14603…… 22
　　　ＳＸ1245・ＳＸ14527（第Ⅰ期石垣） …… 24
　　　②第Ⅱ期 …… 27
　　　ＳＡ14526（布掘り掘立柱列） …… 27
　　　ＳＸ14528（第Ⅱ期石垣） …… 27
　　　③第Ⅲ期 …… 30
　　　④第Ⅳ期以降 …… 30
　　　ＳＫ14187…… 30
　　　ＳＫ14188…… 31
　　　ＳＫ14271…… 39
　　　ＳＰ14272…… 43
　　　ＳＫ14273…… 43
　　　ＳＫ14277…… 48

ＳＫ14307…… 50
ＳＫ14308…… 51
ＳＫ14339…… 54
ＳＫ14510…… 57
ＳＫ14511…… 65
ＳＫ14513…… 68
ＳＸ14529…… 78
ＳＫ14534…… 80
（7）古墳時代の遺構 …… 81
ＳＯ14512・ＳＤ14530 …… 81
（8）その他の出土遺物 …… 86

第三章　まとめ…… 89
（1）遺構の変遷 …… 89
（2）瓦 …… 89
（3）砂金 …… 89
（4）挂甲小札 …… 90

第四章　平成15年度調査の概要 …… 91
（1）発掘調査の概要 …… 91
（2）まとめ …… 91

表紙題字は故 進藤一馬 元福岡市長の揮毫による。

第一章　序　説

1．調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成５年度第２回指導委員会で了承を受けた。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成４年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、５年度から７年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、５年度と６年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査区南側の福岡城土塁部分を対象に平成７～９年度に実施し、平成10年度には平和台野球場解体工事に伴う立会調査と解体後の試掘調査を実施した。

平和台野球場跡地部分の本格的発掘調査は、面積が広大なため南半部と北半部に分けて実施することとした。南半部を第Ⅳ期調査として、当初平成11年度～14年度を予定していたが、平成11年度・14年度調査で遺構の遺存状況が予想以上に良好なことが明らかになり、17年度まで調査を延長することが平成14年度指導委員会で了承された。北半部は第Ⅴ期調査として第Ⅳ期調査終了後実施する。また第Ⅴ期調査終了後、調査結果に基づいて、本格整備を実施する計画である。

第Ⅵ期調査は、鴻臚館跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行く予定である。

Tab. 1　鴻臚館跡調査中期計画表（平成16年12月現在）　※網かけ部分は本報告の対象とする事業年度

		対象地区	昭62～平4	平5～平6年	7年	8～10年	11	12	13	14	15	16	17	18	19～23年	24～28年	備　考
発掘調	緊急調査	平和台野球場外野席	—														鴻臚館の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート		—													指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象地
	第Ⅱ期調査	西　広　場			—												範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	野球場外周南側土塁他野球場跡地				—											範囲確認調査 野球場解体立会調査 野球場跡地試掘調査
	第Ⅳ期調査	野球場南区					—	—	—	—	—	—	—				平成11年から調査着手 （６カ年計画）予定
	第Ⅴ期調査	野球場北区												—	—		平成18年から調査着手 （６カ年計画）予定
	第Ⅵ期調査	舞鶴競技場等重要地点														—	
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート		—		—											平成７年８月10日完成
	第Ⅱ期整備	球場跡地														—	第Ⅳ期・第Ⅴ期調査の結果を検討のうえ計画

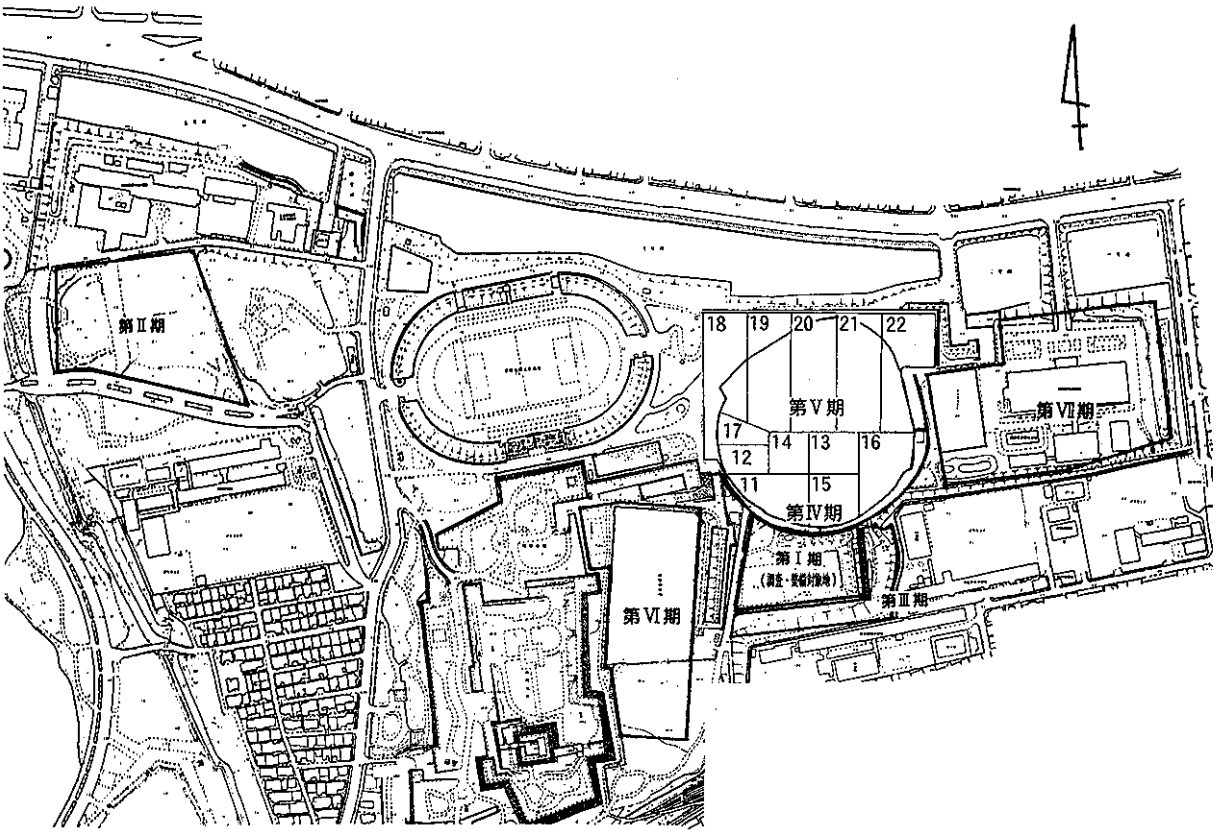


Fig.1　鴻臚館跡発掘調査基本計画図

2．遺跡の立地と既往の調査

鴻臚館は、博多湾ほぼ中央部の海岸際に位置し、福岡平野と早良平野を画する丘陵の先端に立地している。そのため、博多湾に突き出した出島のような景観を持ち、博多湾岸を一望できるとともに、逆に周囲からその出入りが監視しやすく、かつ良港に恵まれるという地形条件を兼ね備えていた。

鴻臚館は11世紀半ばで廃絶し、中世には寺院が営まれた考古学的な形跡があるが、積極的な跡地利用は知られていない。近世になると、筑前国で52万石を領した黒田長政によって16世紀初頭に福岡城が築かれ、藩主の居城となった。廃藩後には陸軍歩兵連隊の兵営となり、終戦後は平和台陸上競技場・平和台野球場を擁する都市公園（舞鶴公園）として、市民の憩いの場となり、現在に至る。

鴻臚館跡の発掘調査は、1951年の九州文化総合研究所による調査（第１次調査）、1963年・1964年の福岡県教育委員会による調査（第２次調査）が初期の調査として上げられるが、鴻臚館の遺構を確認するにはいたらなかった。その後1987年に国指定史跡「福岡城跡」の現状変更申請に伴う事前調査として第３次調査が福岡市教育委員会によって実施され、鴻臚館跡の遺構が初めて確認された。その後は鴻臚館跡の全容解明を目的とする確認調査が、福岡市教育委員会によって継続され、平成16年現在では第22次調査を数える。それぞれの調査概要は各調査報告書、既往の調査の総括は『鴻臚館跡14』第１部を参照されたい。これまでの発掘調査では、鴻臚館が廃絶する11世紀中頃までの遺構・遺物を検出しているが、近世以降の削平が著しく、鴻臚館跡関連建物遺構としては、７世紀後半から９世紀前半までの変遷が明らかになったに過ぎない（Fig.２・３）。

なお、遺跡立地の詳細と周辺の歴史的環境、発掘調査の経過とその概要などについては、『鴻臚館跡14』福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第783集、2004年をご参照頂きたい。

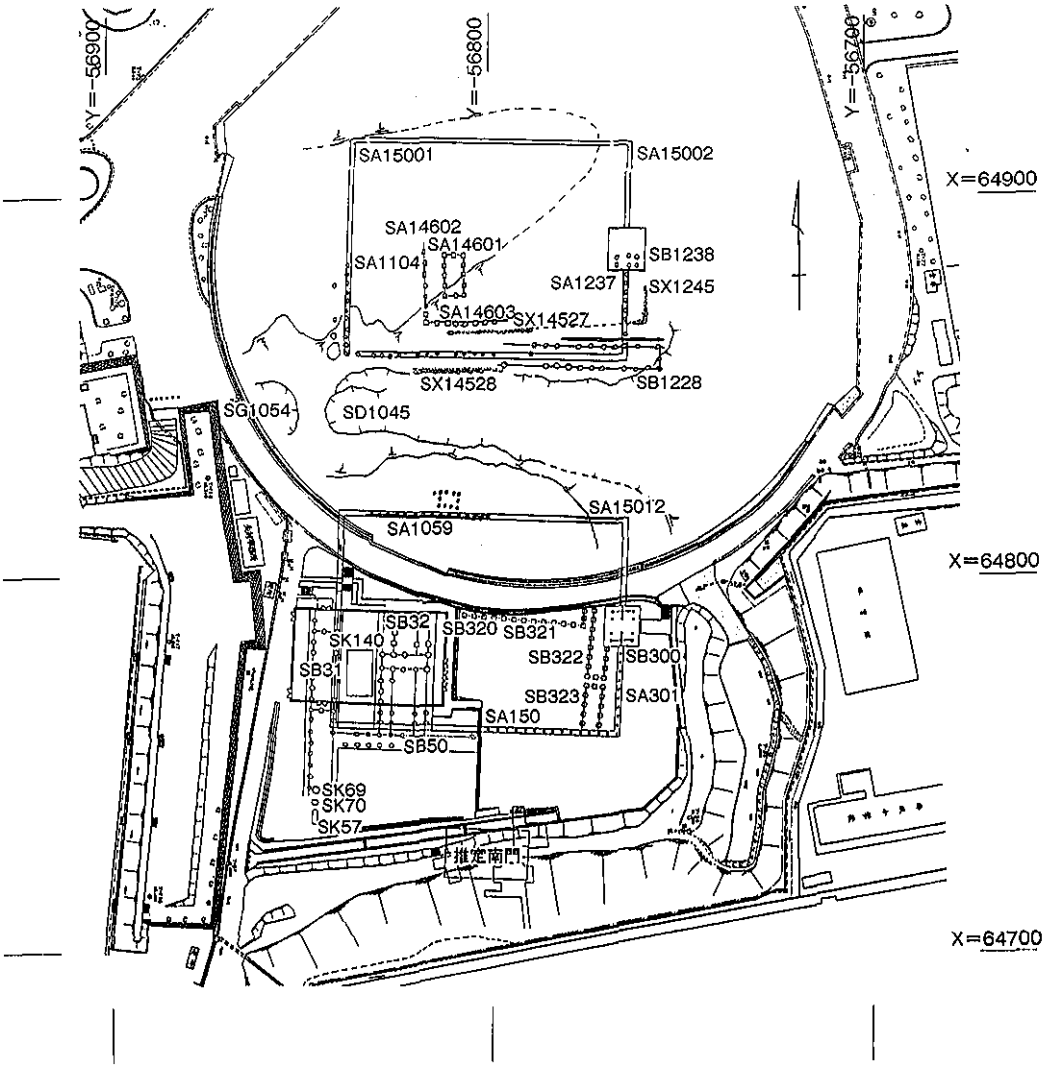


Fig. 2　鴻臚館跡検出遺構概念図（1/2,000）

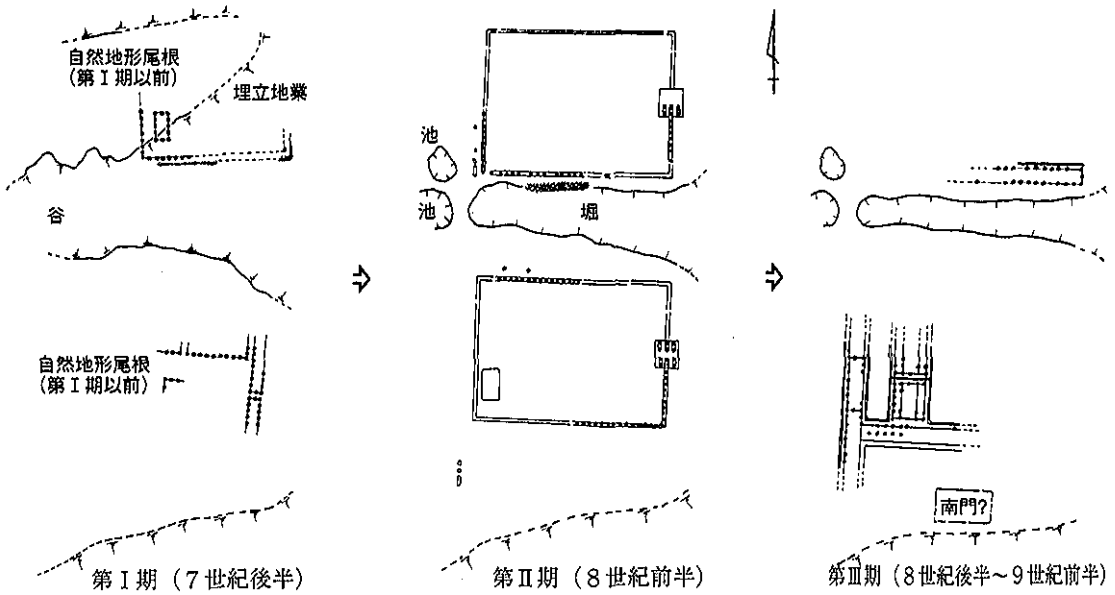


Fig. 3　鴻臚館跡建物遺構模式変遷図

Tab.2　鴻臚館関係調査一覧（平成15年度現在）

調査番号	調査次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文献
5102	鴻臚館１次	三の丸中央部	史跡内	テニスコート建設		510800～３日間	九州文化総合研究所	1･6･7
6301	鴻臚館２次	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105	福岡県教育委員会	2
7605		内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14900	761201～771008	折尾学・池崎釀二・浜石哲也・山崎龍雄	3
8747	鴻臚館３次	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学	7・8
8829	鴻臚館４次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男・吉武学	7・13
8910	鴻臚館５次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1200	890420～891207	山崎純男・吉武学	7・13
9005	鴻臚館６次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1300	900409～910131	山崎純男・吉武学	7・13
9130	鴻臚館７次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1000	910501～920331	山崎純男・瀧本正志	9・13
9218	鴻臚館８次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1670	920615～921030	山崎純男・瀧本正志	10
9236	鴻臚館９次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男・瀧本正志	10・13
9326	鴻臚館10次	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫・瀧本正志	11
9420	鴻臚館11次	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫・瀧本正志	12
9432	鴻臚館11次	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫・瀧本正志	12
9463	鴻臚館11次	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950217	田中壽夫・瀧本正志	12
9537	鴻臚館12次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	300	951101～960329	田中壽夫	14
9620	鴻臚館13次	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	14
9736	鴻臚館14次	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	204	970818～980131	田中壽夫	15
9807	鴻臚館15次	平和台球場解体	史跡内	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫・池崎釀二	16
9831	鴻臚館16次	平和台球場跡地	史跡内	試掘調査	930	980922～990120	塩屋勝利・池崎釀二	16
9910	鴻臚館17次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	3500	990422～000315	塩屋勝利・池崎釀二	17・18
0008	鴻臚館18次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1750	000425～010316	塩屋勝利・池崎釀二	18
0109	鴻臚館19次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	2000	010521～020329	折尾　学・池崎釀二	19
0218	鴻臚館20次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1200	020513～030331	折尾　学・大庭康時	20
0309	鴻臚館21次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1700	03506　～040331	折尾　学・大庭康時	

凡例　・確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査　　・史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
・公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査　・工事名のある調査：開発に伴う緊急調査

Tab.3　鴻臚館跡関係調査報告書一覧

1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第34集	1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』	稿本	1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市第101集	1983
4	池崎釀二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
5	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
6	田崎博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」	福岡市第101集	1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報」	福岡市第270集	1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」	福岡市第315集	1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」	福岡市第355集	1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告」	福岡市第372集	1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」	福岡市第416集	1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告」	福岡市第486集	1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡７　－鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告－」	福岡市第487集	1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡８　－平成７・８年度発掘調査概要報告－」	福岡市第545集	1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡９　平成９年度発掘調査概要報告」	福岡市第586集	1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市第620集	1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査報告」	福岡市第695集	2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12　平成12年度発掘調査報告」	福岡市第733集	2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13　平成13年度発掘調査報告」	福岡市第745集	2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡14」	福岡市第783集	2004

（福岡市第…集は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第…集の略）

3．平成14年度の調査事業概要

（1）発掘調査の組織

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第８期１年次）

委員長	東京大学名誉教授	笹山晴生	（国史学）
副委員長	福岡大学教授	小田富士雄	（考古学）

委員

元興寺文化財研究所所長	坪井清足（考古学）	九州大学名誉教授	川添昭二（国史学）
九州大学名誉教授	横山浩一（考古学）	京都学園大学教授	八木　充（国史学）
奈良国立文化財研究所長	町田　章（考古学）	京都橘女子大学教授	狩野　久（国史学）
九州大学名誉教授	西谷　正（考古学）	東京大学教授	佐藤　信（国史学）
千葉大学教授	河原純之（考古学）	工学院大学教授	渡辺定夫（都市工学）
元奈良国立文化財研究所長	鈴木嘉吉（建築史学）	神戸芸術工科大学教授	杉本正美（造園学）
九州芸術工科大学名誉教授	澤村　仁（建築史学）	京都大学名誉教授	中村　一（造園学）

発掘調査事業主体

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田征生
調査総括		文化財部長	堺　徹
庶務担当		文化財整備課長	平原　豪
		管理係長	市坪敏郎
		管理係	中岳　圭
調査担当		文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	折尾　学
		文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	大庭康時

（2）調査事業の概要

①　鴻臚館跡調査研究指導委員会

鴻臚館跡調査研究指導委員会委員をはじめ、文化庁調査官、福岡県教育庁、福岡市関連部局担当者の出席をえて、平成14年12月18日・19日に開催した。

会議終了後、委員長から、平成14年度の調査成果と検討内容に関する記者発表が行なわれた。

②　発掘調査

平和台球場跡地の発掘調査は、南半分を第Ⅳ期、北半分を第Ⅴ期として実施する計画である。これまでの調査結果では、第Ⅰ期調査で確認されていた筑紫館・鴻臚館建物の北側に東西にのびる堀がみつかり、さらに堀の北側にも筑紫館・鴻臚館時代の建物が存在したことが明らかとなった。堀を挟んだ第Ⅱ期の建物区画が、同一規格・構造であることが知られ、南館、北館の存在が確実視されるにいたっている。平成14年度調査は、北館の中央部から南の堀にかけての部分で実施した。詳細は、次章で報告する。

③　公開事業

平成14年12月21日に市民を対象とした現地説明会を行なった。あいにくの雨であったにもかかわらず、210名の見学者が訪れた。

平成14年度調査の記録ビデオを撮影するとともに、平成13年度調査の成果をＤＶＤに編集し、鴻臚館跡展示館のビデオコーナーにおいて公開した。

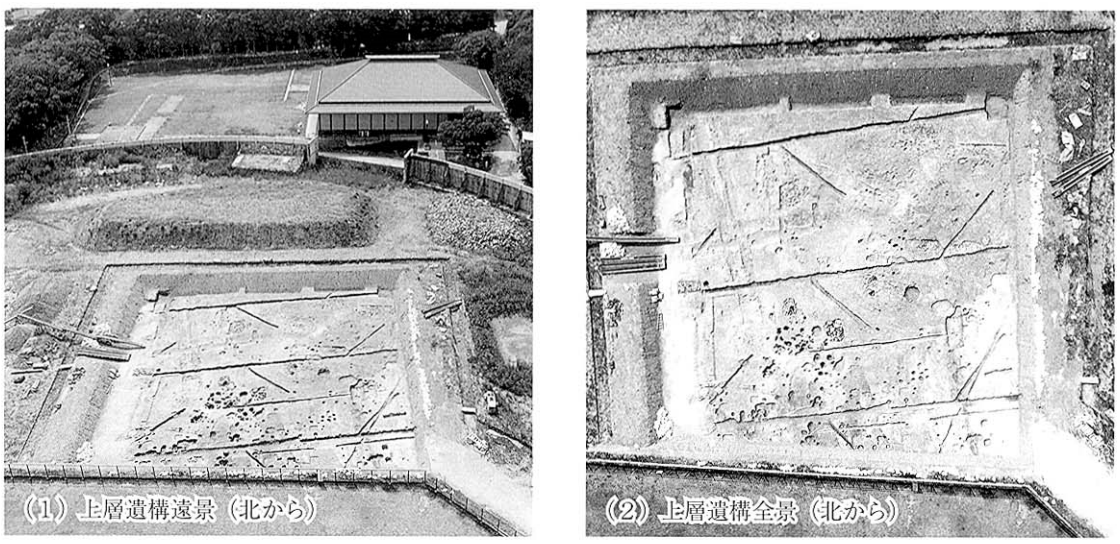
第二章　平成14年度発掘調査の概要

１．発掘調査の経過と概要

（１）発掘調査の経過

平成14年度調査は、５月９日よりバックホーによる表土掘削を開始し、平成15年６月４日埋め戻しを終了した。これまでの調査から、旧陸軍歩兵第24連隊兵営当時の遺構、近世福岡城関係遺構、中世寺院関係遺構、鴻臚館関係遺構が重複していることが予想されたため、まず中世以降を対象として上層遺構群を調査し、ついで下層遺構群として鴻臚館関係遺構を調査することとした。調査の経過を略述すると次の通りである。

平成14年５月９日　重機による表土除去に着手、平成14年度発掘調査を開始する。
５月16日　人力による調査作業を開始する。上層遺構群調査開始。
８月５日　平成13年度調査区第Ⅰ期石垣部分の再調査に着手する。
９月12日　上層遺構群全景写真撮影。下層遺構群の調査に移行する。
９月18日　第Ⅰ期石垣が、今年度調査区まで伸びてきていることを確認。
９月30日・31日　折尾・大庭、東京出張（文化庁記念物課）
10月10日　古墳石室敷石を検出。鴻臚館造営によって破壊されたものと確認。
11月11日　第Ⅰ期石垣の南約10mで石列出土（第Ⅱ期石垣）。
11月25日　重機を入れて、第Ⅱ期石垣前面を掘削。
12月18日　鴻臚館跡調査研究指導委員会、現地視察。
12月19日　鴻臚館跡調査研究指導委員会、会議、報道発表。
12月21日　市民対象、現地説明会。
平成15年１月10日　下層遺構群全景写真撮影。
２月21日　第Ⅱ期石垣写真実測用撮影
４月24日・25日　埋め戻し用マサ土搬入、埋め戻しに着手。


（1）上層遺構遠景（北から）　（2）上層遺構全景（北から）

Ph.１　第20次調査検出上層遺構

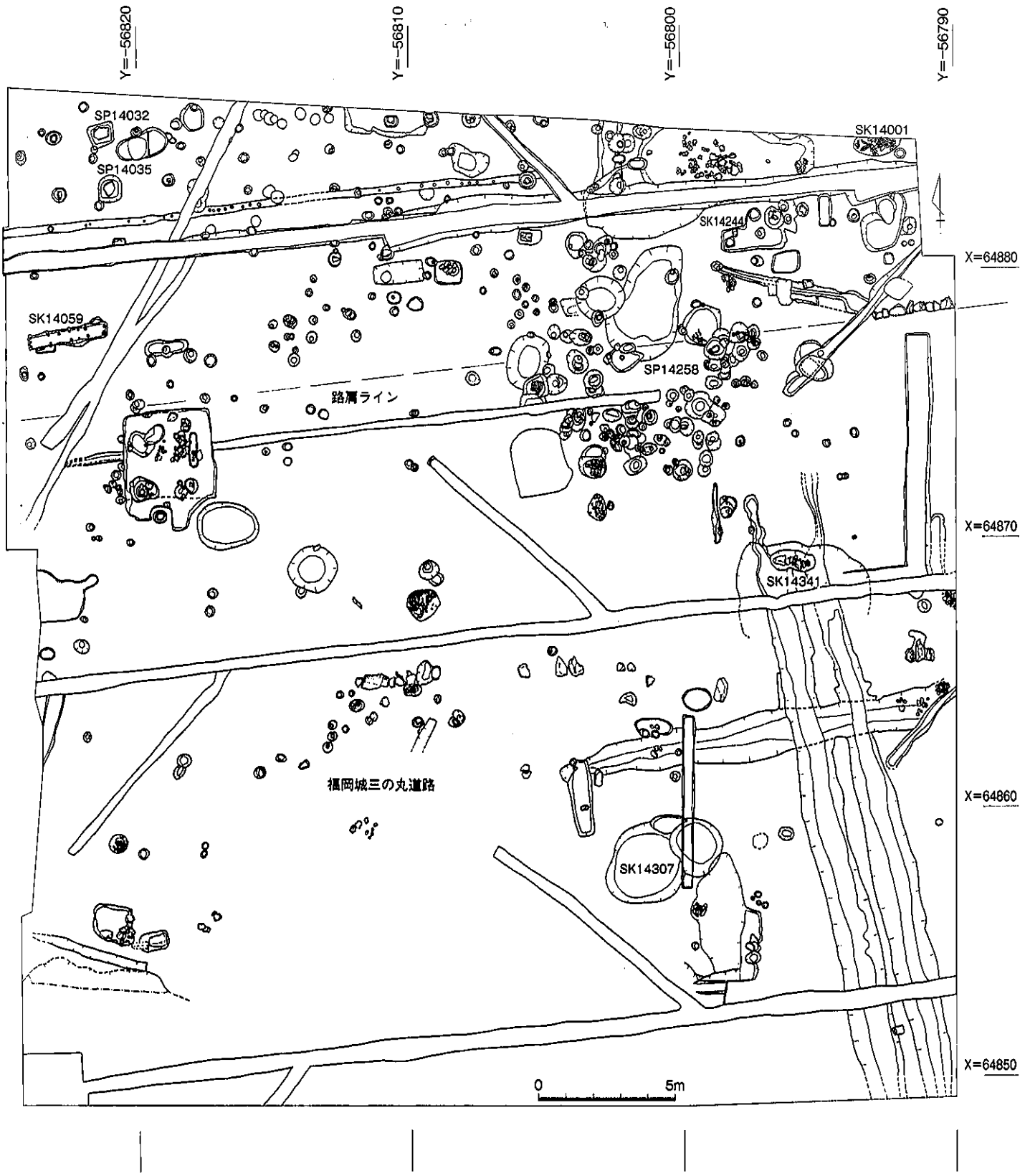


Fig.4　上層遺構全体図（1/200）

5月22日～27日　西南大学名誉教授唐木田芳文先生による、石垣の石材調査
6月4日　埋め戻し終了。平成14年度発掘調査を終了する。

（2）上層遺構群の概要

調本年度の調査区は、すべて野球場のグラウンド内に収まっており、削平を受け、排水用暗渠が規則的に、縦横に走っていた。また、野球場の整地、改修に伴うと思われる撹乱坑が数基見られた。

近世については、福岡城三之丸を東西に走る道路敷地部分が大半を占める。道路北側側溝と中央に掘りこまれた溝（暗渠か）、側溝の北に展開した家臣屋敷の遺構などが出土した。

家臣屋敷の遺構としては、布掘り状の塀跡、掘立柱穴、池と思われる不整形土坑、廃棄土坑などがある。削平のため、礎石などの掘り込みを伴わない遺構は残っていない。

中世の遺構は、柱穴、土坑、池状遺構などがある。土坑には、壁に石を積み上げた石積み土坑が見られた。出土した土師器、瓦質擂鉢から、15世紀代と思われる。池状遺構は、大型で浅い窪みを呈し、埋土中には近世の遺物は混じらず、16世紀前半までの遺物が出土している。

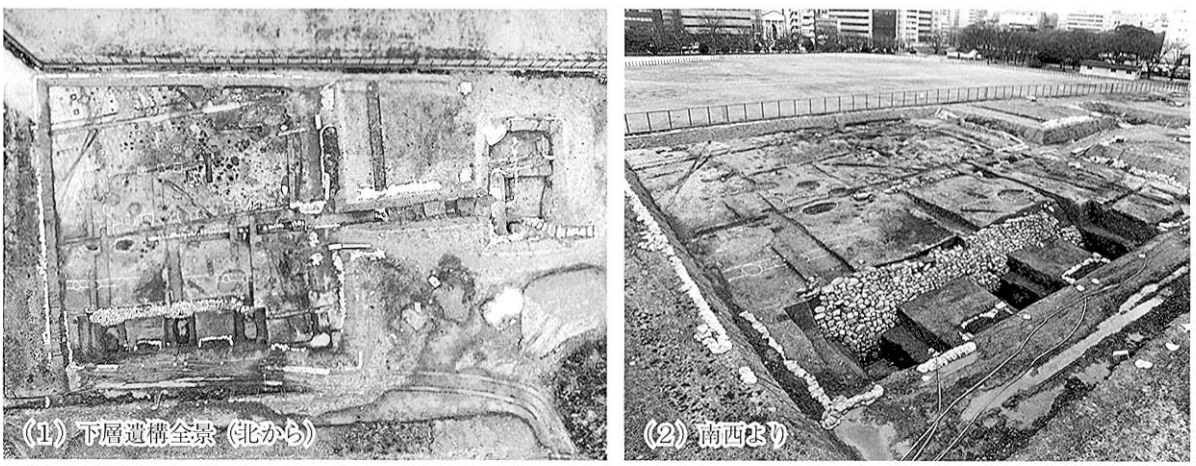
（3）下層遺構群の概要

鴻臚館時代およびそれ以前の遺構であるが、野球場による削平のため検出面としては中世以後の遺構と同一面で検出されており、層位的に分離できるものではない。

鴻臚館時代の遺構としては、柱穴、土坑、石垣、谷（堀）などを検出している。柱穴には、後述する第Ⅰ期の掘立柱建物・塀を構成する柱穴から、鴻臚館時代の遺物が出土するものの時期が判然としないものまで含まれる。ＳＰ14258の埋土上層から、大粒の砂金が出土している（Fig.59－13）。古代の柱穴と考えているが、時期を特定できない。土坑の大部分は、廃棄土坑と思われる。９世紀代から11世紀前半のものまで見られる。土師器を主に廃棄した土坑が見られ、鴻臚館内での出土事例としては稀である。石垣については後述するが、盛土整地を受けて支える機能を持つ。旧地形の谷は、鴻臚館の造成にともなって、次第に幅を減じ、第Ⅱ期の８世紀前半には、幅20mの堀状を呈していた。

鴻臚館以前の遺構としては、古墳の周溝と石室敷石が出土した。周溝内におかれた須恵器から、６世紀末～７世紀初頭頃と考えられ、鴻臚館造成にともなって破壊された古墳であろう。

平成14年度の発掘調査では、鴻臚館の造成の過程と、各時期を示す遺物の手がかりを得ることが出来た。その内容については、以下に略述し、第三章でまとめることとする。


（1）下層遺構全景（北から）　（2）南西より

Ph.２　第20次調査検出下層遺構

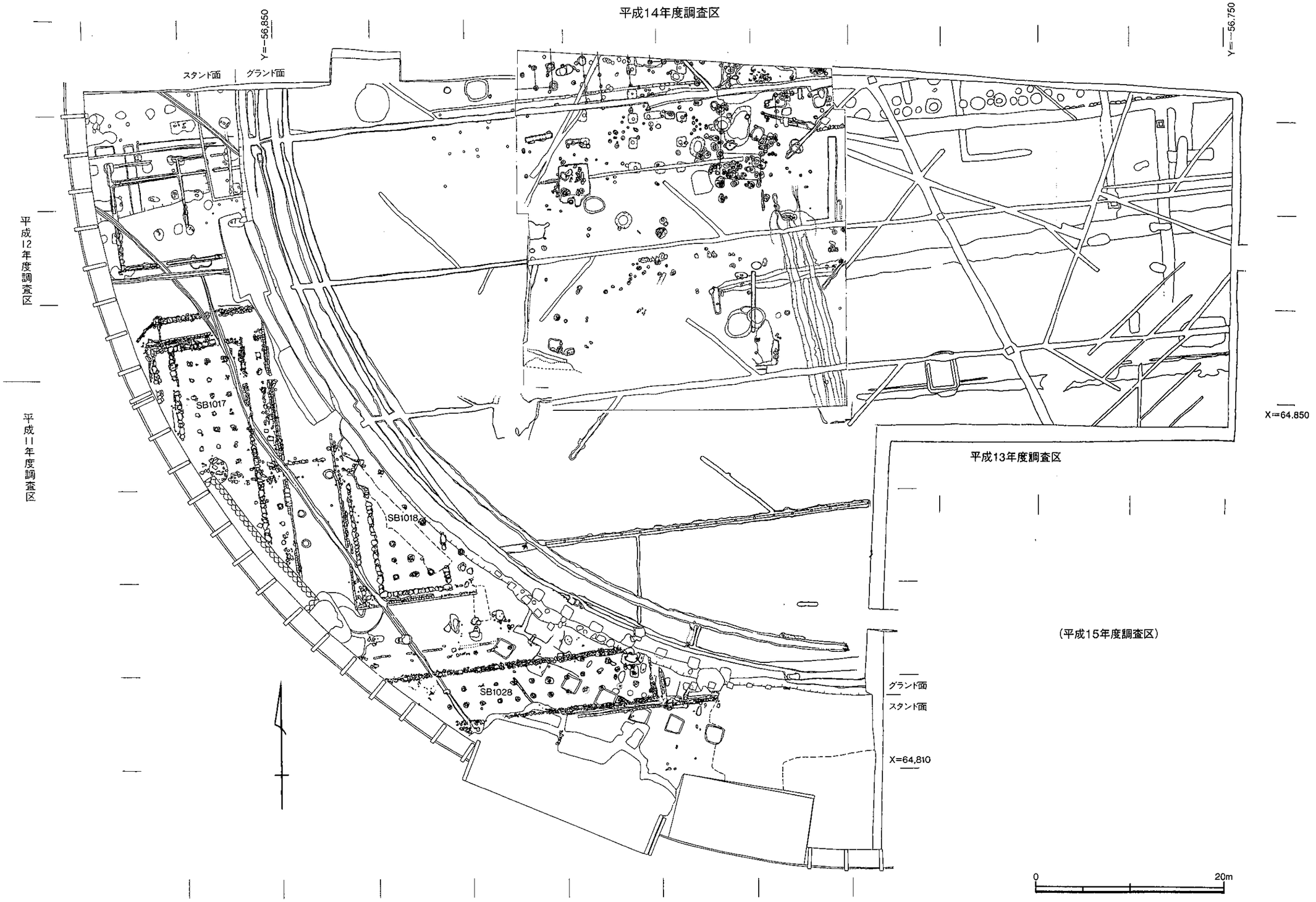


Fig.5　第Ⅳ期調査区　平成11～14年度調査区　中世～現代遺構平面図（1/400）

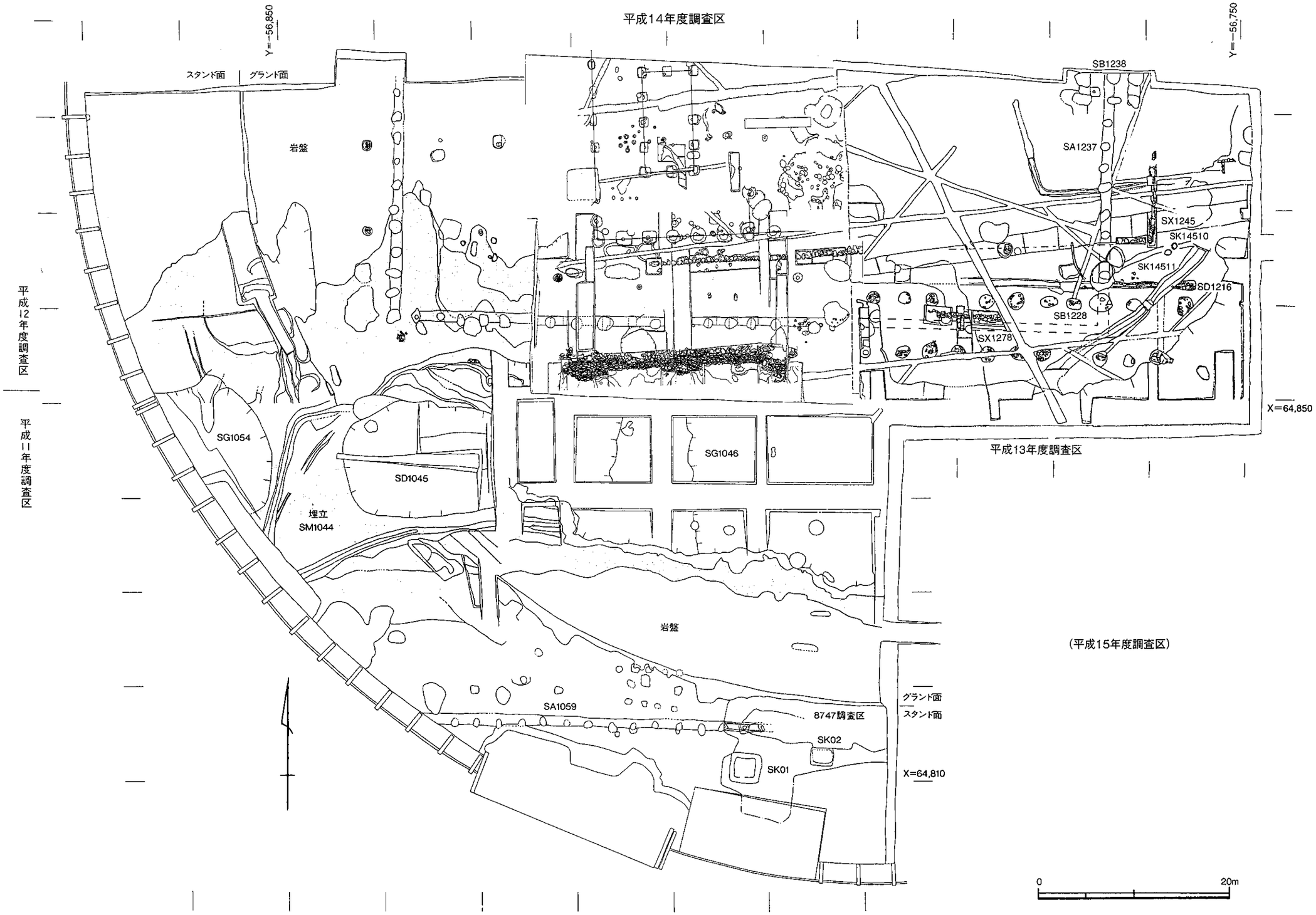


Fig.6　第Ⅳ期調査区　平成11～14年度調査区　古代・中世遺構平面図（1/400）

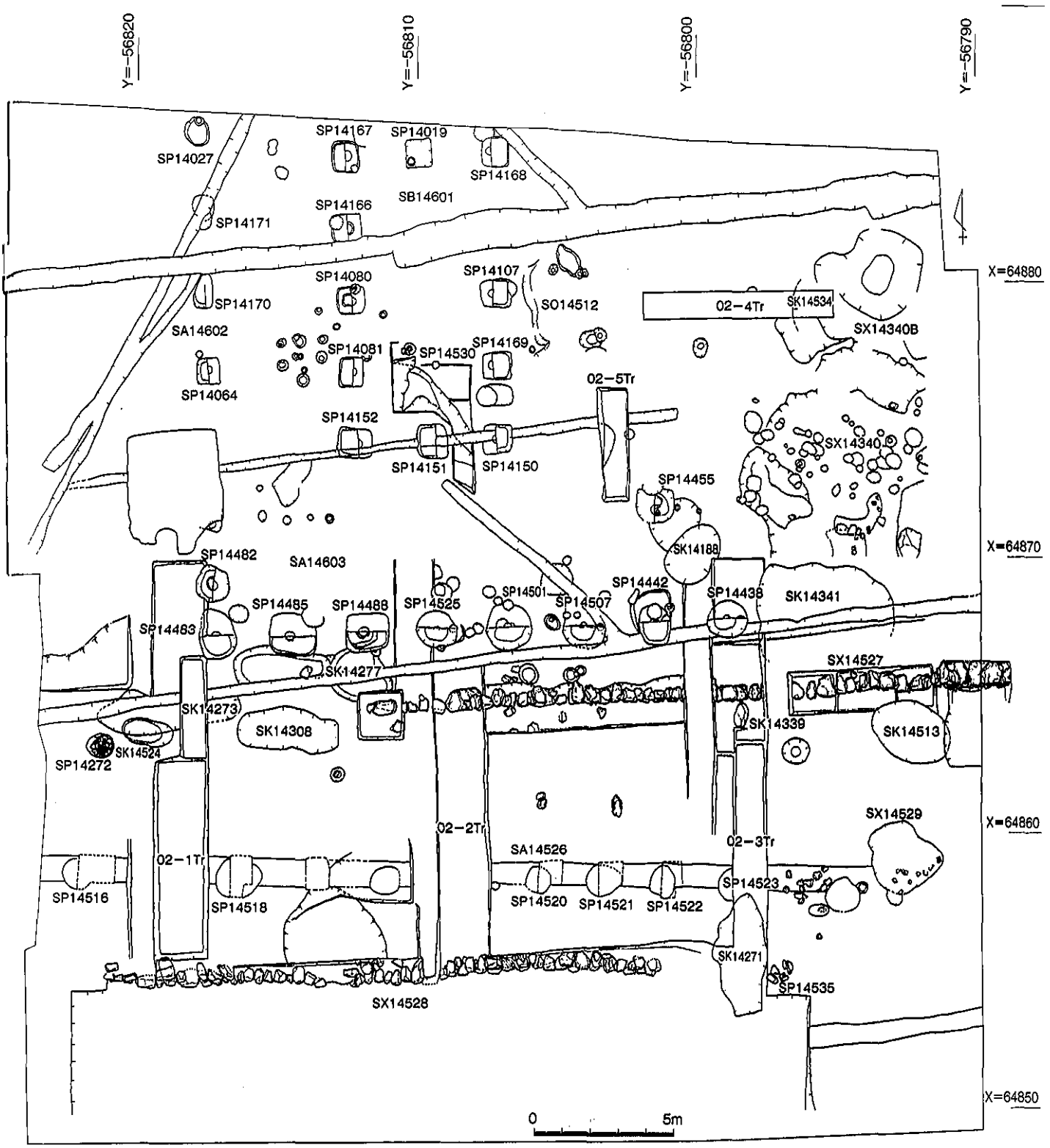


Fig.7　下層遺構全体図（1/200）

2．平成14年度調査検出の遺構と遺物

平成14年度調査は、平成13年度指導委員会の指導に基づき、北館第Ⅱ期布掘り掘立柱列（塀）南辺の中央部分の確認を主たる目標として調査区を設定した。面積は約1,800㎡である。

（1）遺構の遺存状態について

試掘調査の知見の通り、グランド中央部は戦災焦土層が広く残っており、球場建設時の削平は最小限にとどまっている。しかし、調査区北西部分は、焦土直下で地山層が露出しており、旧陸軍歩兵24連隊段階以前に既に大きく削平を受けた事を示している。福岡城関係の柱穴などは、良く遺存しており、築城時点での造成によるものと推測される。

（2）戦後構築物

昭和20年６月19日の福岡大空襲によって消失した旧陸軍歩兵24連隊跡地には、昭和23年10月福岡平和台総合運動場が建設され、第３回国体会場として利用された。この際のサッカー競技場跡は、昭和24年から25年にかけ大規模な工事を行い平和台球場として生まれ変った。この間の突貫工事によって、競技場部分は大きく掘り下げられたようで、それ以前の遺構は削平を受けている。

なお、従来戦災焦土層と認識されていたガラや炭を含む堆積物は、サッカー競技場を造成した際に名島火力発電所から運んで地均しした石炭ガラであり、被災以前の遺構面を覆うものではない。

遺構検出面には、平和台球場関係土管・暗渠などが縦横に掘られているが、撹乱として処理した。

（3）旧陸軍歩兵24連隊関係遺構

競技場造成の削平により、ゴミ穴２基が検出されたに過ぎない。

（4）福岡城関係遺構

調査地点は、福岡城三の丸を東西に通る道路から北側屋敷地にかけての部分に当たる。道路側溝・建物柱穴・土坑などを検出した。

ＳＫ14001は、犬を埋葬した土坑である。犬の全身骨格が出土したが、頭骨は見られなかった。しかし、首を大きく背後にそらした状態からは、頭部を欠損した状況での埋葬あるいは廃棄は考えにくく、頭骨は埋葬後に何らかの理由で失われたものと考えたい。

ＳＫ14059は、長方形の細長い、箱型の土坑である。長辺約300cm、短辺約60cm、検出面からの深さは35cmをはかる。長側壁沿いの対応する位置に木杭が打ち込まれており、上部に架構したことを推測させる。**ＳＫ14244**も同様の構造だが、長辺240cm、短辺80cm、深さ35cmとやや幅広い形を取る。杭は、ＳＫ14059ほど規則的には打たれていない。いずれも、三の丸道路に面した位置で、道路に沿うように掘られている。狭長で箱型の割には、側壁など素掘りで手を入れていないこと、道路沿いで汲み取りが屋敷外から可能である点から便槽を想定したい。

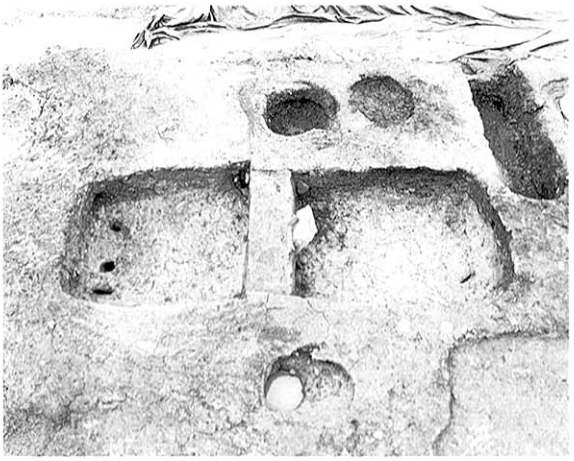
柱穴は、三の丸道路北側から道路の軸線に対応した方位で、多数検出されている。ＳＰ14032とＳＰ14035は、対になる柱穴と思われる。**ＳＰ14032**は約90cm四方の正方形を呈し、深さ50cm、**ＳＰ14035**は100cm×90cmの長方形を呈し、深さ60cmをはかる。底面には、ともに厚さ５cmほどの扁平な板石を据え、直径30cmほどの丸柱を受ける。両者の柱間は、220cmである。これに対応して西側に直径50cmほどの円形柱穴があり、規模は異なるが、一連の構造物に由来するものと思われる。

このほか、柱穴の並びが想定できるものはあるが、ほとんどが調査区外に続くようで、限られた検出範囲からは、検証できない。

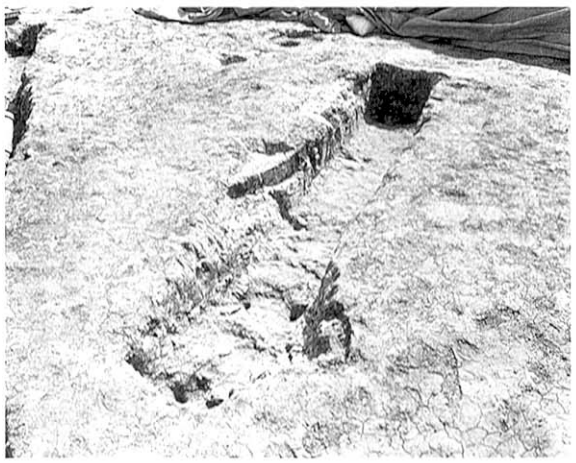
ちなみに、三の丸には大身の家臣屋敷が並んでおり、元禄12年(1699)、延享３年(1746、寛政10年写し)の絵図には、矢野市太夫の屋敷とされている。



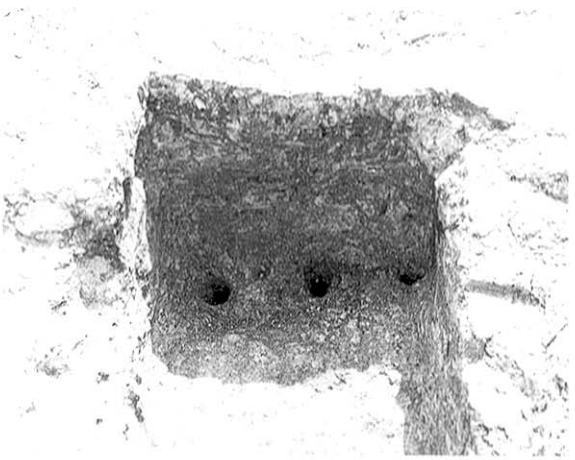
Ph.３　ＳＫ14001（北西より）



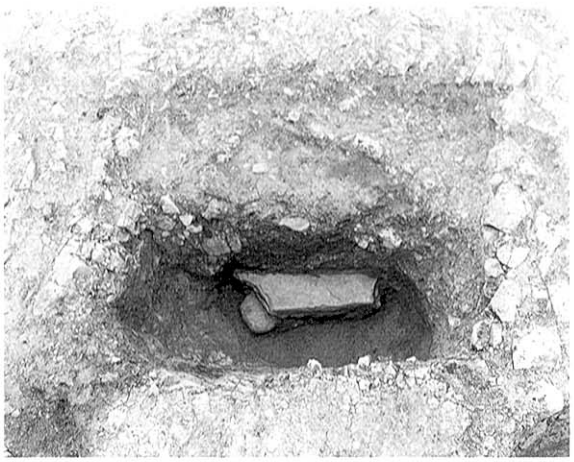
Ph.４　ＳＫ14244（南より）



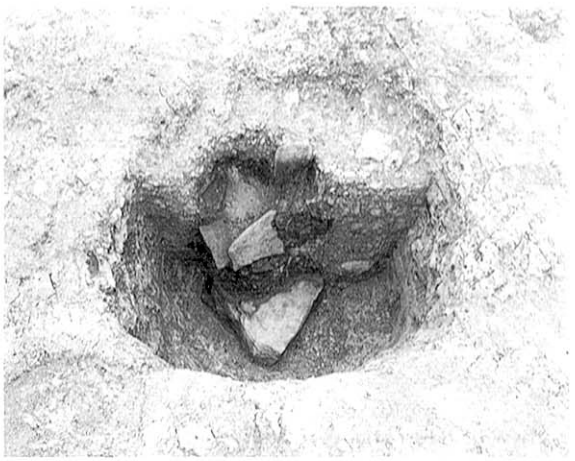
Ph.５　ＳＫ14059（北東より）



Ph.６　ＳＫ14059西側小口（東より）



Ph.７　ＳＫ14032半割（南より）



Ph.８　ＳＫ14035半割（南より）

（5）中世の遺構

11世紀中頃を境に遺構・遺物の出土は、激減する。既往の調査では、室町時代の梵鐘鋳造遺構や地下式横穴、懸け仏の出土などから、15世紀頃を中心として寺院の存在が推定されている。

平成14年度の発掘調査においても、中世に関しては顕著な状況は確認できなかった。柱穴の中には、古代とも近世とも言えないものがあり、中世に属する可能性がある。そのほか、土坑、池状遺構などを調査したので、以下にその概要を記す。

ＳＸ14340・ＳＸ14340B

平成14年度調査区の東辺付近から検出した不整形の落ち込みである。砂礫混じりの粘質土を埋土とする、浅い皿状のくぼみで、平面的にはくびれを挟んで南側のＳＸ14340と、北側のＳＸ14340Ｂとに別れる。両者は、底面の形状から別の遺構と思われるが、間に鞍部状の低い高まりを設けた一連の遺構と考えることも可能である。平面的形状、浅い皿状を呈し明瞭な壁を持たない点、埋土に砂礫が混入していることなどから、池の可能性を想定したい。

ＳＸ14340出土遺物を、Fig.8に示す。**１～３・13**は、鴻臚館時代の遺物である。**１**は、**白磁**の皿である。体部上半は、外側から縦に篦上工具で押して、輪花に作る。**２**は、**越州窯系青磁**の皿である。体部はわずかしか遺存しないが、縦に歪ませており、輪花にしたものと思われる。見込みには、沈線で花文を描く。全面施釉で、外底部には目跡が並ぶ。**３**は、**広東青磁**の碗で、梅県窯の製品と思われ

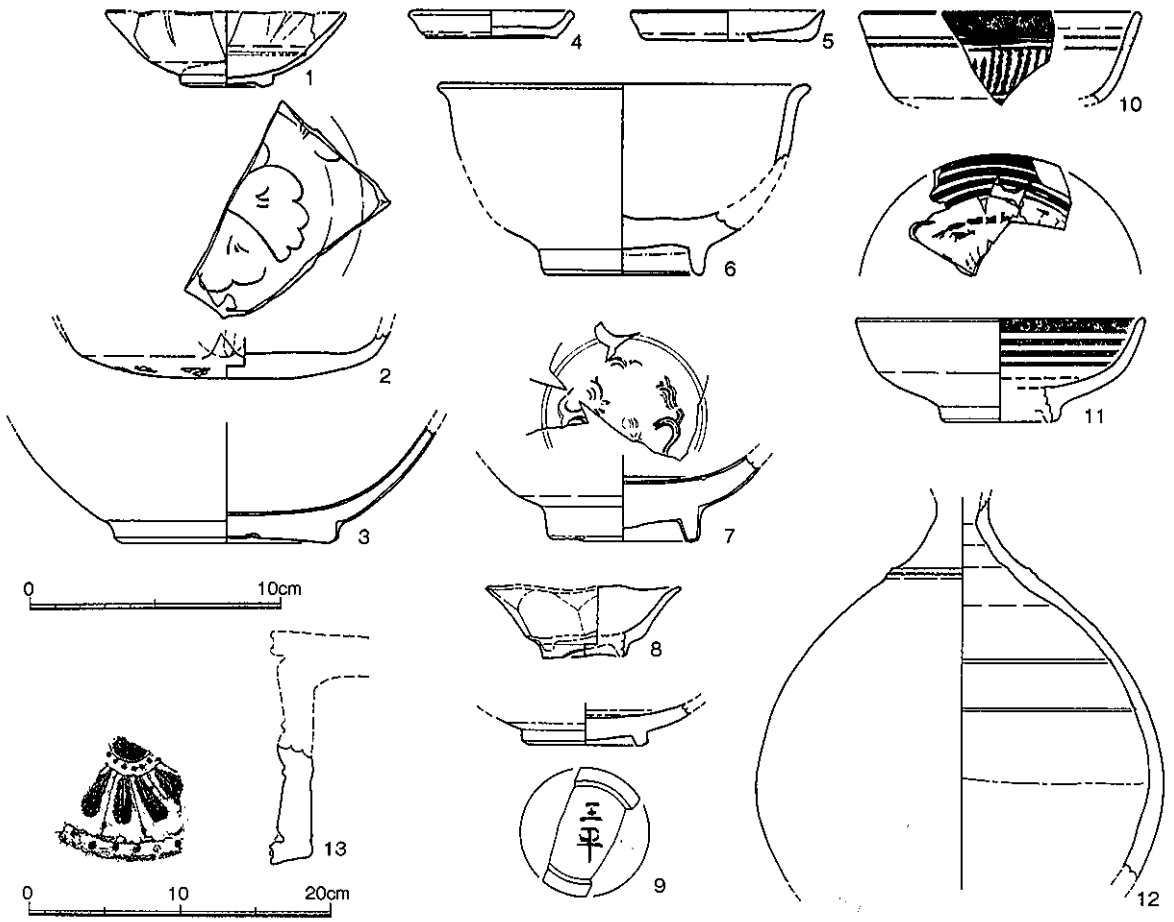


Fig.8　ＳＸ14340出土遺物実測図（1/3, 13…1/5）

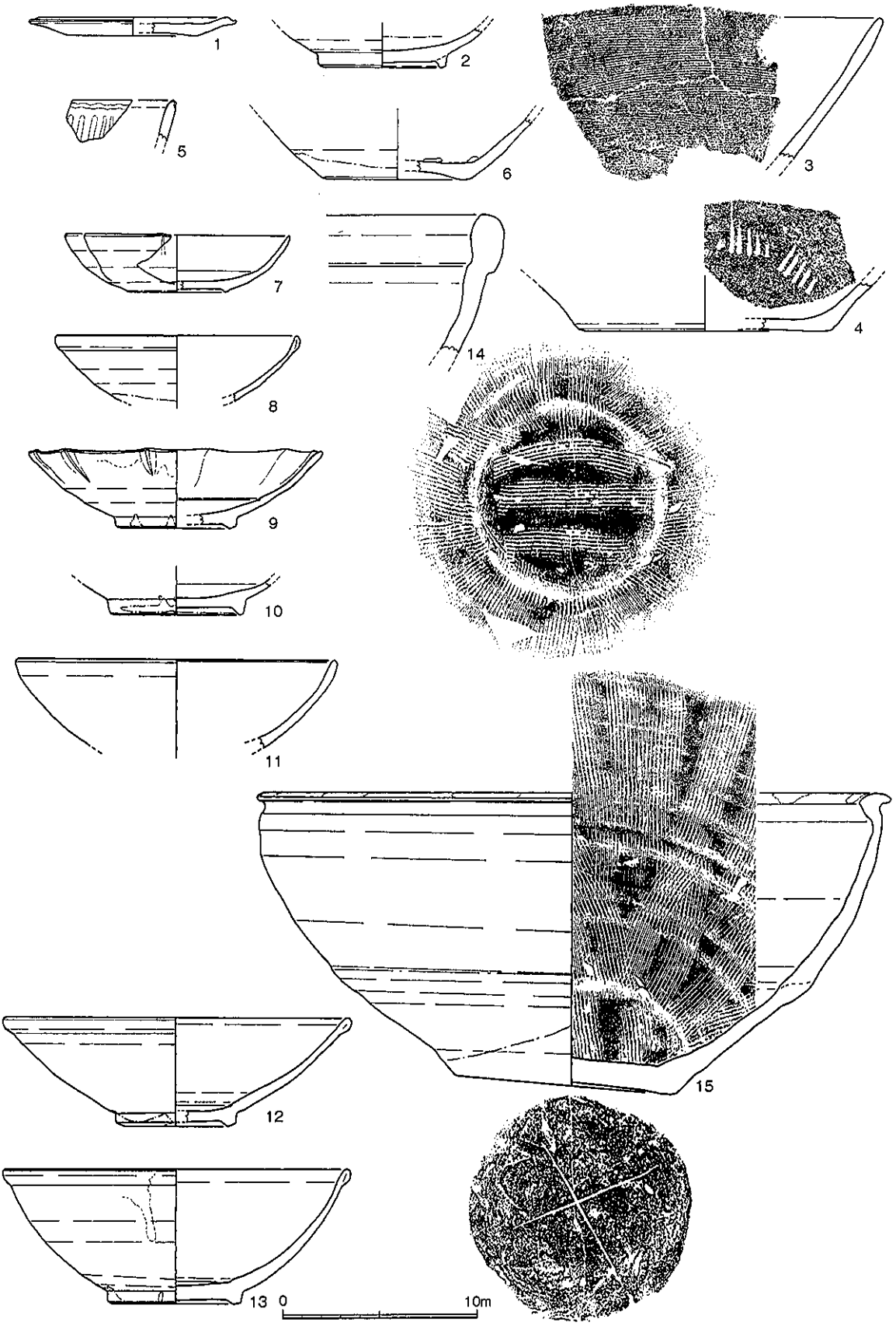


Fig.9　SX14340B出土遺物実測図（1/3）

る。胎土は淡茶色で粗く、白化粧の上に緑色の透明釉を施す。底部中央に丸く凹線を入れ、蛇の目高台に作る。４・５は、**土師器**の皿である。底部は、回転糸切りする。６・７は、**竜泉窯系青磁**碗である。７の見込みには、印花文が見られる。８・９は、**白磁**である。８は、体部を面取りした八角杯で、高台はアーチ状に削り込む。９の外底部には「王平」の墨書が見られる。10～12は、**朝鮮王朝陶磁器**である。10・11は、**粉青沙器**の小碗である。12は舟徳利で、緑褐釉の粗雑な釉が薄く施されている。13は、**軒丸瓦**である。Fig.59－17に類品を図示している。

ＳＸ14340Bの**出土遺物**をFig.９に示す。１は、**土師器**皿である。底部は回転篦切りで、胎土はきめ細かく精良である。２は、**灰釉陶器**の碗である。見込みには、円形の重ね焼き痕跡がある。釉は刷毛塗りだが、ほとんど剥落している。黒笹14号窯式であろう。３は、**土鍋**である。外面には厚く煤が付着する。４は、**瓦質土器**のすり鉢である。５本を単位としたすり目が刻まれるが、磨耗が著しい。５は**竜泉窯系青磁**碗で、沈線で菊花様の花弁を刻む。６は、**越州窯系青磁**碗、７～13は**白磁**で、鴻臚館に由来する遺物である。15は、**陶器**のすり鉢である。外面には、灰褐色の不透明釉が、薄くかかる。

ＳＸ14340・ＳＸ14340Bは、出土遺物から15世紀代に属するものと思われる。

ＳＫ14341

側壁に礫を積み上げた、石積み土坑である。調査の都合上、北側二分の一しか調査していない。長辺350cm、推定短辺150cmで、深さ110cm前後を測る。大小の石を用い、雑然と積み上げている。

出土した土師器皿、瓦質こね鉢から、15世紀代の遺構と思われる。



Ph.９　ＳＫ14341（東より）

（５）筑紫館・鴻臚館関係遺構

①　第Ⅰ期（７世紀後半）

鴻臚北館における第Ⅰ期は、平成13年度調査において、石垣遺構が第Ⅱ期の布掘り掘立柱列と切り合い関係にあり、これに先行することをもって設定された。

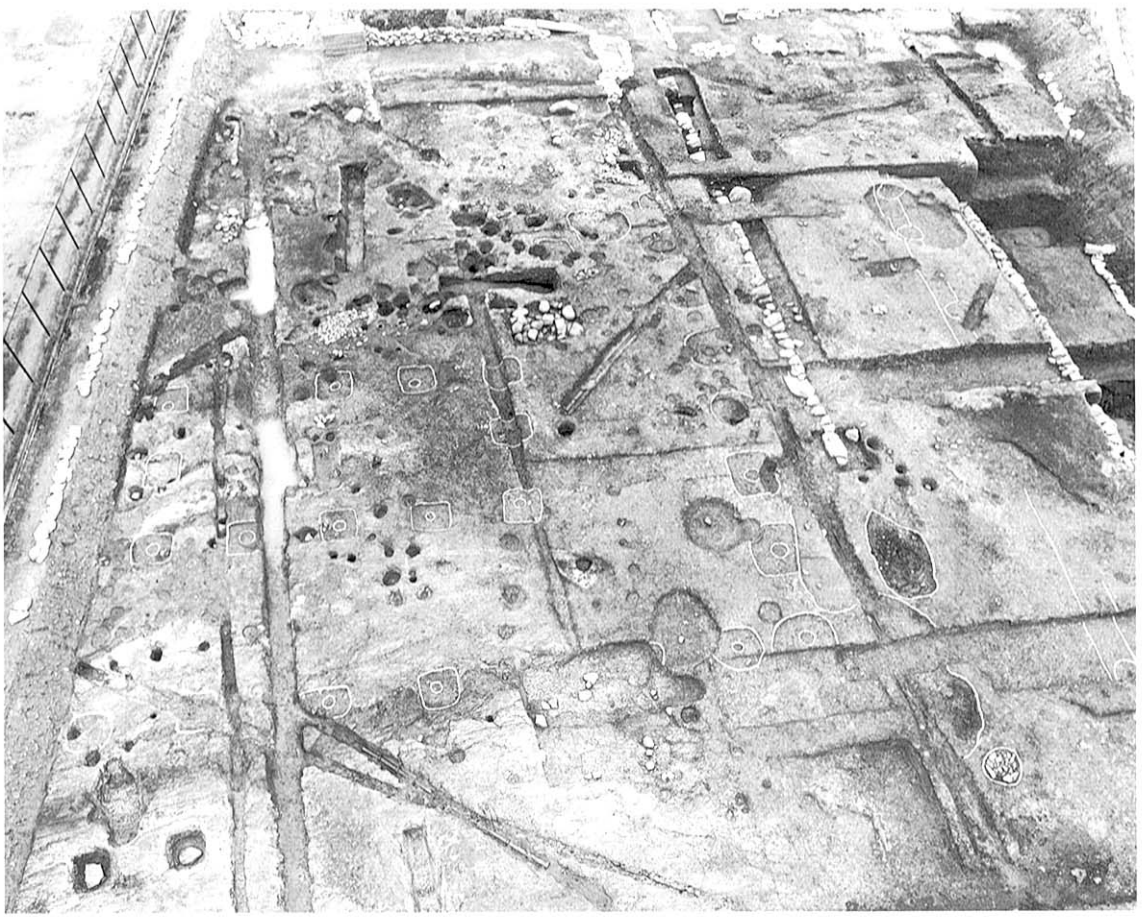
平成14年度調査では、この石垣遺構の再調査とともに、その延長部分の石垣、掘立柱建物１棟、掘立柱列２条を検出している。

掘立柱建物および柱列は、時期を明瞭に示す遺物を欠くが、石垣と方位を一にすること、石垣の端部と掘立柱列の角部分に関連がありそうな配置を取ることから、同時期の遺構と判断した。

遺構検出面の観察から、地山の岩盤は、調査区西辺の北半分から、南辺の西半分のほぼ三角形部分で露出している。その東側、南側は、鴻臚館時代の盛土層であるが、この境界は、第Ⅰ期の掘立柱建物と柱列を横断しており、また後述する古墳が、掘立柱建物の直下で検出された点から見て、鴻臚館の最初の造営段階で、大規模な地形改変が行なわれたことがわかる。これは、痩せ尾根状に北東に伸びた丘陵の頂部を削って、東と南に埋め立てを行なって、敷地を確保したもので、その土留めの機能を負ったのが、石垣遺構であったと考えられる。

ＳＢ14601

調査区中程から北辺にかけて検出した、梁間二間、桁行四間の南北棟である。東辺、北から２本目の柱穴を平和台野球場の排水暗渠のため失っている。柱間は、芯々で260cmをはかる。



Ph.10　第Ⅰ期遺構全景（西より）

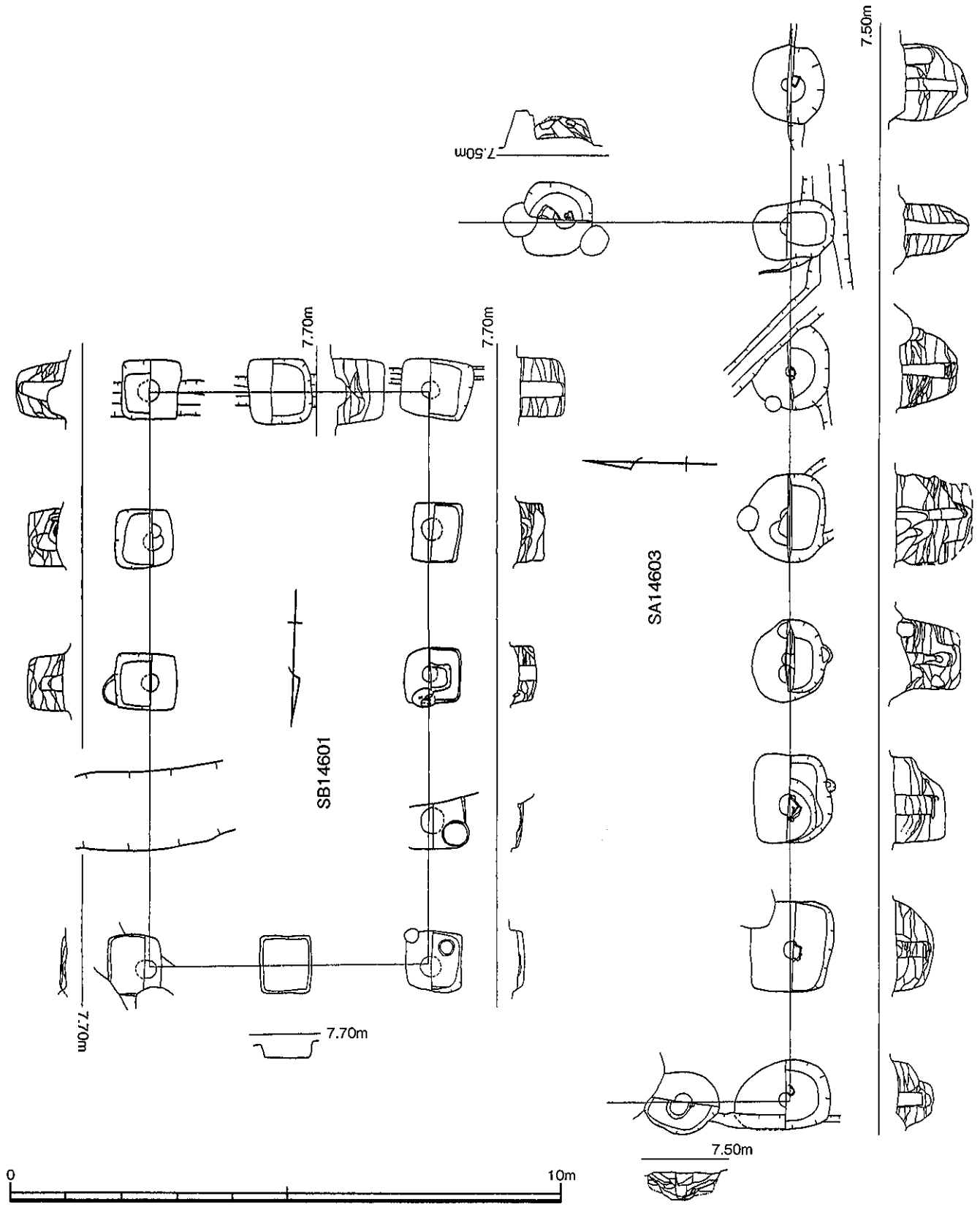


Fig.10　第Ⅰ期掘立柱建物実測図（1/100）



Ph.11　ＳＢ14601（北より）



Ph.12　ＳＢ14601柱穴断面

柱穴は、一辺100cm前後のほぼ正方形をとる掘り方で、そのほぼ中央に径30 ～ 40cmの丸柱を立てる。柱の底には、白色の粘土を敷いた痕跡が認められる。

掘り方の深さは、北で浅く、南に下るにつれて深くなる。また、柱痕跡を見ると、四隅の柱を除いて、必ずしも掘り方の底に達していない。床高と柱材の長さに合わせて、根入れの深さを調整した可能性を考えることができよう。

ＳＡ14602

ＳＢ14601の西に5.3m離れて検出した掘立柱の南北列である。

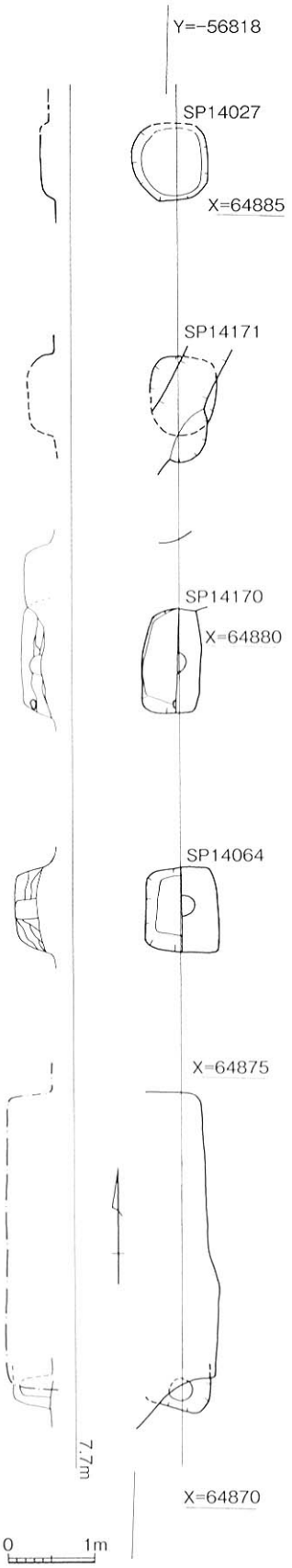
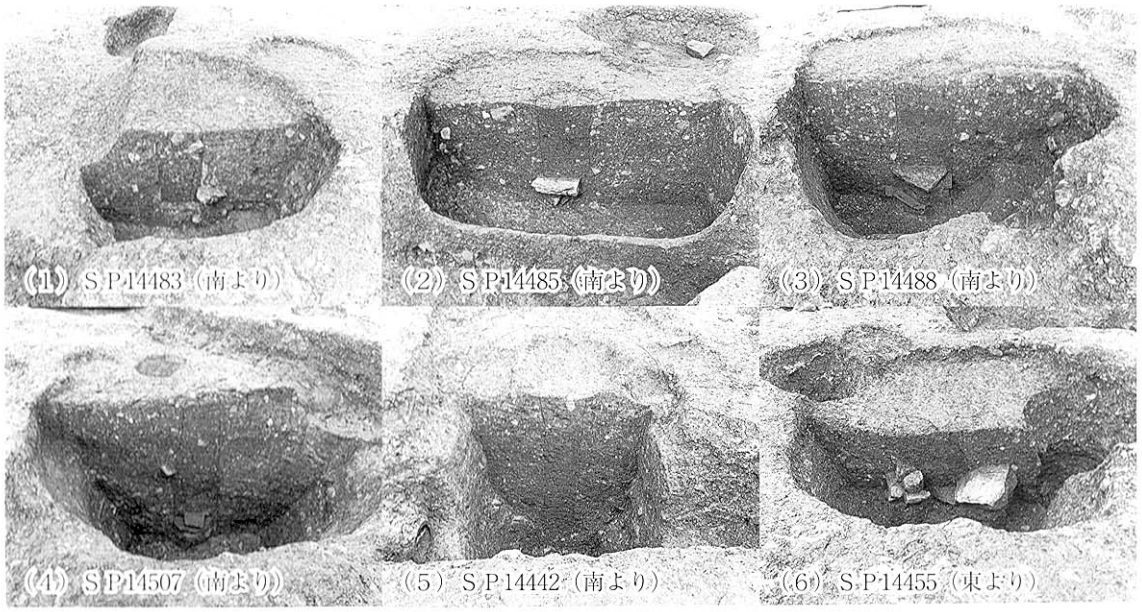


Fig.11　SA14602遺構実測図（1/80）



Ph.13　ＳＡ14603柱穴断面

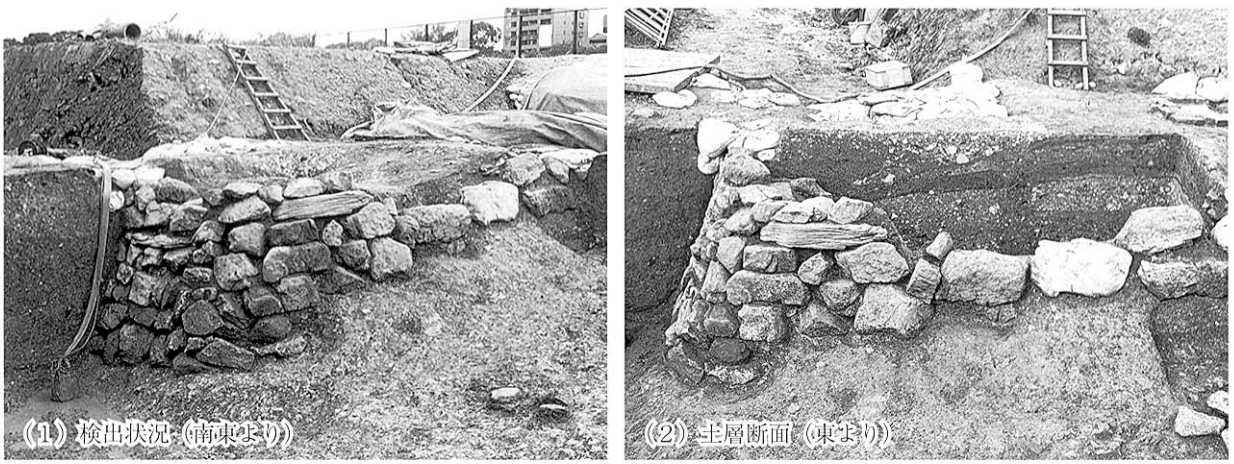
五間分を検出したが、さらに北に続くものと推測できる。南は、後述するＳＡ14603に繋がるものと思われるが、柱穴の形状、柱間など相違点があり、一体の構造物とは考えがたい。

おおむね長方形の掘り方を持つが、規格性はない。柱痕跡から、径25 ～ 30cmの丸柱が想定できる。柱間は、芯々で280cmである。掘り方の深さは、ＳＢ14601と同様、北から南に次第に深くなる。

ＳＡ14603

調査区のほぼ中央を東西に走る掘立柱列である。西端で直角に北に折れ、ＳＡ14602に繋がるが、前述したように一体の構造物とは考えがたい。東については、さらに伸びることが予想されるが、15世紀の石積み土坑ＳＫ14341に切られ、本調査区内ではその延長は確認できなかった。後述する13年度調査区内での第Ⅰ期石垣の土層断面に、柱穴が表れており、石垣との距離、柱穴の深さがＳＡ14603と共通することから、ＳＡ14603が第Ⅰ期石垣の東角まで続いていた可能性は考えられる。

また、七本目の柱穴から直角に4m北に、柱穴が発見された。柱痕跡は、斜め約45度で南に傾いている。柱穴の形状・埋土の共通性からＳＡ14603に伴うものと思われる。



Ph.14　第Ⅰ期石垣ＳＸ1245

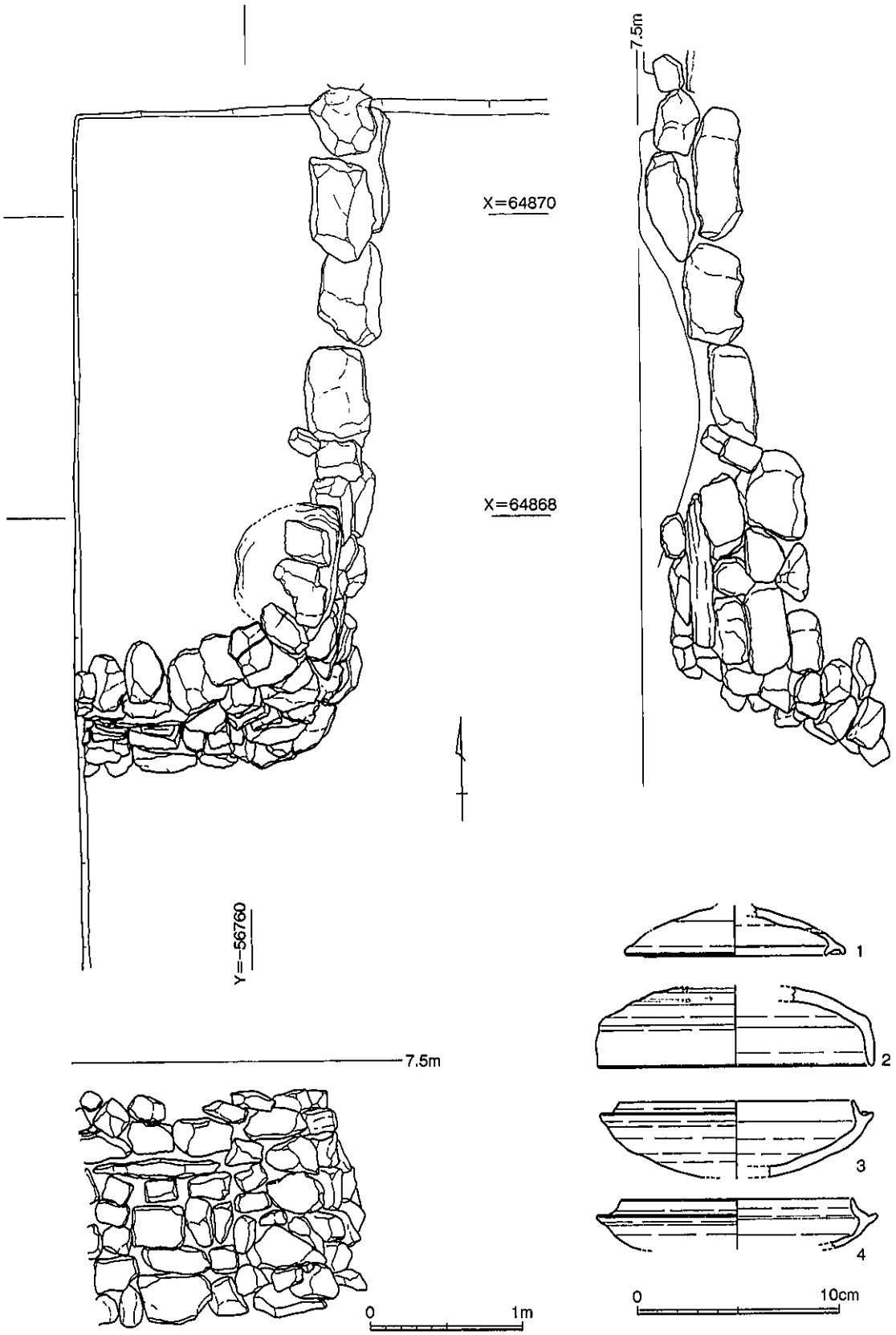
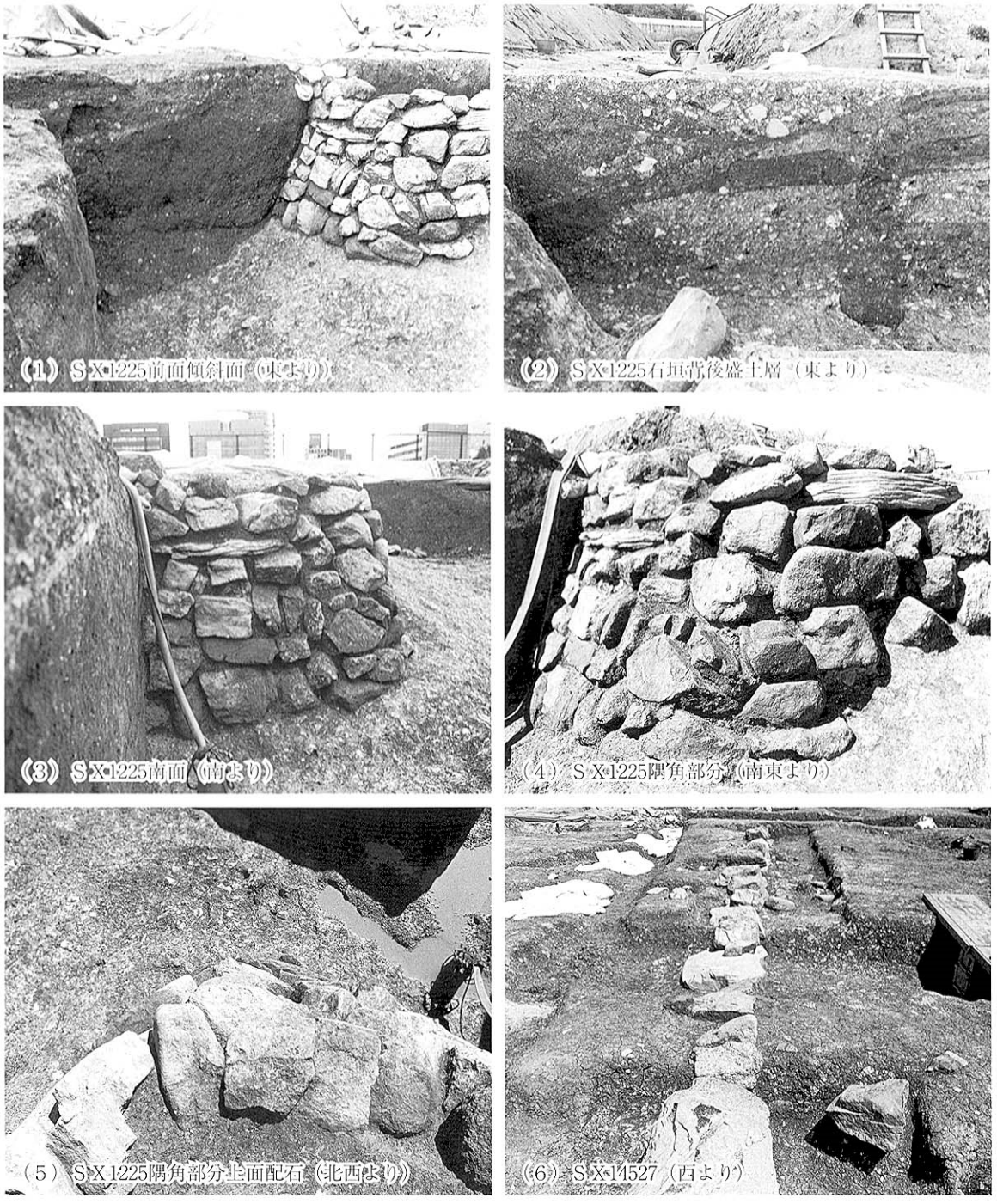


Fig.12　第Ⅰ期石垣ＳＸ1245遺構実測図（1/40）・出土遺物実測図（1/3）

東西列の柱間は、芯々で260cmをはかるが、掘り方の形状と柱痕跡は、西側３本と東側５本とで異なる。前者は、長方形の掘り方に径30～35cmの柱を立てる。後者は、略円形の掘り方で、径25cmほどの柱を立てる。堀方と柱の根入れは、後者で深い。第Ⅰ期石垣の西端は、西から３本目の柱穴の前で止まっており、前者の部分に、出入口のような機能を与えることも可能であるかもしれない。

ＳＸ1245・ＳＸ14527（第Ⅰ期石垣）

平成13年度の調査で、東辺と南辺の角ＳＸ1245が確認されたもので、14年度は角部分の再調査と西



Ph.15　第Ⅰ期石垣ＳＸ1225・ＳＸ14527細部

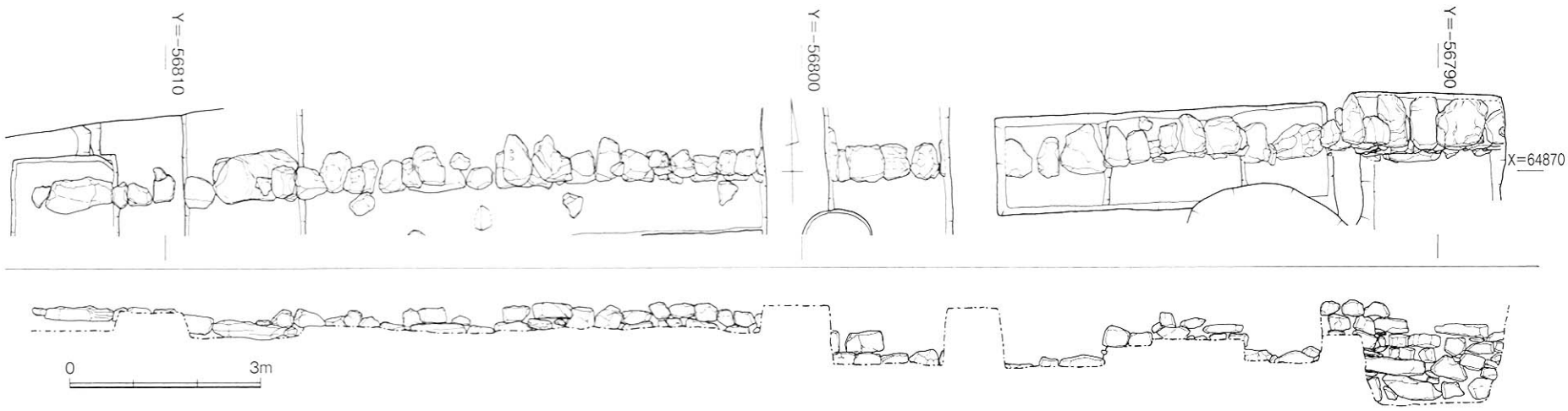


Fig.13　第Ⅰ期石垣ＳＸ14527遺構実測図（1/100）



（1）02-3Tr　S-X14527裏側盛土状況（東より）



（2）SX14527石積状況（南東より）



（3）SX14527立面（南より）

Ph.16　第Ⅰ期石垣ＳＸ14527

に伸びた南辺の調査を行なった。

東辺は、７m分が確認されている。南辺との角が最も高く、急激に段を減らし、北に伸びる。南辺は、平成13年度調査区から14年度調査区まで、一直線に伸びる。東端から、14年度調査区の東側三分の一あたりまでは、ほとんど高さは変らず160cmほどで、そこから西に向かって次第に段数を減らし、西端付近では、一段の石を据えるだけとなる。角部分は、稜を作らず、まったく角を意識していない。角の最上段を見ると、小振りな石を弧状に並べて置いており、角を丸く整える意識があったものと思われる。

石積みは、短い小口面を石垣正面に向け、奥長に積み上げている。控えの石積みや裏込めはまったくなく、土を置きながら、石を据えている。裏側の盛土については、版築を行なった形跡もみとめられない。

東角付近の土層断面を見ると、地山の岩盤層は現れておらず、盛土の斜面を斜めに切りこんで、石垣を築いている状態が見える。

石垣築造以前の盛土であるk層からは、比較的まとまった量の須恵器が出土している。石垣背面では、その他の層からは遺物の出土はない。**k層出土須恵器**の内、図化に耐えたものを示す。**１・２**は坏蓋、**３・４**は坏身である。**１**は、宝珠状の摘みがつく蓋で、口縁のすぐ内側には、身を受ける返りが付く。k層出土遺物の内、最も後出する要素を示すもので、７世紀中頃に位置付けられよう。

このことから第Ⅰ期石垣に関わる盛土整地は、７世紀後半に為されたものと考えられる。

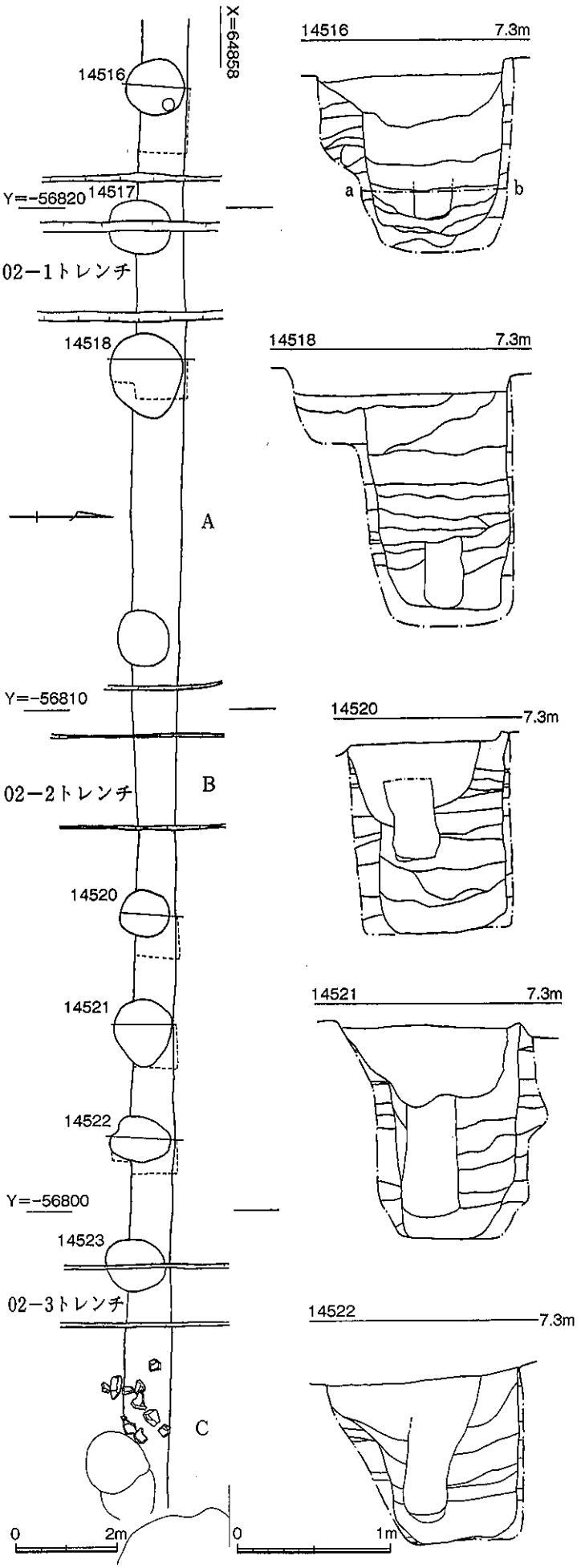


Fig.14　ＳＡ14526遺構実測図（1/120, 1/40）

② 第Ⅱ期（８世紀前半）

第Ⅱ期布掘り掘立柱列の南辺部分と、第Ⅱ期の盛土を受けた石垣遺構が検出された。

第Ⅰ期から第Ⅱ期へは、約10m谷部分の埋め立てを進め、その盛土を高さ4.2mの石垣を築くことで支えていた。布掘り掘立柱列は、石垣の内側に掘削された。また、第Ⅱ期の石垣によって、自然地形の谷は幅20mの堀状を呈し、鴻臚北館と南館とを隔てることになる。

ＳＡ14526（布掘り掘立柱列）

東西方向に、一直線に検出された。布掘り掘方は、検出面上で幅１m前後、深さ110 ～ 150cmをはかる。芯々間240cm前後の間隔で、柱抜き跡が並ぶが、Fig.14に図示したＡ・Ｂ・Ｃの三ヶ所では抜き跡を確認できなかった。また、西端の柱抜き跡であるＳＰ14516の断ち割り調査では、抜き跡の中心からずれて丸く柱痕跡が検出されたため、断面実測は図中のa—bラインでずらして断面を切りなおした。また、ＳＰ14586では抜き跡と思われた土層は深く掘りこまず、横位の堆積土の下層から柱痕跡が見つかった。ＳＰ14520・14521・14522では、柱を抜くと言うよりも、掘り込んだところで柱を切断したと思われる状況が見られた。また、柱痕跡が掘り方底面に達していない状況も見られ、布掘り内での柱の立て方、廃絶時の柱の処理に関して、検討を要すると思われる。

ＳＸ14528（第Ⅱ期石垣）

調査区南辺近くで検出した石垣遺構である。東西に23m分を検出したが、さらに両側に伸びているものと推測される。

石垣の高さは4.2mを測り、下部の２mは80度前後でほぼ直に、上部は55度前後で勾配を持って積ま



Ph.17　第Ⅱ期石垣（南より）

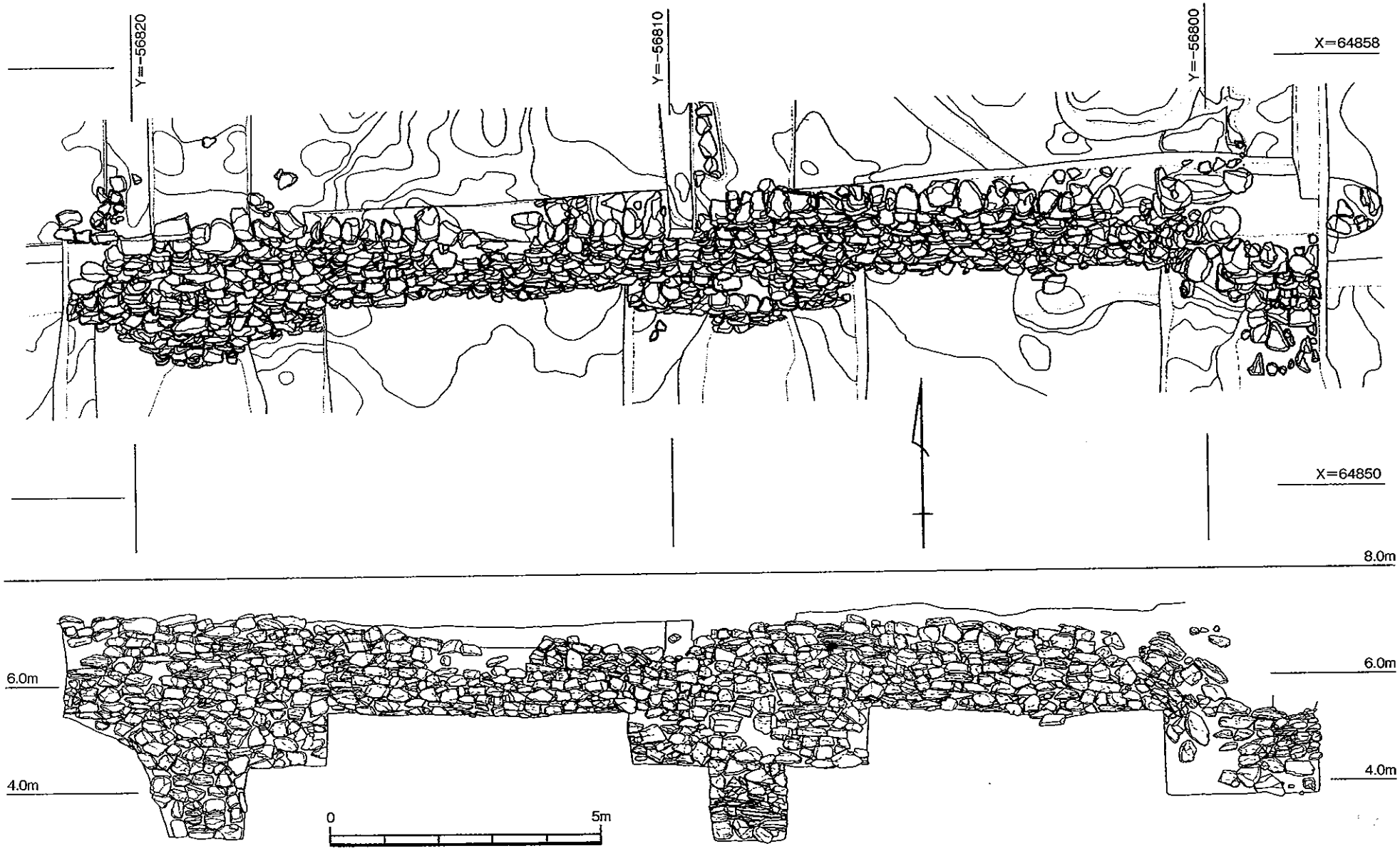


Fig.15　第Ⅱ期石垣ＳＸ14528遺構実測図（1/100）

れている。第Ⅰ期石垣同様、短い小口面を正面に向け、奥長く石を置いて積んだもので、裏込め石や版築はなく、盛土しつつ石を積み上げたものと思われる。石垣の基部は、岩盤と言うよりも谷の自然堆積土層のようで、青灰色の粘質土層の上に乗っている。背後の盛土整地上の降水などは、盛土中を流れ、石垣の隙間からにじみ出ており、そのため東端付近では、築造後間もなく石垣が崩れ、補修している。この補修は、石垣の下部をやや前面に出して勾配をつけて積みなおし、上部は盛土のまま斜めに立ち上げたもので、石垣を貼っていない。

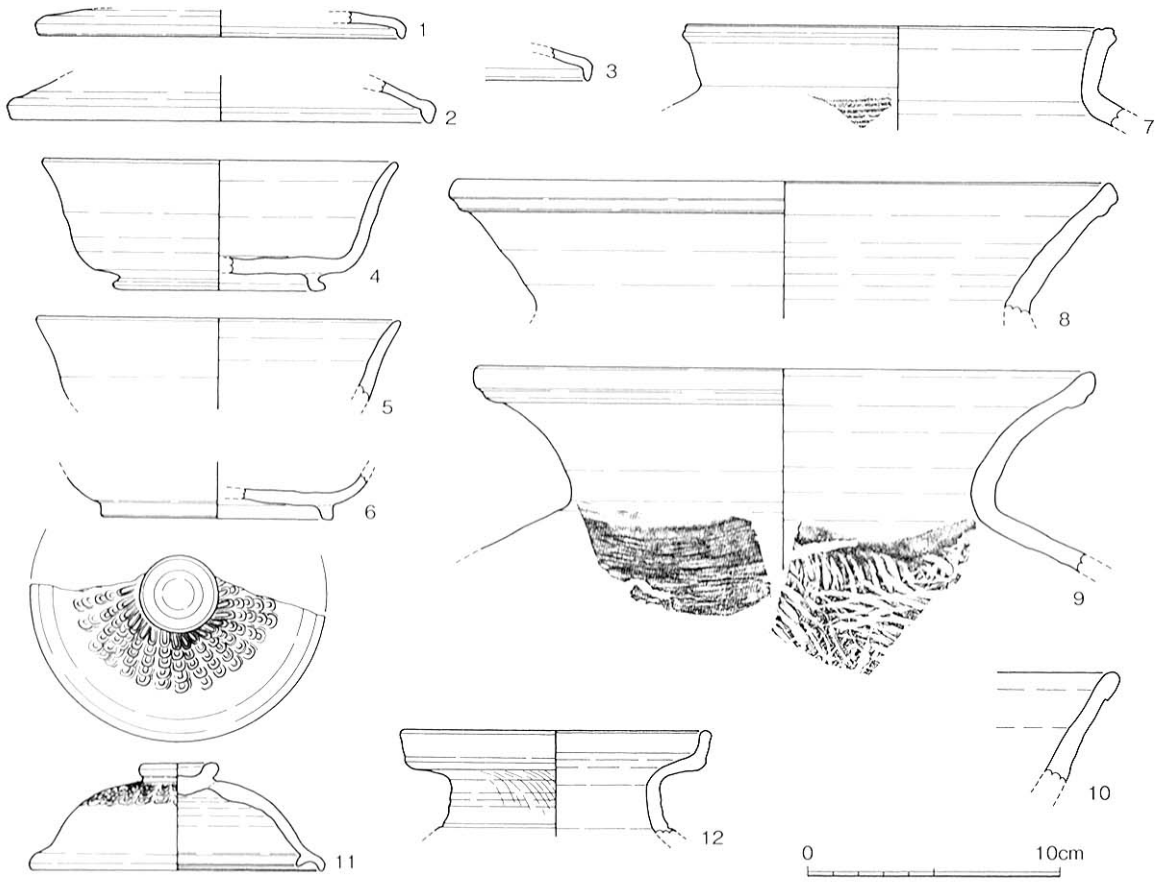
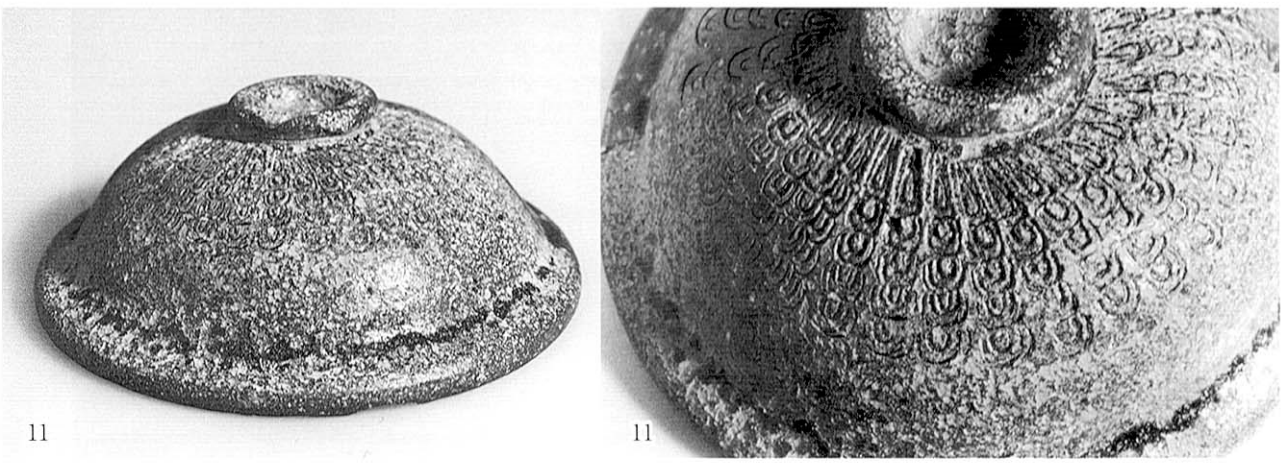


Fig.16　第Ⅱ期石垣ＳＸ14528出土遺物実測図（1/3）



Ph.18　ＳＸ14528出土新羅陶器蓋

石垣の廃絶にあたっては、上部から土を落しこんで埋めこんでいるが、この際に最初に落とされた淡灰褐色土層が、石垣前面を覆っており、その**出土遺物**を**Fig.16**に図示する。**1～10は須恵器、11・12は新羅陶器**である。11は蓋で、天井部に印花文が並ぶ。12は、盤口の壺である。この他、土師器・瓦類が出土している。

土師器・須恵器から見る限り、出土遺物の下限は８世紀前半にあり、８世紀半ばには石垣は廃絶されて埋められたと考えることができよう。

③ 第Ⅲ期（８世紀後半～９世紀前半）

13年度調査区礎石建物の東西棟が続くことが予想されたが、削平のため確認できなかった。ただし、第Ⅱ期石垣の上部で検出したＳＰ14535は、礎石建物南側柱筋の礎石抜き跡と考えられる。

④ 第Ⅳ期以降（９世紀後半～11世紀前半）

第Ⅲ期以降については、廃棄土坑が検出されたのみで、建物遺構は確認できなかった。上層遺構とした柱穴の一部は、この段階に属すると思われるが、建物遺構として把握することは困難である。第Ⅳ期は９世紀後半～10世紀前半、第Ⅴ期は10世紀後半～11世紀前半にあたるが、建物遺構の変遷過程としてはまとめられないため、遺構番号順に報告する。

ＳＫ14187

径約190cmの略円形を呈する土坑である。遺構検出面からの深さは、10cm前後を計る。浅いくぼみに瓦を廃棄した遺構である。次に述べるＳＫ14188に切られる。



Ph.19　ＳＫ14187（西より）

出土遺物をFig.18に示す。**１・２**は、**土師器**の碗である。体部は丸みを持ち、小さく外反して口縁部となる。高台は高く、外側に開き気味に作る。内外面ともに横撫で調整で、篦磨きはされない。**３・４**は、**白磁**である。**３**は碗で、小さい玉縁となる。**４**は、皿の底部である。高台畳付から外底部らにかけて、露胎となる。**５**は、**越州窯系青磁**の壷である。体部外面は全面施釉で、外底部の縁辺のみ釉を剝いで、細かい白砂の目跡が残る。**６**は、**土師器**の高杯である。脚の筒状部分の破片で、篦状工具で縦に削り、多角形に面取りする。

このほか、瓦が出土している。単線の格子叩き文が多数を占める。

出土遺物やＳＫ14188の年代観から、10世紀後半頃の廃棄土坑と考えられる。

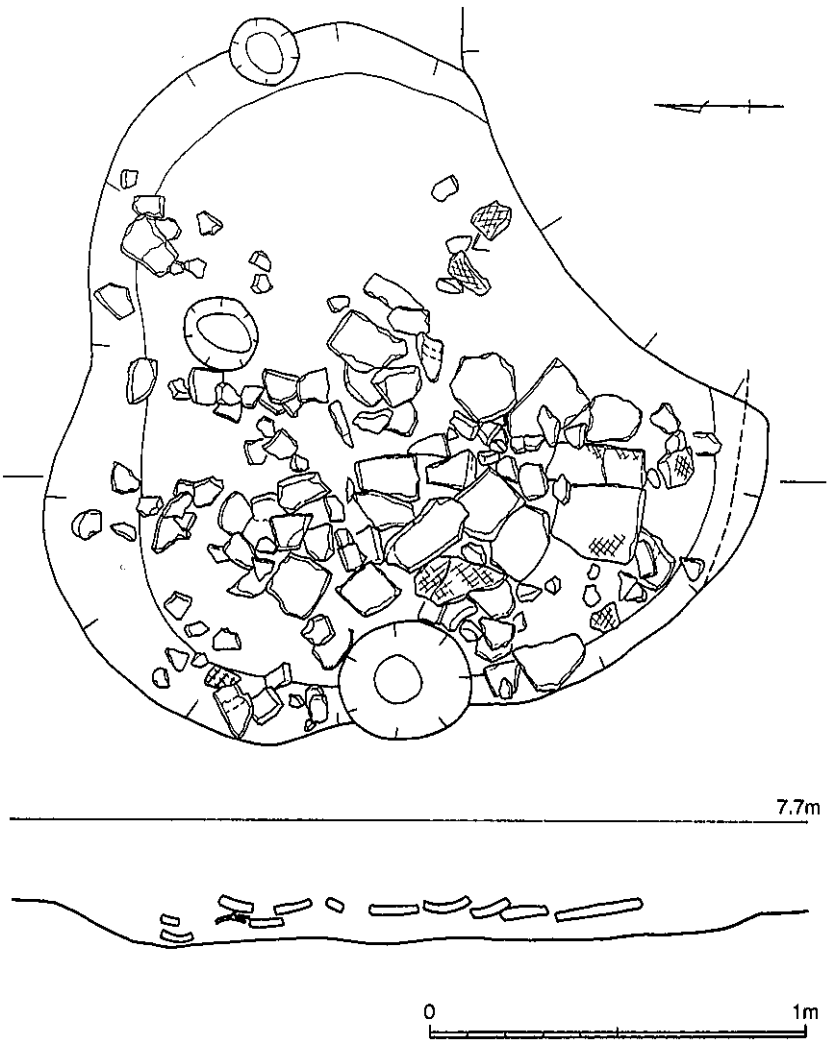


Fig.17　ＳＫ14187遺構実測図（1/20）

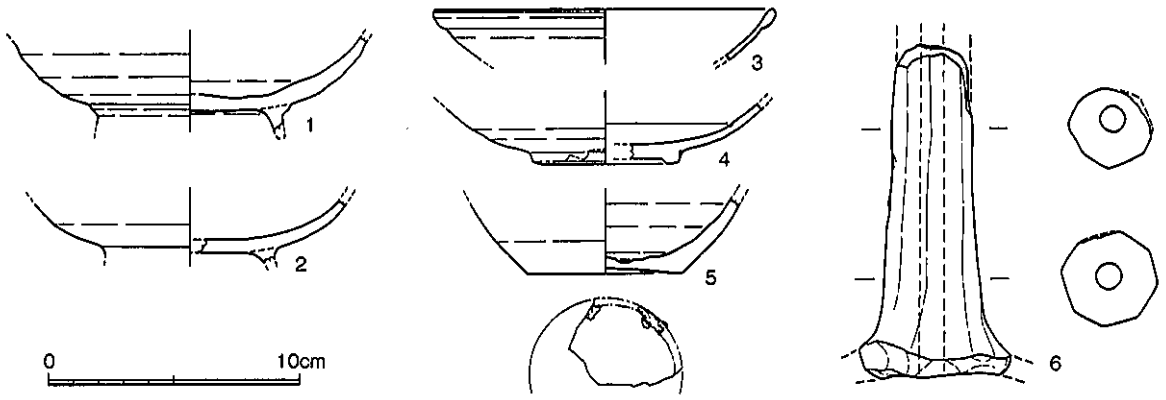


Fig.18　ＳＫ14187出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ14188

調査区中央付近で検出した土坑である。長径230cm、短径170cmの楕円形を呈し、深さは40cmをはかる。土坑内のやや北寄りに、２基の柱穴が掘り込まれているが、本遺構に後出する遺構である。

埋土は、次の通りである。**Fig.19-①**　黄茶色粘質土、②　暗灰色土、③　灰色粘土、④　暗褐色土、

⑤　黒灰色粘土、⑥　灰白色粘土、⑦　黄色粘土。

瓦を主として廃棄しているが、土坑のほぼ中央に無遺物の部分があり、瓦は小口を揃えそれを取り巻くように出土している。また、中央部付近の瓦は、黄茶色粘質土で巻かれており、この無遺物部分に柱の当りなどを想定することも可能かもしれない。

出土遺物をFig.20～23に示す。**1～3**は、**越州窯系青磁**碗である。全面施釉で、見込みと高台畳付には目跡がめぐる。火熱を受けたようで、釉表は若干荒れている。**4・5**は、**白磁**碗である。**5**は輪花碗で、高台畳付き内は露胎となる。**6**は、**土師器**の高台付きの鉢である。

7～29には、**瓦**を図示した。**7～27**は平瓦である。**7～9**は、縄目叩きを持つもので、**7**の凹面にはコビキ痕が、**8**の凹面には縦方向の掻き目が認められる。長側の小口は、篦切りされる。**10～12**は、細かい格子目叩きを施すものである。**10・11**は、一枚作りによる。**11**は熨斗瓦であろう。長側の両小口は篦で面取りされている。**12**は、桶巻き作りと思われる。長側の小口は、内側から篦を入れ、折り取っている。**13～19**は、やや大きめの格子叩きを行なうもので、**13**は方形、**14～19**は

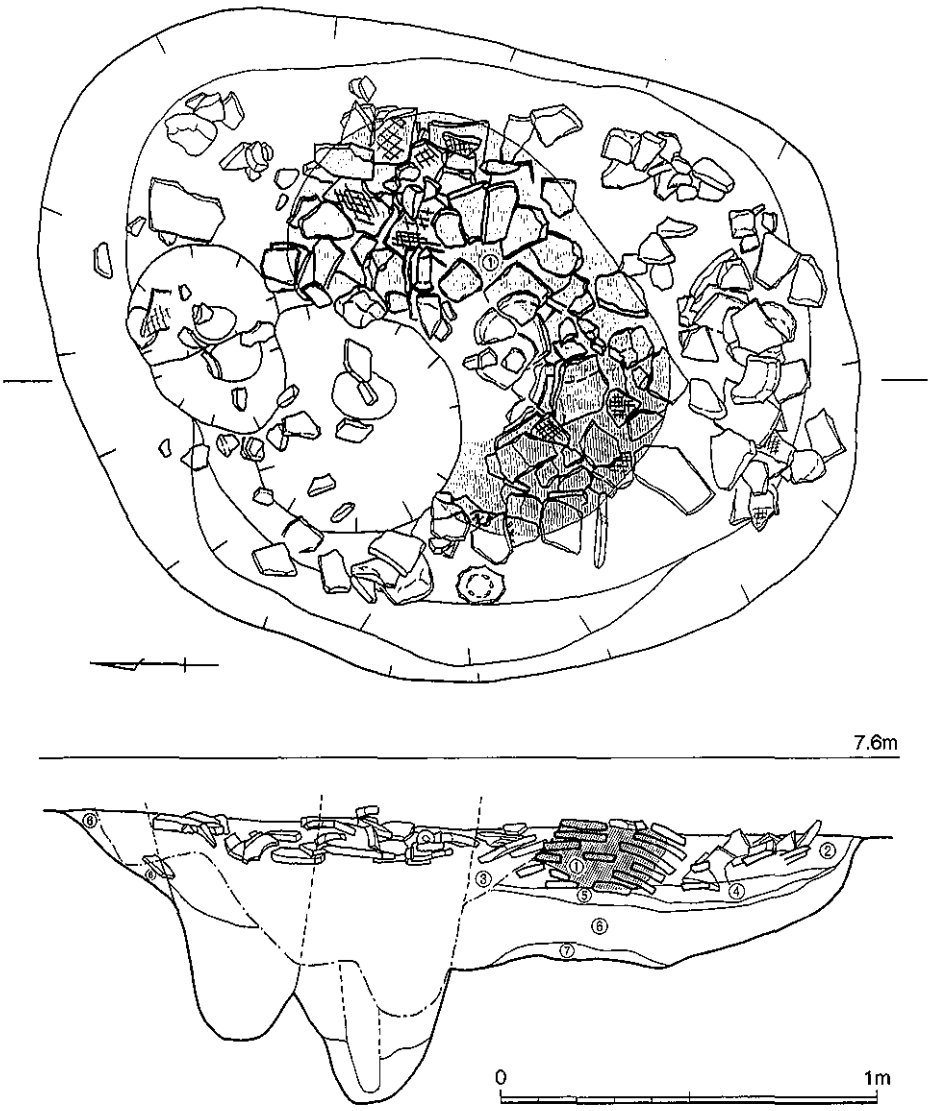


Fig.19　ＳＫ14188遺構・土層断面実測図（1/20）



Ph.20　ＳＫ14188（西より）

菱形の格子である。13～15・17・18の長側小口は篦切り、16・19は篦で切れ目を入れてから折り取る。18・19の四面端部付近は撫で調整を加えるが、横方向のコテ状工具痕跡が認められる。20は、複線の方形格子叩きである。長側小口は、篦切りする。文字の一部と思われるハネの残角が見られるが、文字の判別はできない。21～25は、複線の菱形格子叩きを持つものである。21・25の長側小口は篦切り、他は切れ目を入れて折り取る。26は、格子叩きであるが、右上がりの線が三重であったり単線であったりと、変則的である。文字を叩打しているが、文字としての態をなしていない。小口は篦切りする。27は、網目状あるいは蜘蛛巣状の叩き目を持つ。小口は、切れ目を入れて折り取る。

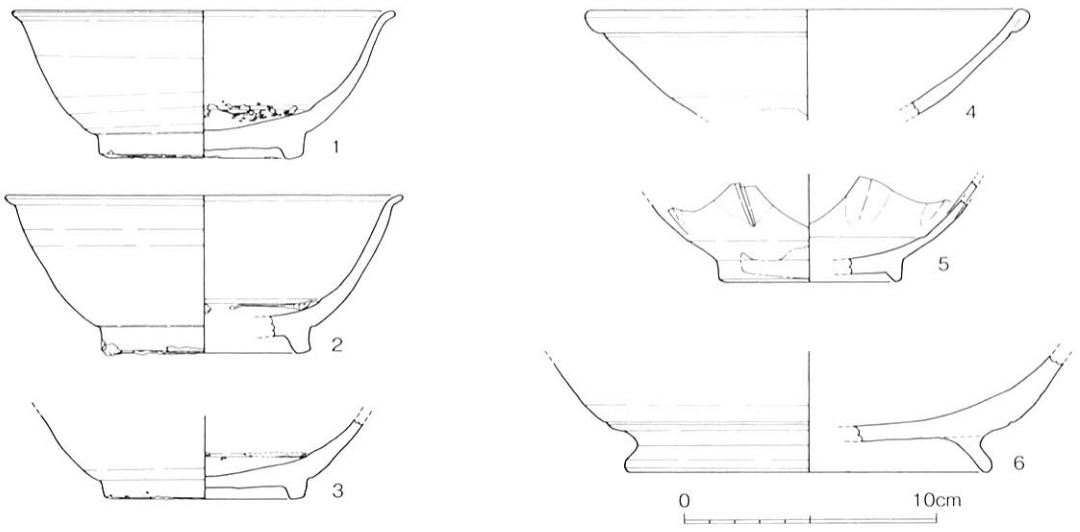


Fig.20　ＳＫ14188出土遺物実測図１（1/3）

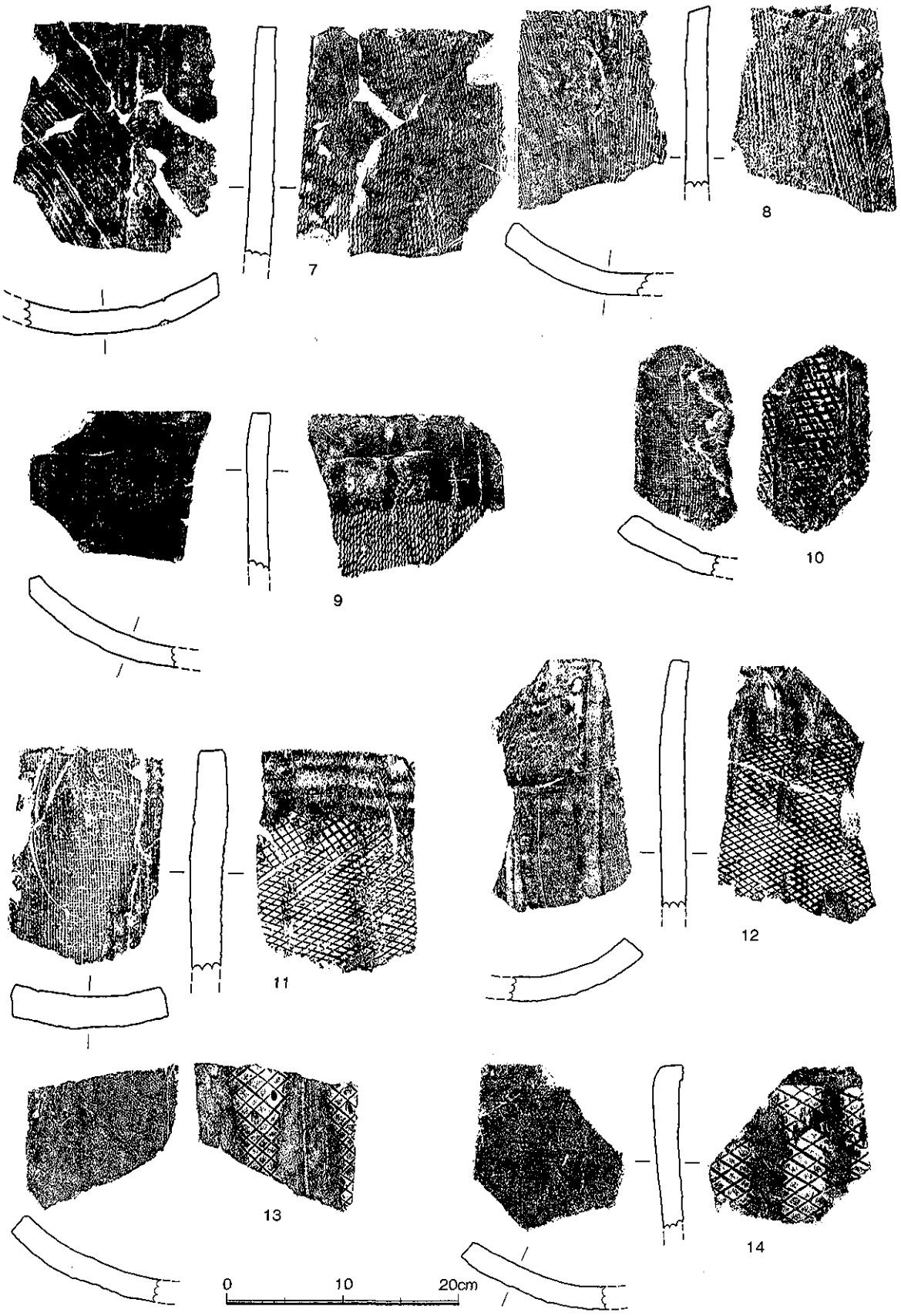


Fig.21　ＳＫ14188出土遺物実測図２（1/5）

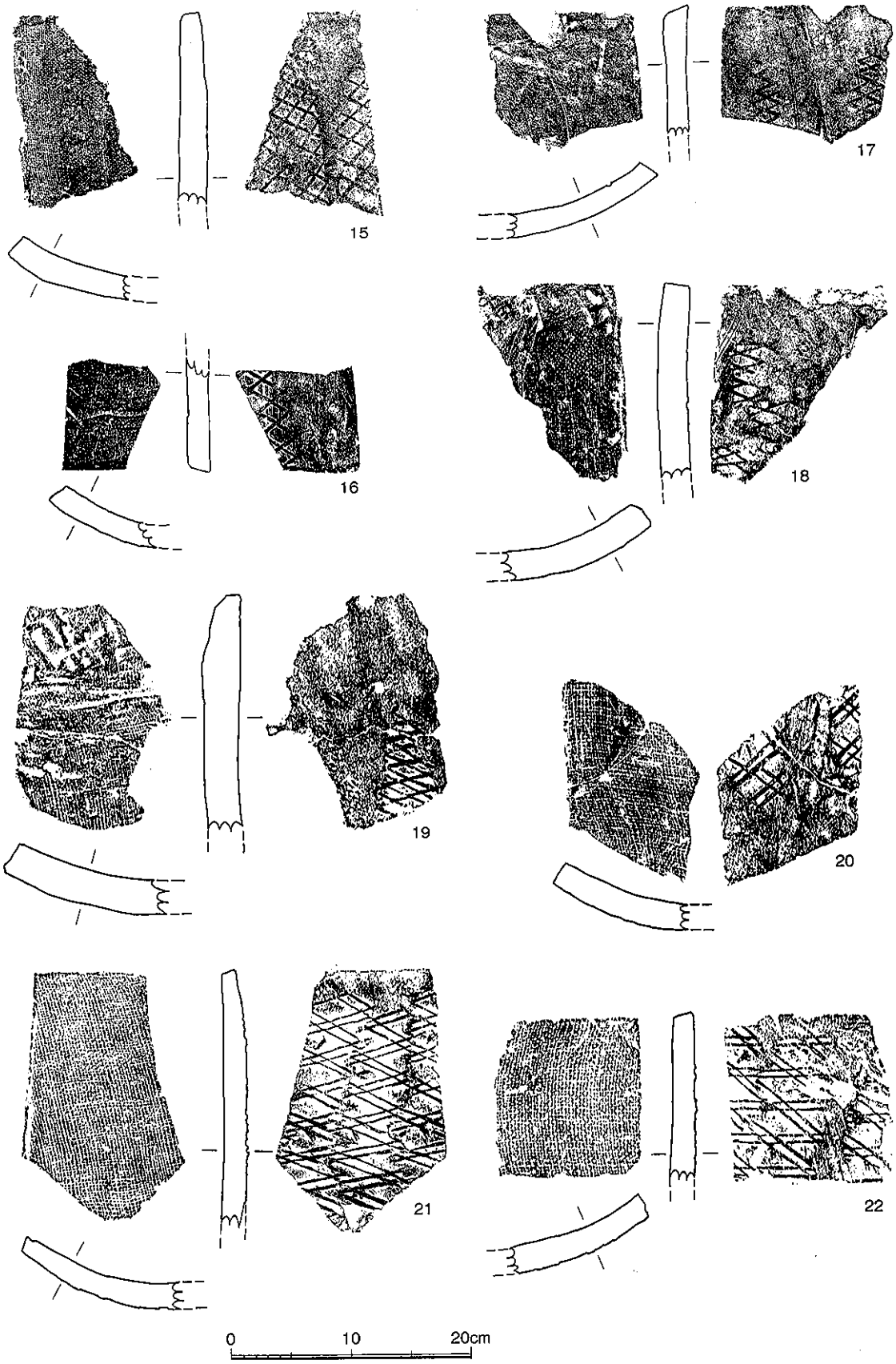


Fig.22　ＳＫ14188出土遺物実測図３（1/5）

28・29は丸瓦である。単線の格子叩きをおこなう。小口は、内側から切れ目を入れ、折り取っている。28の凹面には、全体に縦方向の繊維痕が見られる。

なお、9～12・14・18～20・23・25～29は、前述した黄茶色粘質土に封入されていた瓦である。出土した土師器から判断して、鴻臚館第Ⅴ期の10世紀後半に位置付けられよう。

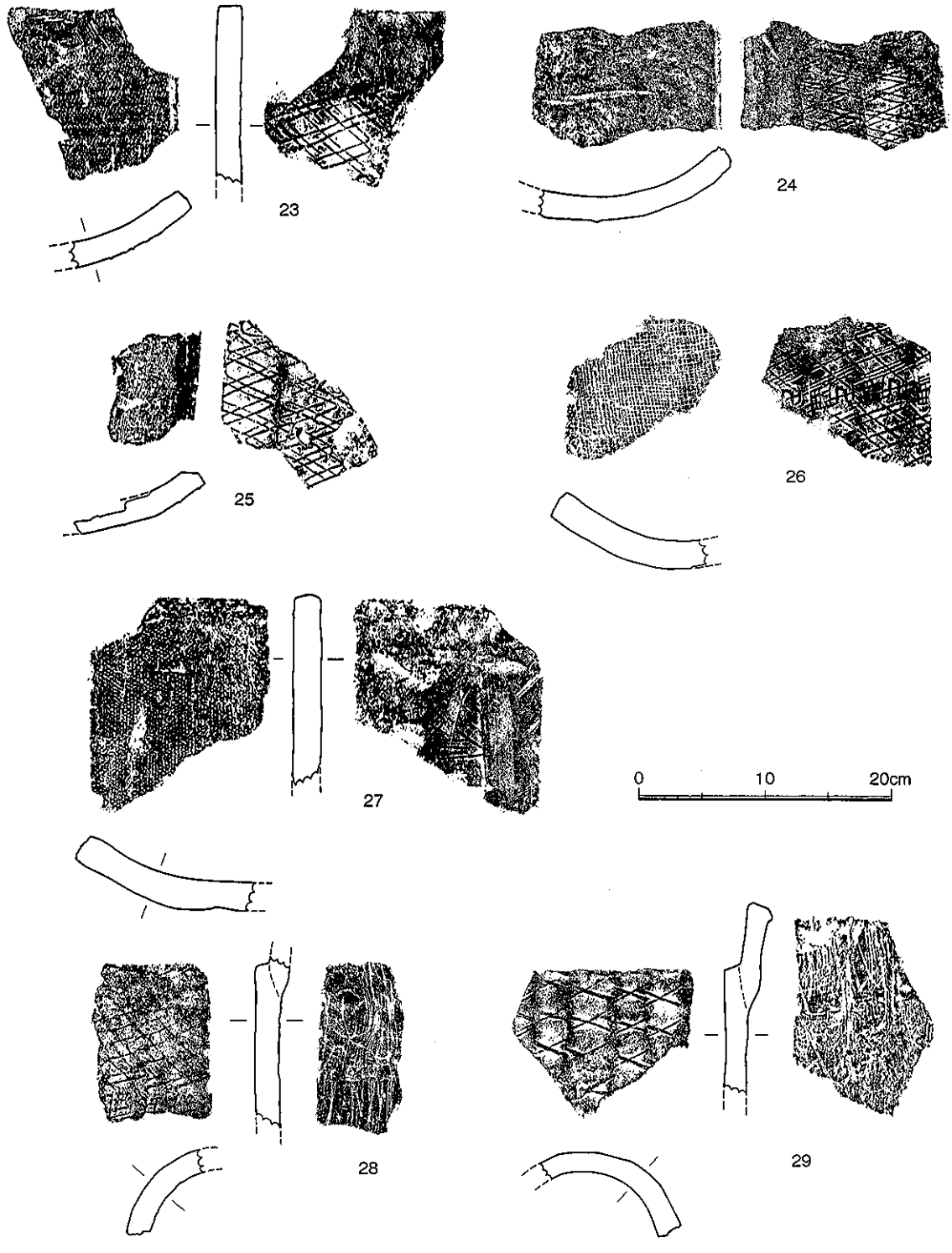
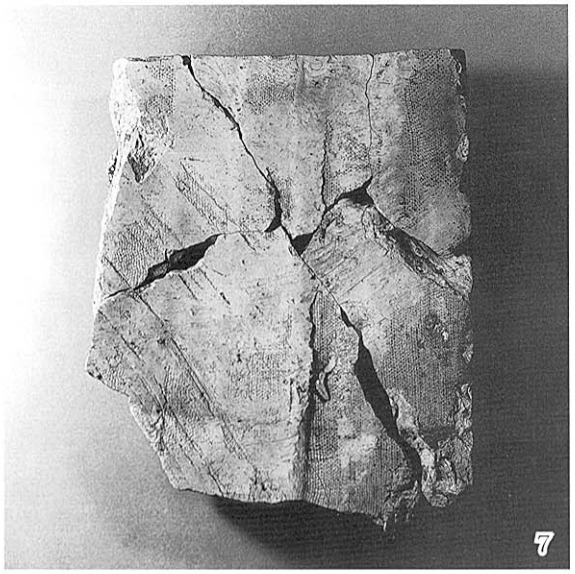
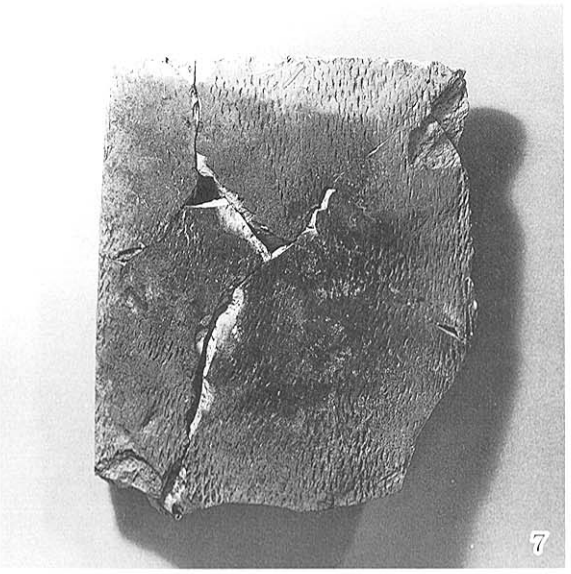
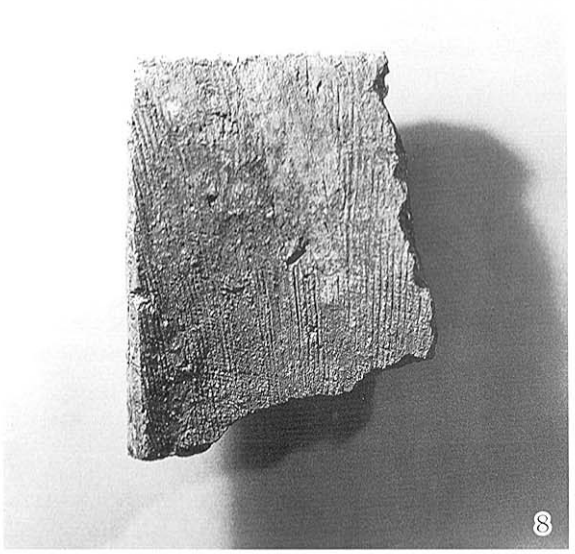
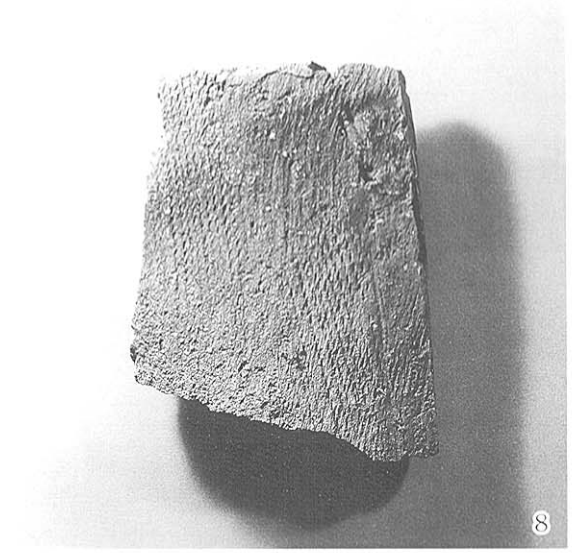


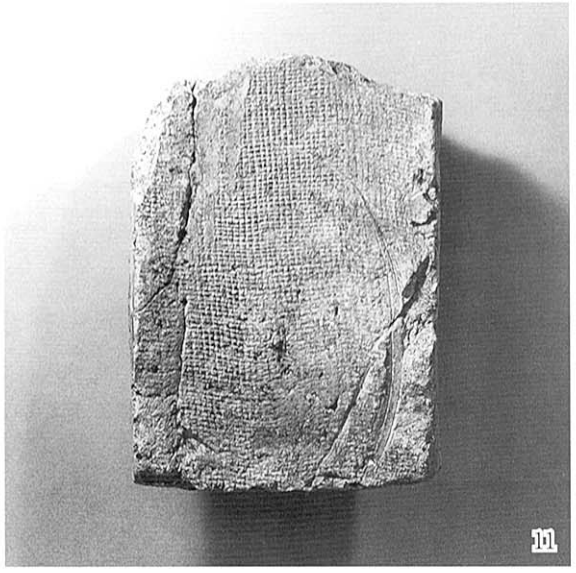
Fig.23　ＳＫ14188出土遺物実測図４（1/5）





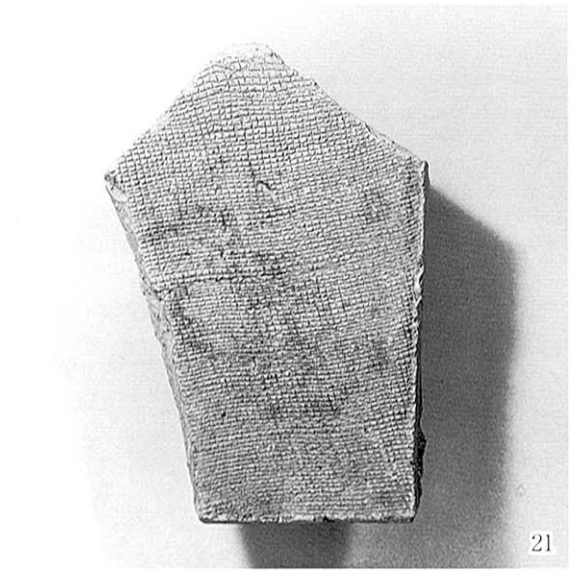




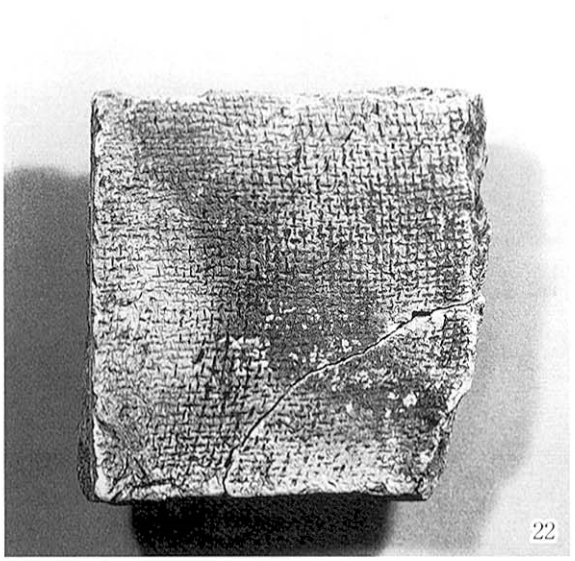




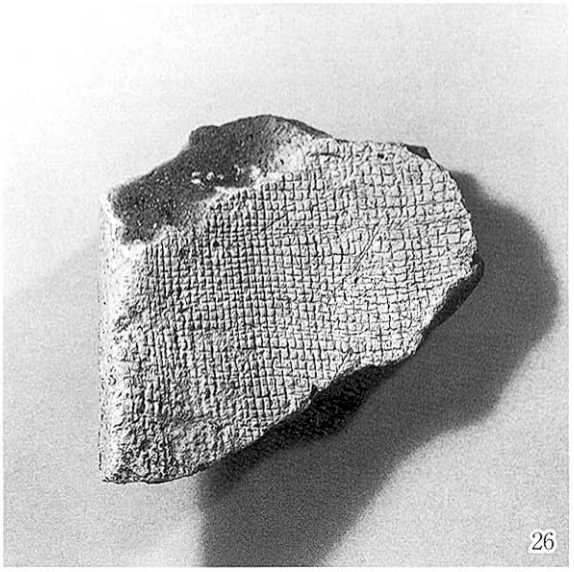
Ph.21　ＳＫ14188出土遺物１

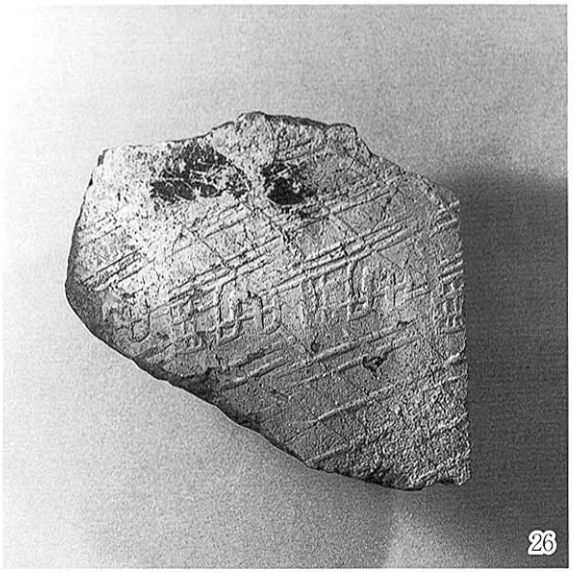












Ph.22　ＳＫ14188出土遺物２

ＳＫ14271

長軸450cm、短軸175cmの木葉形を呈する。深さ10cm程度の浅い土坑に、瓦の小片を主とした遺物を一括廃棄した遺構である。なお、位置的には第Ⅱ期石垣の直上に当たる。

出土遺物の一部を、Fig.25・26、Ph.25に示す。１～13は、**越州窯系青磁**である。１～11は、碗である。１～８は全面施釉、９は施釉後畳付きの釉をかきとる。10・11の外底部は、露胎である。11の見込みには、沈線で花文が描かれる。12は茶托、13は香炉の脚であろう。14～18は、**長沙窯**の陶磁器である。14は、白釉に緑彩した二彩の蓋である。15は、青緑色釉を施した陶枕である。平成13年度調査で出土した陶枕（『鴻臚館13』, P. 33, Fig.35－１・２）と、同一個体の可能性が高い。16・17は、青磁碗である。外底部は、露胎となる。底部は、蛇の目高台に作る。18は、水注である。舞踏する人物像の貼花文に褐彩を施す。19～25は、**白磁**碗である。19・24は畳付きを、25は畳付きから高台内を露胎とする。26・27は、**無釉陶器**の鉢である。



Ph.23　ＳＫ14271検出状況（南より）



Fig.24　ＳＫ14271遺構実測図（1/30）

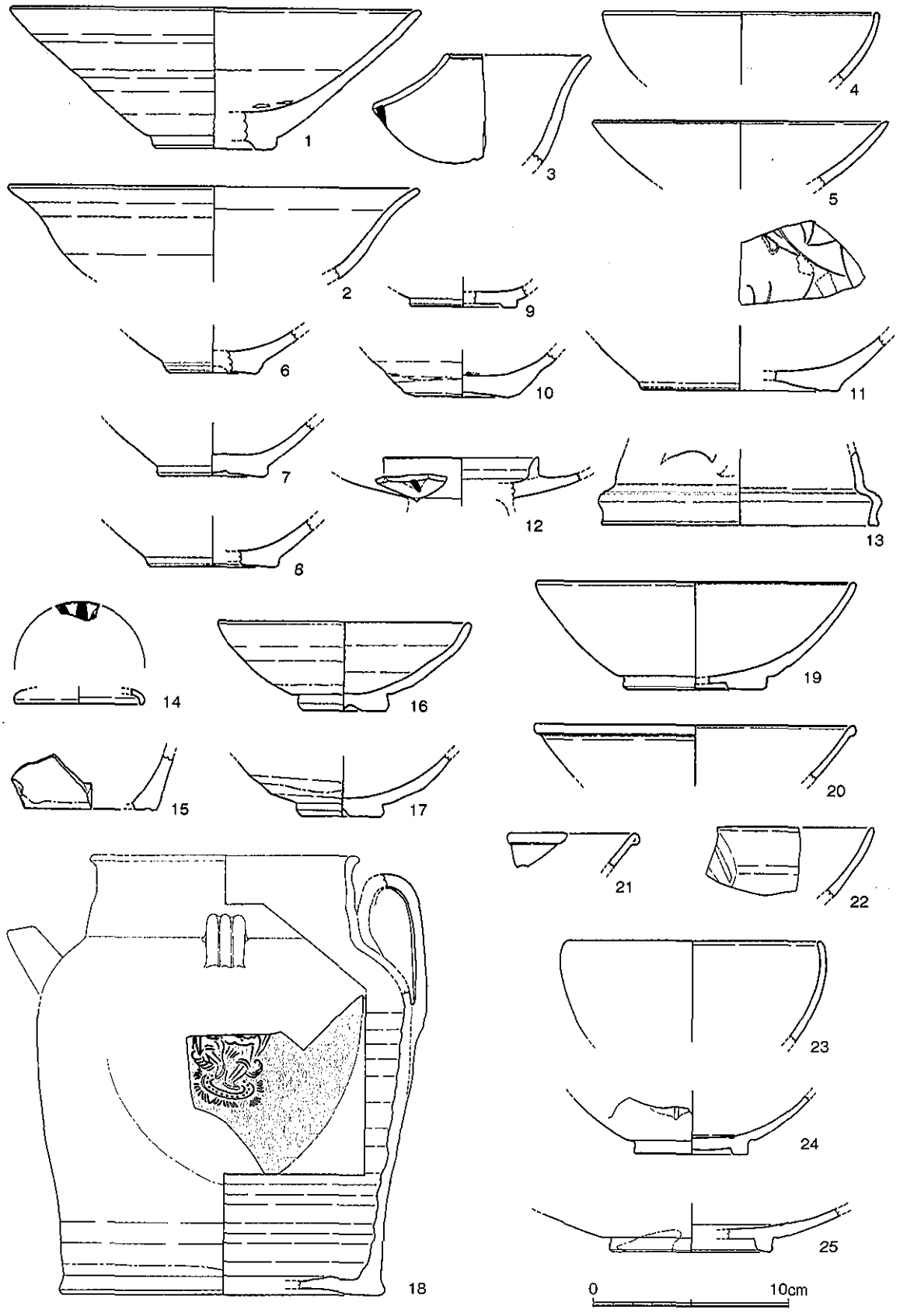
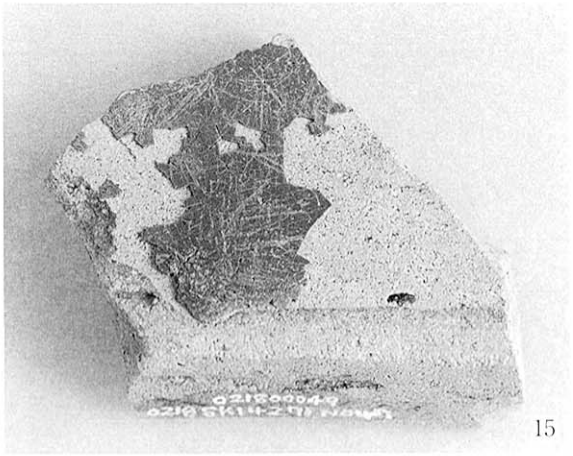
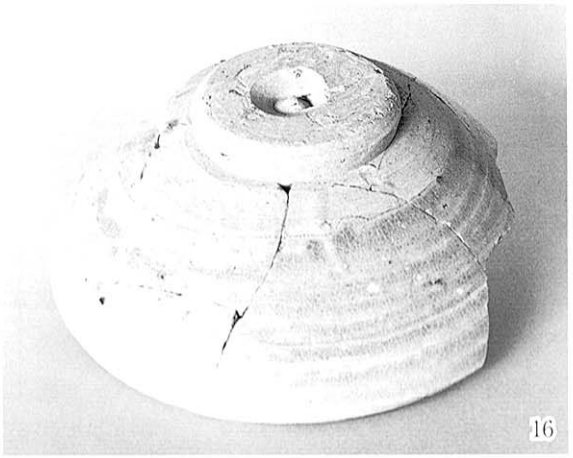
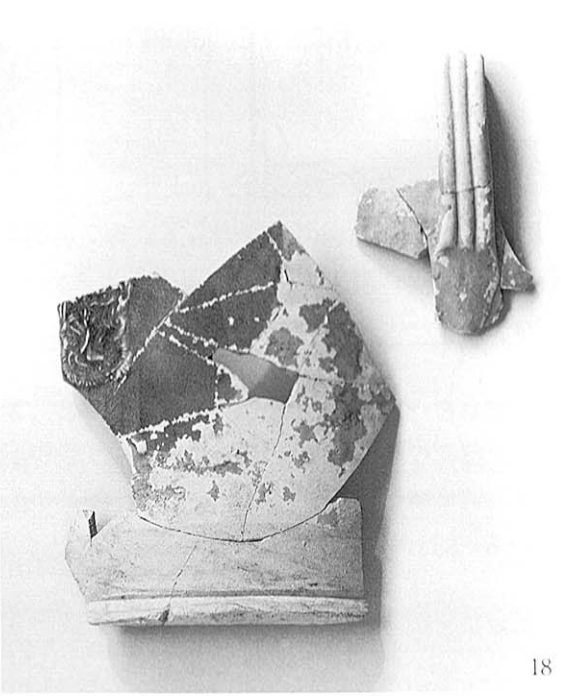


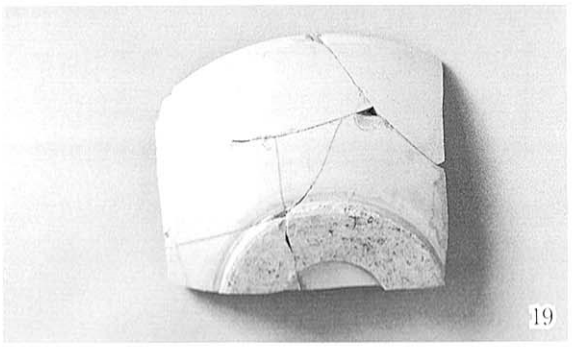
Fig.25　S K14271出土遺物実測図１（1/3）

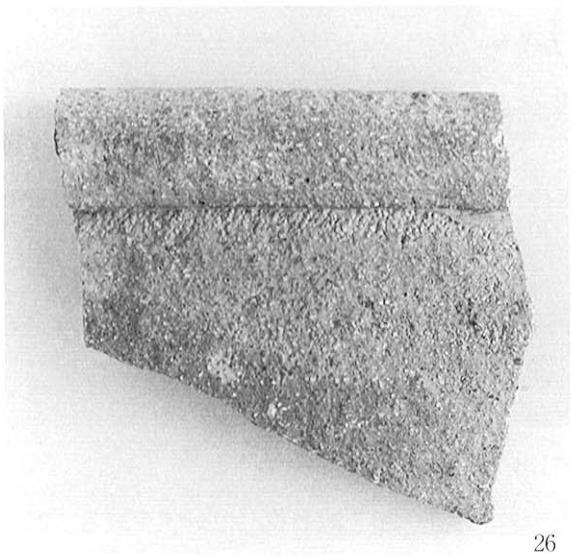

16

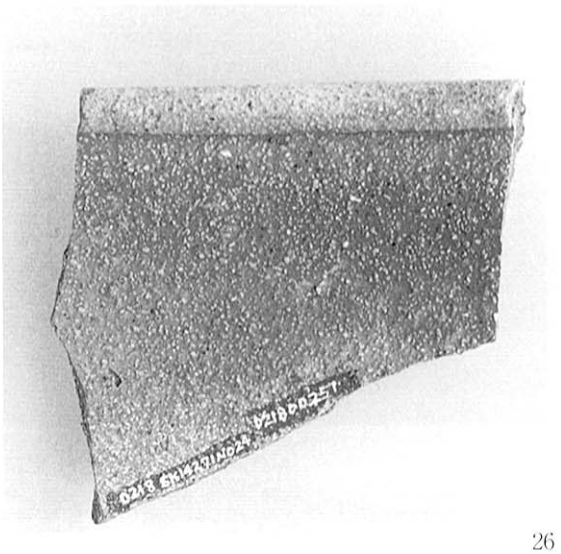

15


16


18


19


26


26

Ph.24　ＳＫ14271出土遺物１

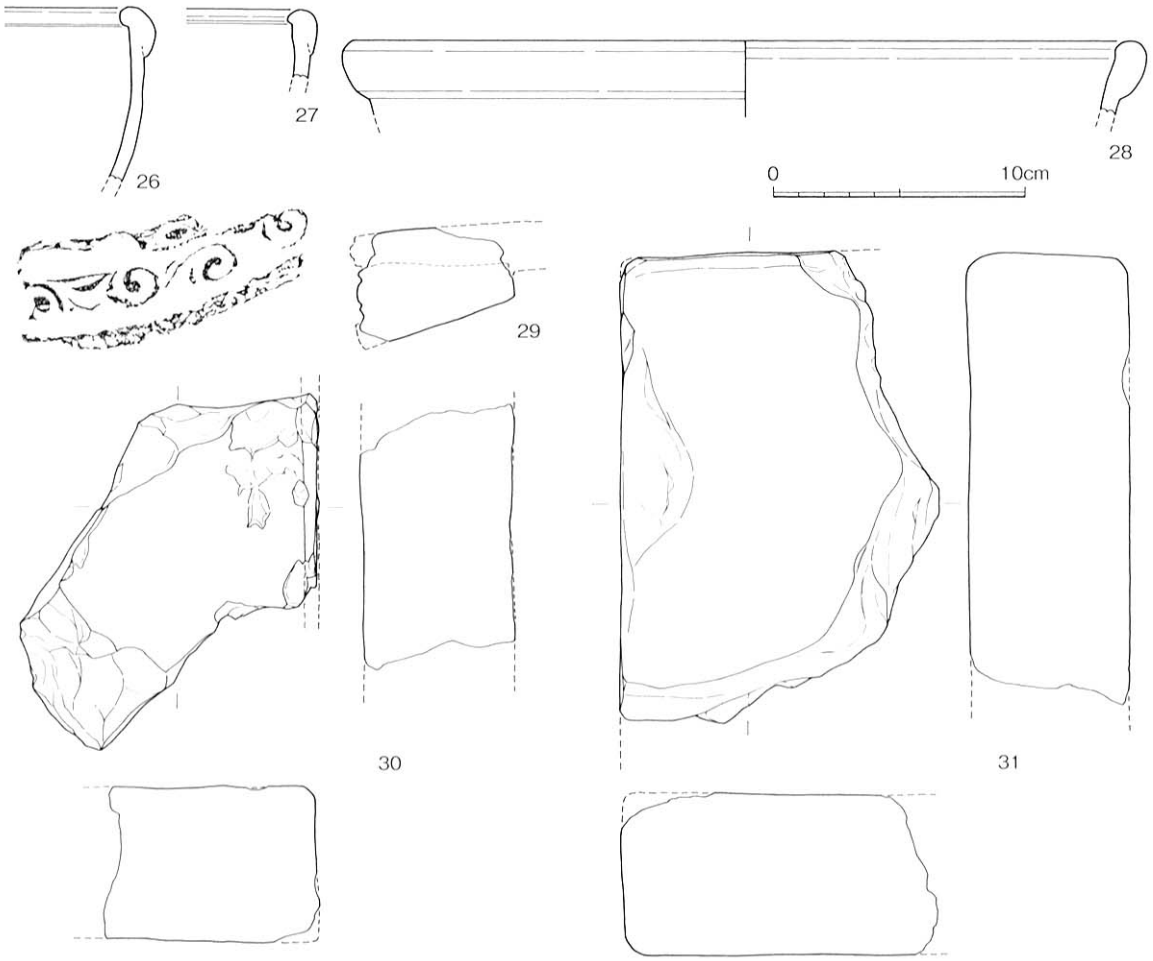
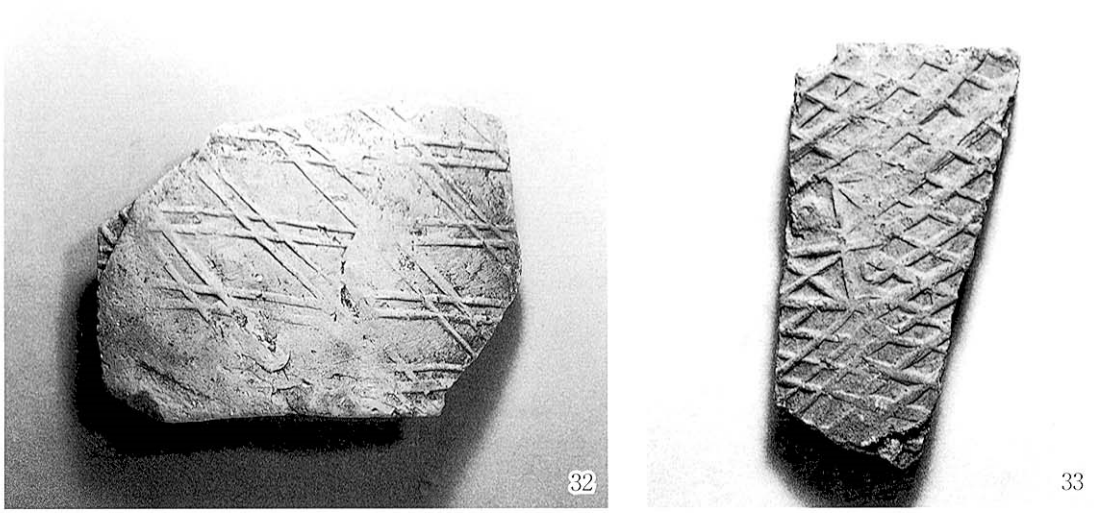


Fig.26　ＳＫ14271出土遺物実測図２（1/3）

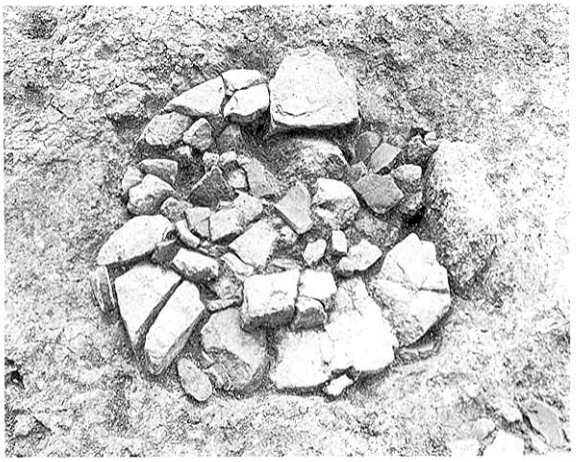


Ph.25　ＳＫ14271出土遺物２

胎土は、石英粒を多く含んで粗い。28は、**瓦質土器**の鉢である。26・27を模した形状を取る。29は、**鴻臚館式軒平瓦**の瓦当である。30・31は、**瓦磚**である。ともに６cm強の厚さを持ち、同一規格で作られた製品の可能性がある。32・33は、**平瓦**である。32は、複線の斜格子叩き、33は単線の斜格子

叩きに記号の叩打文を持つ。

第Ⅳ期、９世紀後半の廃棄土坑と考えられる。



Ph.26　ＳＰ14272（東より）

ＳＰ14272

調査区西辺近くで検出した柱穴である。直径90～100cmの略円形の掘り方に礫を詰めたもので、礎石の根固めと推定される。礫の間に瓦の小片が混じるが、時期を判別するに足るものではない。

今回の調査区、および西に接する12年度調査区においても、この周辺には礎石抜き跡遺構は見当たらず、建物としてまとめることはできない。おそらく、削平によって失われたものであろう。

ＳＫ14273

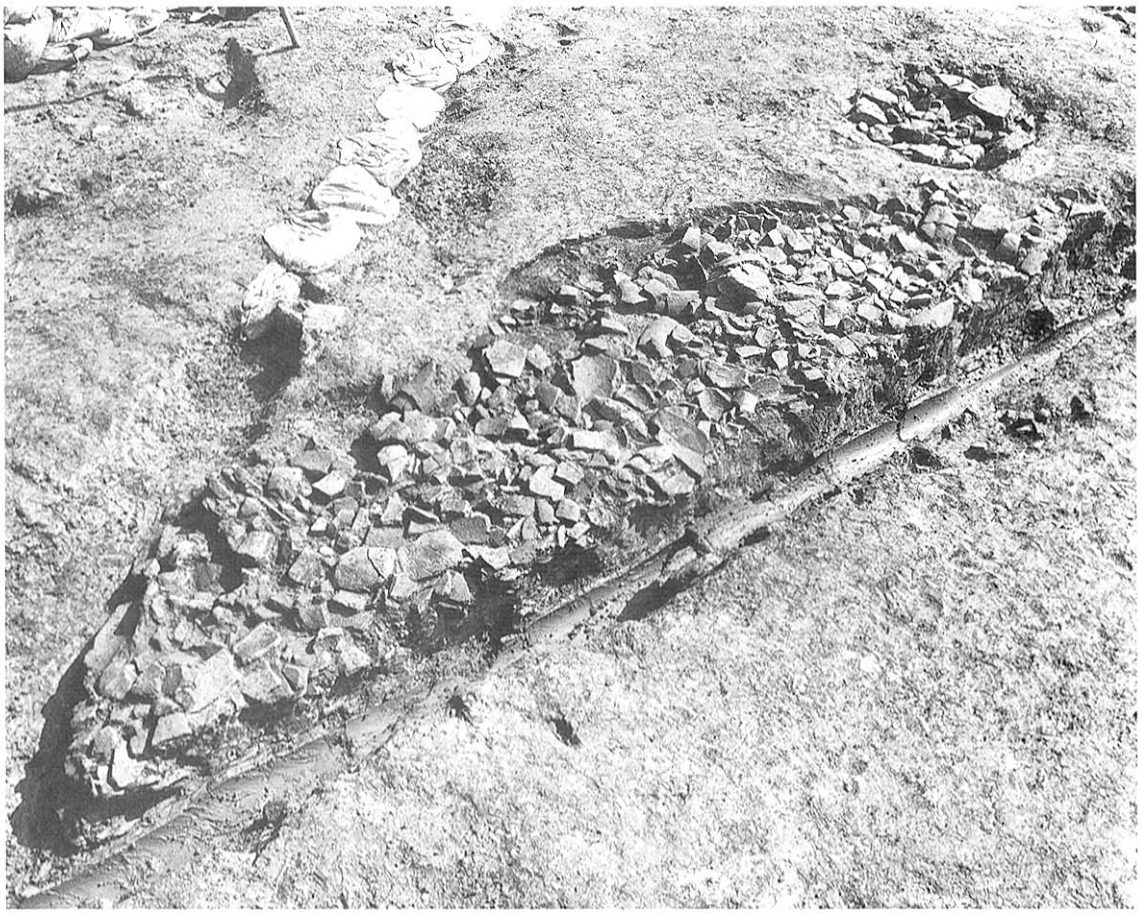
大量の瓦を一括廃棄した土坑である。長軸480cmをはかる大型土坑であるが、北側は平和台球場の排水溝に破壊されている。排水溝の北側には遺構は及んでおらず、短軸は150cm程度と推定される。検出面からの遺構の深さは、25cmほどである。なお、後述するＳＫ14524とは重複関係にあり、これに後出する。

出土遺物の一部を、Fig.28・Ph.28～30に図示する。

１～３は土師器である。１は杯で、底部を篦切りする。体部は、横撫で調整である。**２・３**は碗である。**２**の高台は高く、大きく開く。**３**の高台は低く、径が大きい。いずれも、体部は横撫で調整する。**４**は、**越州窯系青磁**碗である。体部下位は、施釉されない。**５**は、**丸瓦**である。斜格子叩きに、文字銘が入る。「今行」の左字に似るが、細部は異なり、文字としての判読は不可能である。Ph.28－6～13は、



Fig.27　ＳＫ14273遺構実測図（1/30）



Ph.27　ＳＫ14273瓦出土状況（北東より）

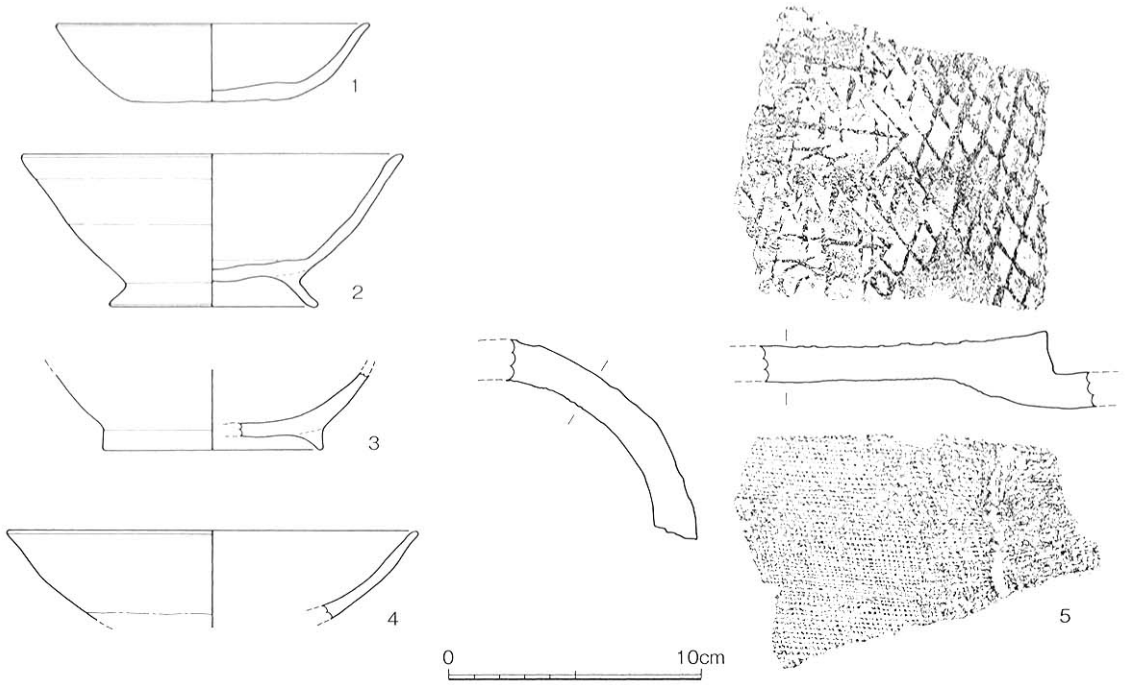
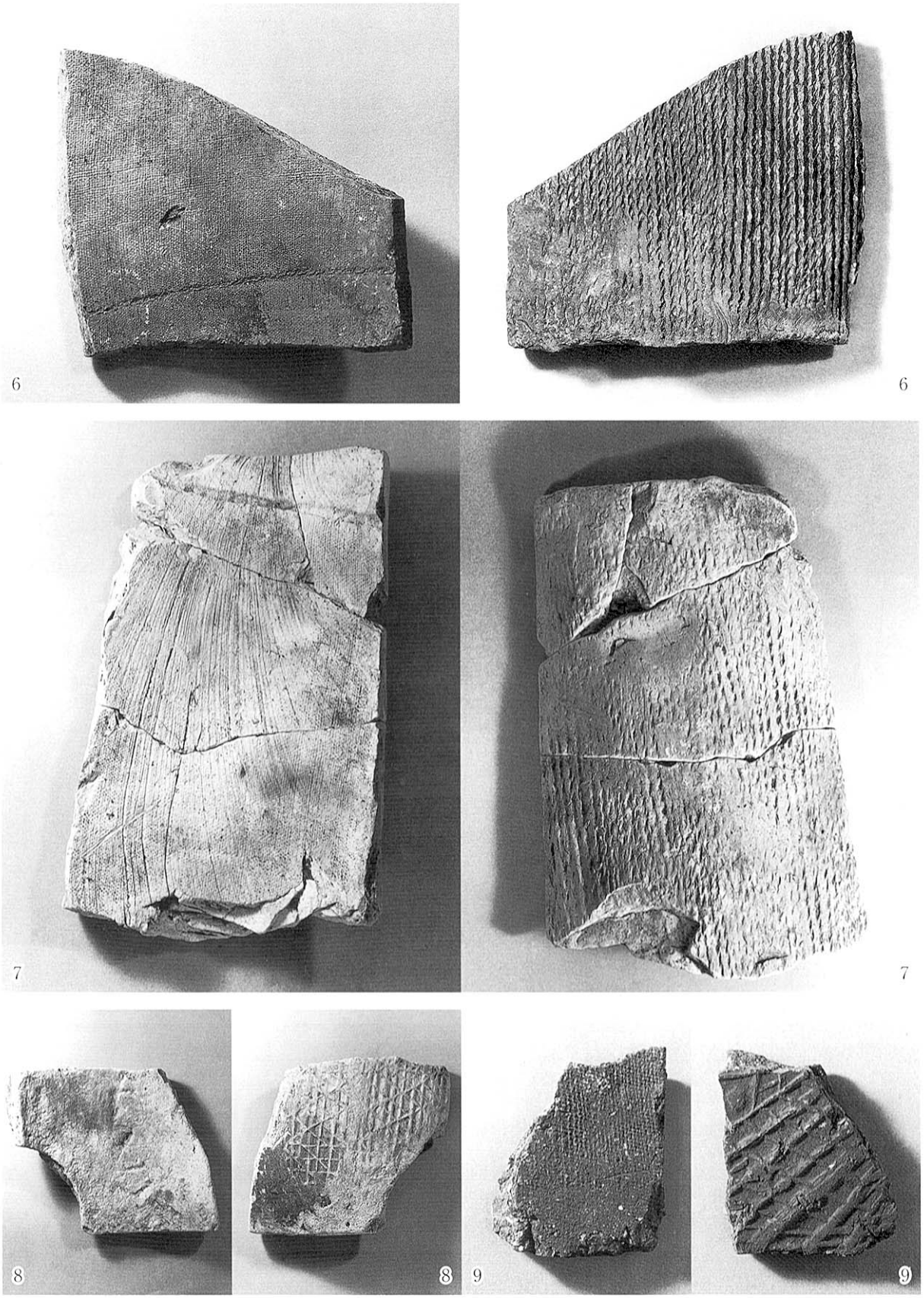
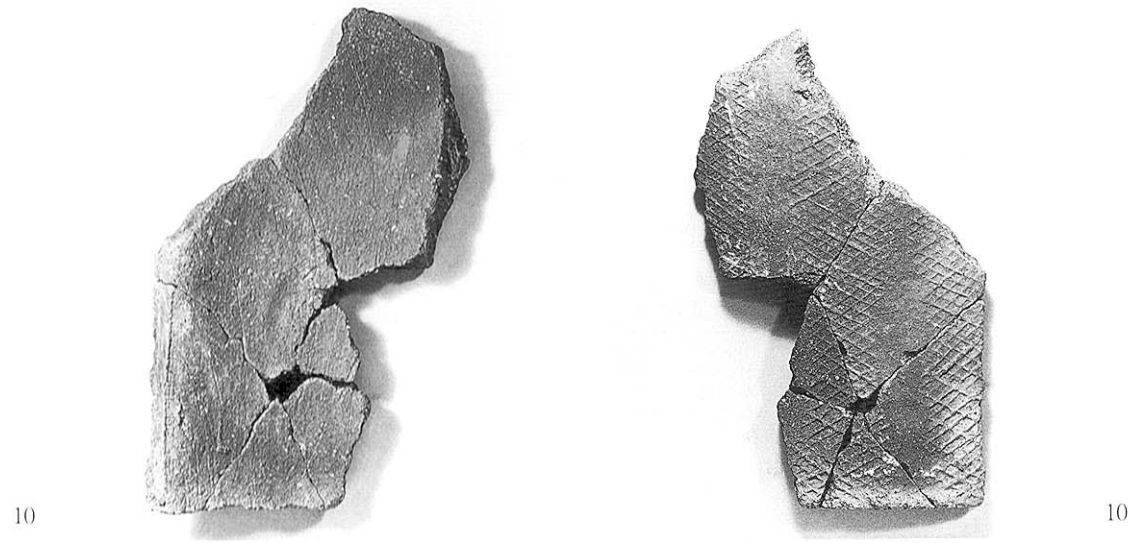
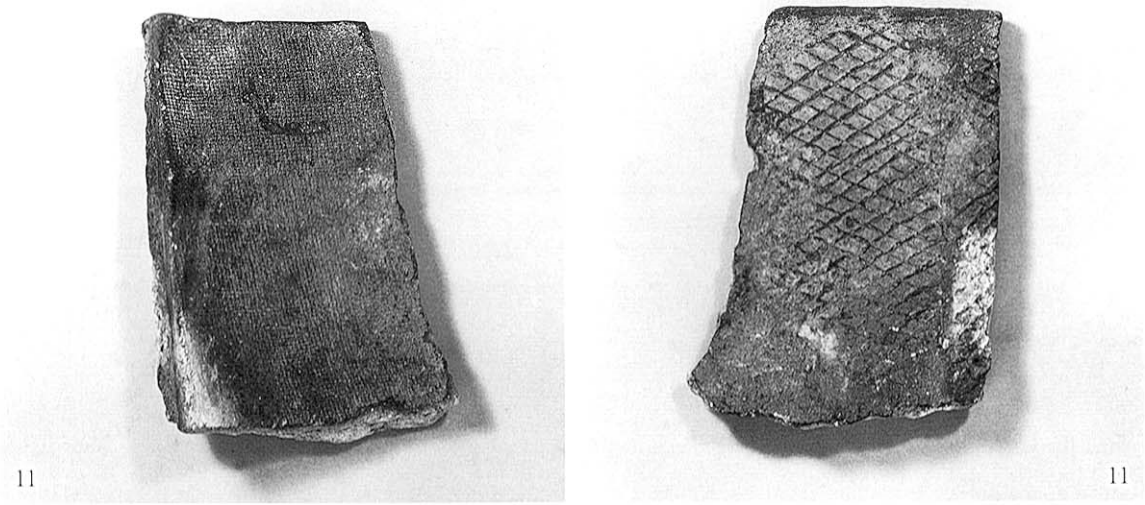


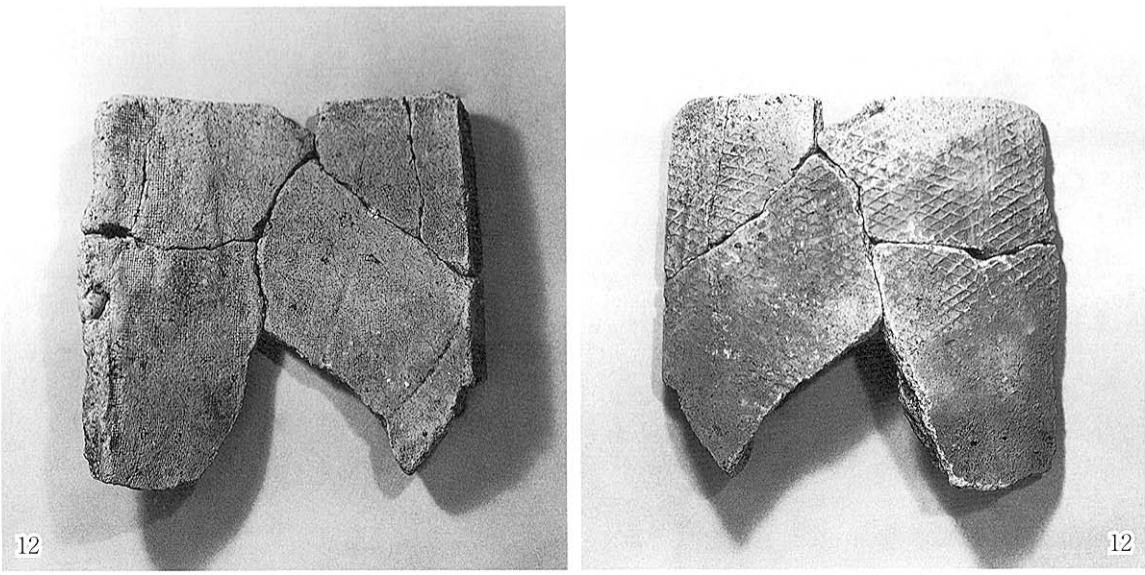
Fig.28　ＳＫ14273出土遺物実測図（1/3）



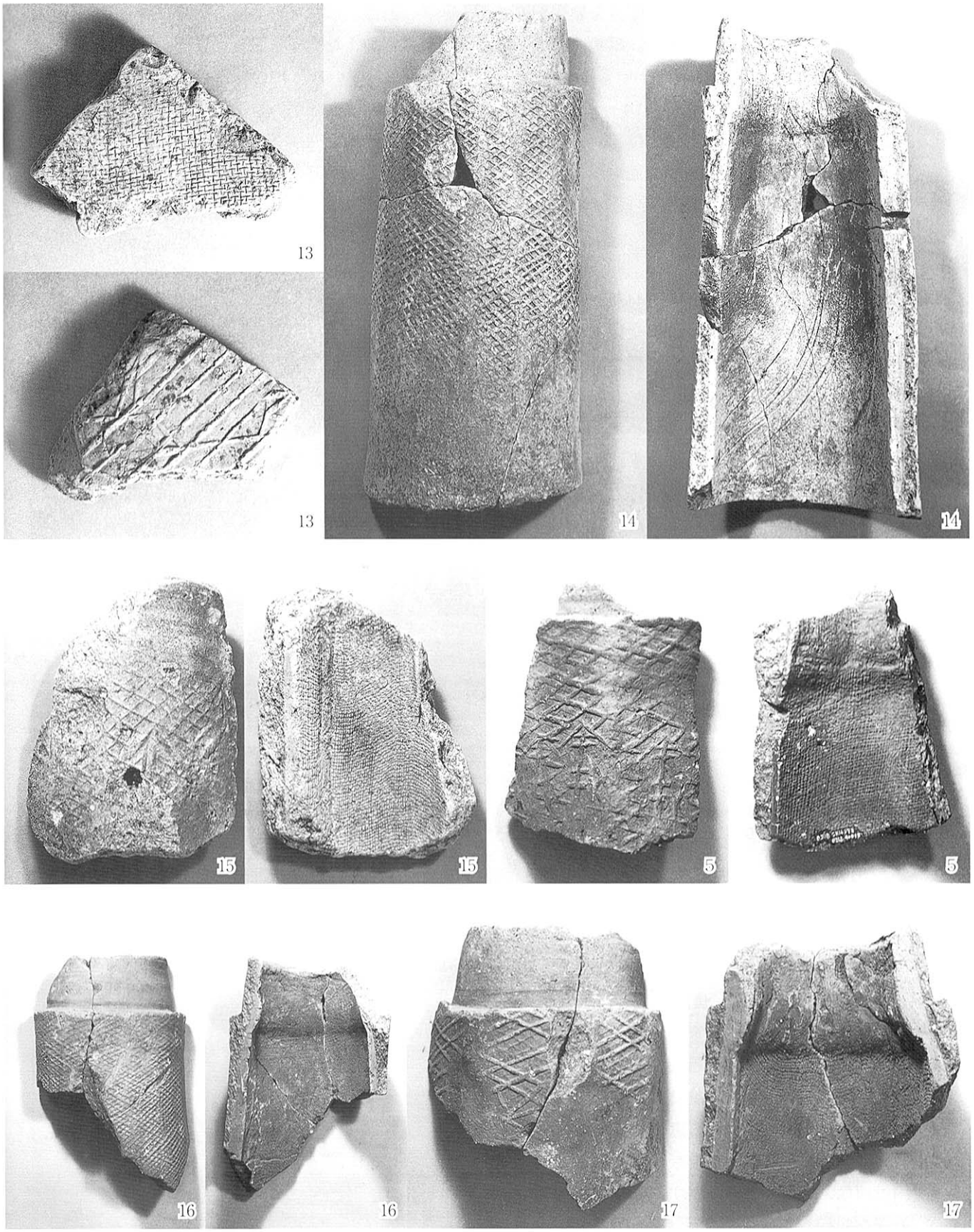
Ph.28　ＳＫ14273出土遺物１







Ph.29　ＳＫ14273出土遺物２



Ph.30　ＳＫ14273出土遺物３

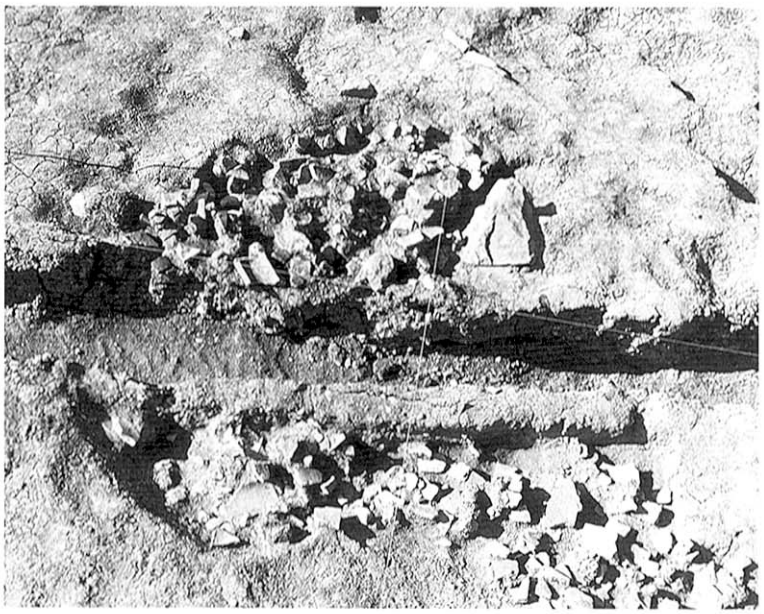
平瓦である。６・７は、縄目の叩きを施すものである。７の凹面にはコビキ痕跡が明瞭に残っている。８は、格子叩きの変則型である。単線の斜格子に縦横の単線を加えた文様を取る。９は、単線の斜格子に記号を叩打する。10～12は、細かい斜格子の叩きを行なっている。13の叩き痕は、右上がりの平行線に横線・縦線を加える。14～17は、**丸瓦**である。14・16は、細かい格子目叩きで、下端側三分の一は撫で調整する。凹面には、コビキ痕跡がうかがわれる。15は、やや粗い単線の斜格子で、「介」字の叩打を加える。17は、目の粗い複線の不規則な斜格子である。

出土した土師器の特徴などから、鴻臚館第Ⅳ期の10世紀前半に属する瓦廃棄遺構と考えられる。

ＳＫ14277

第Ⅰ期ＳＡ14603の柱穴ＳＰ14488を切る土坑である。上層ではほぼ全体に土師器・瓦・陶磁器などが、下層では土坑の北寄りに固まって須恵器・土師器などが出土した。

出土遺物の一部をFig.29に示す。１～７は、**土師器**である。体部は、大きく外反する。４～７は、碗である。高台は低く直立し、高台径は広い。７の高台は厚く、断面三角形を呈する。８は、**黒色土器Ａ類**碗である。９は、**緑釉陶器**碗である。削り出しの輪高台で、焼成が甘く土師質となり、釉が剝げている。京都洛西産であろう。10～12は、**越州窯系青磁**碗である。胎土はきめ細かく密であるが、外底部は露胎であり、粗製品に分類される。いずれも火熱を受け、釉は荒れて剝離気味である。10・11には見込みに目跡が残るが、12には目跡は見られない。13～15は、**白磁**碗である。14・15は、若干釉が荒れており、火にあたったものと推測できる。16は、**無釉陶器**である。わずかに内傾しつつ直立する口縁で、口唇部は直裁する。横なで調整の後、口縁内面に、幅広く横位のヘラ削りを行う。17～20は、**須恵器**である。17・18は、壺の底部であろう。17の内外面は、回転横なで調整する。18は、外面を回転ヘラ削り、内面は静止横なで調整する。19・20は、甕の口縁で



Ph.31　ＳＫ14277（南より）



Ph.32　ＳＫ14277下部遺物出土状況（東より）

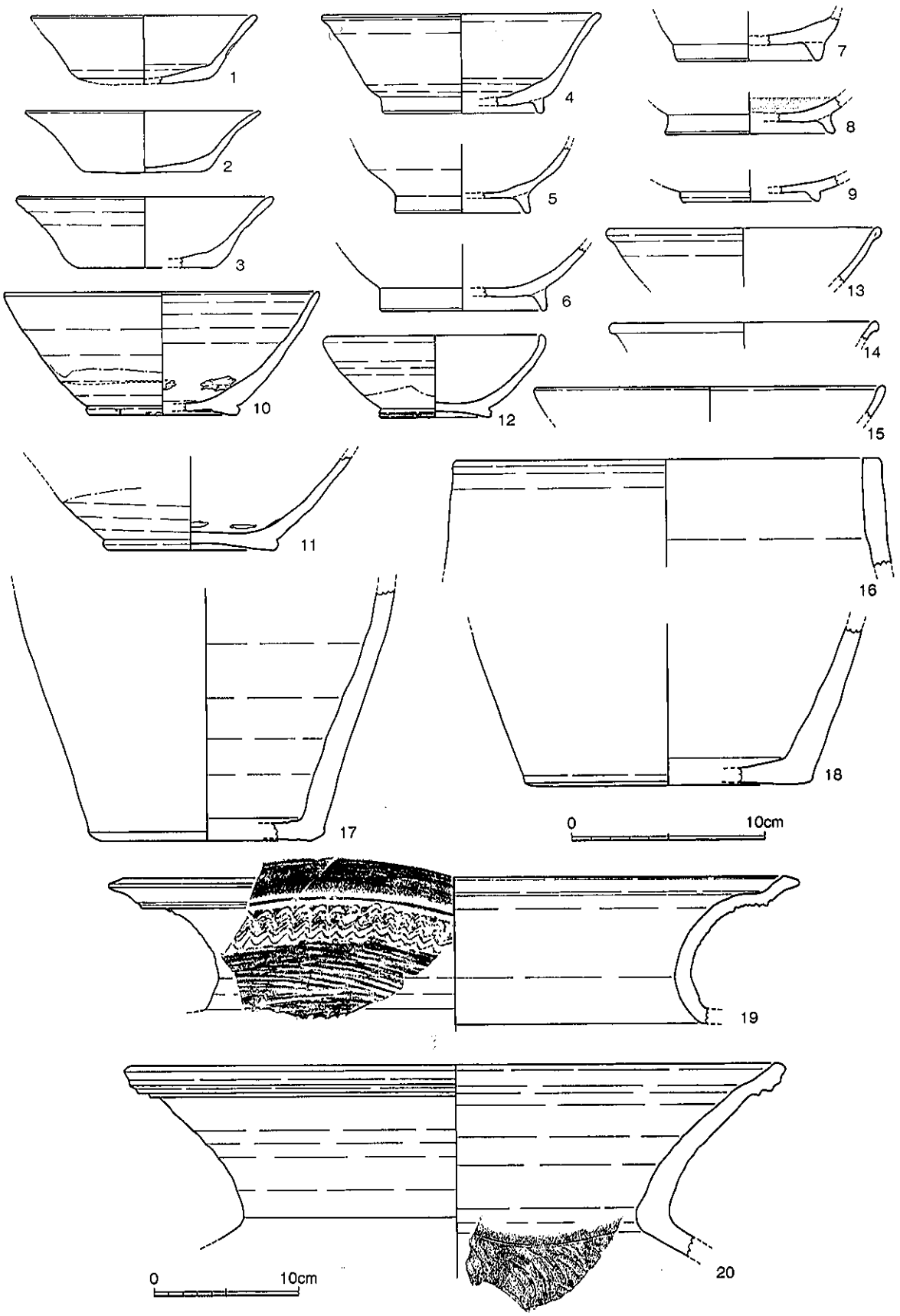


Fig.29　S K14277　出土遺物実測図１（1/3, 19, 20…1/4）

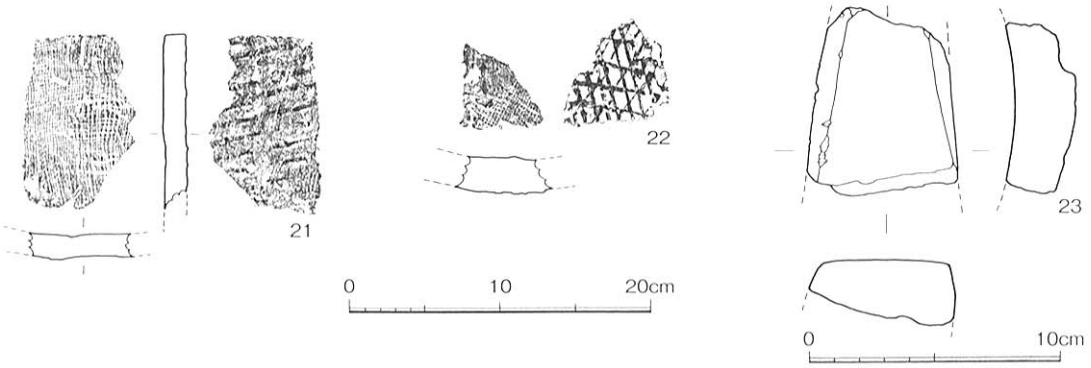


Fig.30　ＳＫ14277出土遺物実測図２（1/5, 23…1/3）

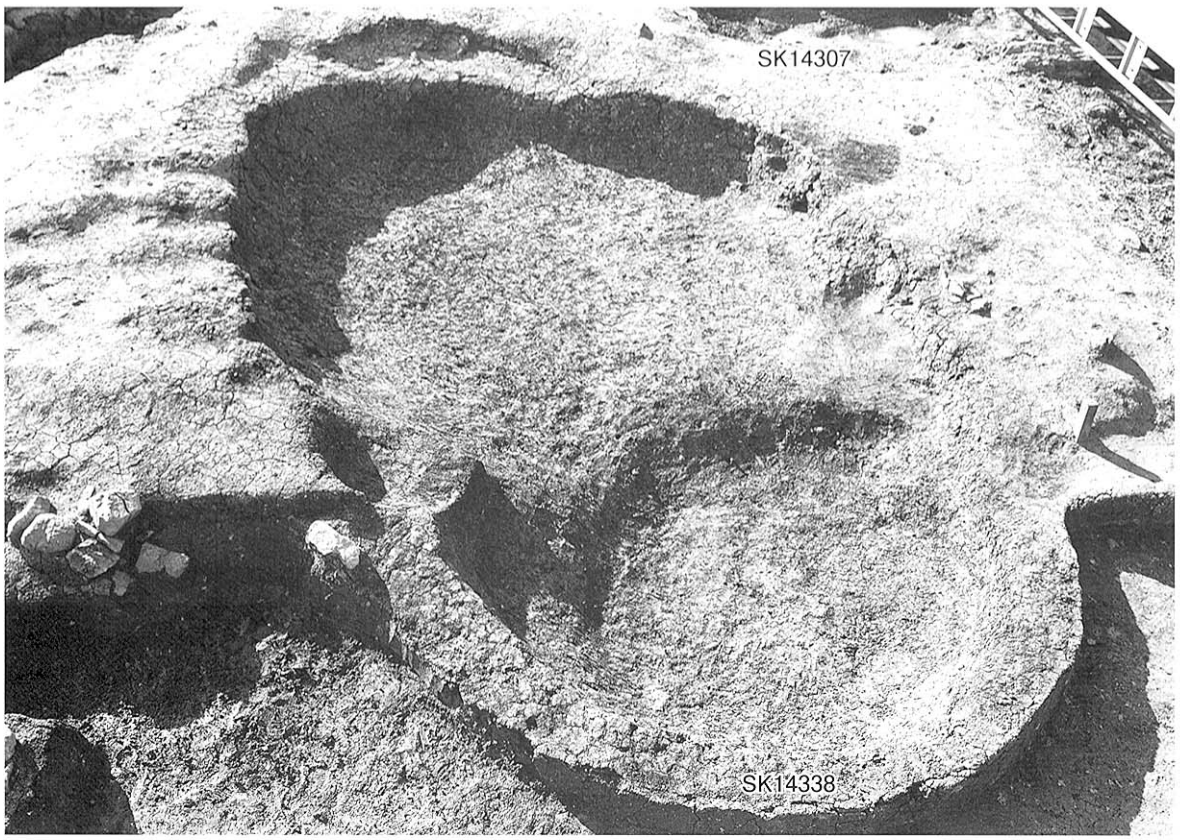
ある。19の頚部には、横方向の平行叩き目が残り、櫛描き波状文を加える。20は、横なで調整、体部内面は同心円叩きをなで消している。21・22は、**平瓦**である。21は平行叩き、22は斜格子に縦線を加えた叩き文様が見られる。23は、砂岩製の**砥石**である。

これらの出土遺物から、第Ⅳ期の９世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

ＳＫ14307

長径推定330cm、短径290cmの楕円形を呈する土坑で、深さは50cmをはかる。大量の瓦が廃棄されていた。

出土遺物の内、土師器・陶磁器をFig.31に示す。１～４は、**土師器**である。１は坏で、底部を篦切りする。２～４は、碗である。５～７は**須恵器**である。５は蓋であるが、内面がつるつるに磨れてお



Ph.33　ＳＫ14307（東より）

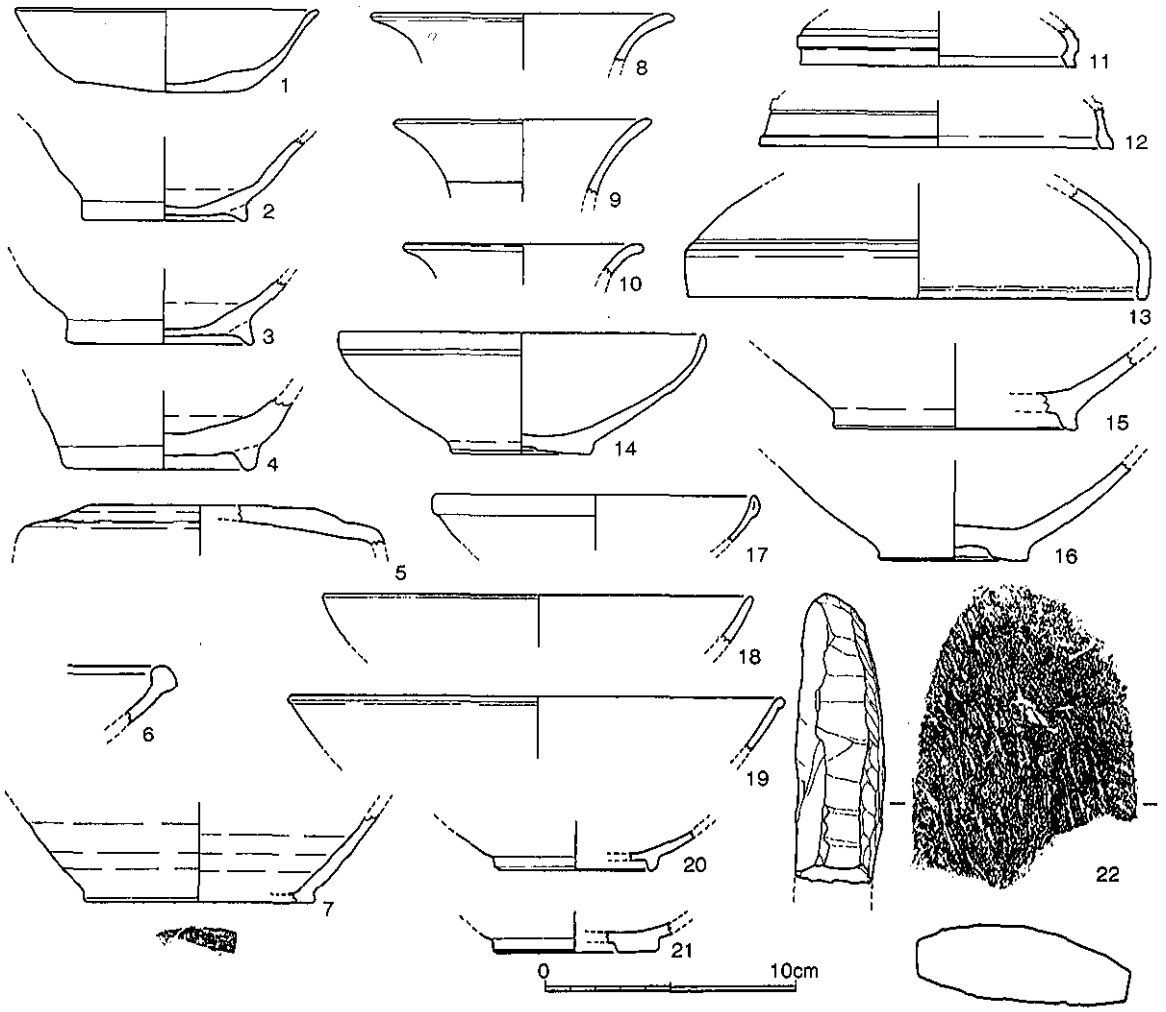


Fig.31　ＳＫ14307出土遺物実測図（1/3）

り、硯に転用された可能性も考えうる。ただし、墨は付着していない。**６・７**は、京都篠窯の鉢である。**７**の底部には、糸切り痕が残る。**８**は、**褐釉陶器**の瓶である。**９～16**は**越州窯系青磁**で、**９・10**は瓶、**11～13**は蓋、**14～16**は碗である。**11・12**は、香炉の可能性がある。**17～21**は、**白磁**碗である。**22**は、滑石の石錘であろう。前面を粗く削って、成形している。

これらの出土遺物から、９世紀後半を前後する時期の土坑と考えられる。

ＳＫ14308

長軸330cm、短軸180cmの小判形を呈する土坑で、深さは約40cmをはかる。遺構検出面では、特に遺物は露出していなかったが、全体的に掘り下げを開始したところ、一面を炭の層が覆い多量の土師器が散らばって出土した（**Ph.34・35**）。そのため、全面的な掘削は避け、長軸方向に半割、さらに短軸方向にベルトを残して、部分的な掘り下げに留めた。土層観察からは、土坑床面から壁面にかけて、おおむね三層にわたって粘土を敷き、その上に炭の層が乗り、土師器が集中出土する状態が看取できたが、床面に粘土を貼ることによる遺構の性格付けは不明である。

出土遺物を**Fig.33**に示す。**１～５・７～11**は、**土師器**である。**１～５**は坏である。底部は篦切りで、体部は横撫で調整する。**７～11**は、碗である。高台径は広く、比較的高く直立する。体部は、横撫

で調整で、下位で若干の丸みを持つが、直線的にやや外反しつつ大きく開く。**6**は、**黒色土器A類**の碗である。体部下半の丸みは大きい。内外面とも、横撫で調整で、篦磨きは見られない。**12**は、**黒色土器B類**の碗である。体部は横撫で調整する。**13**は、**越州窯系青磁**碗である。

陶磁器や瓦は若干出土しているが、出土遺物のほとんどは土師器である。鴻臚館内での土師器の一

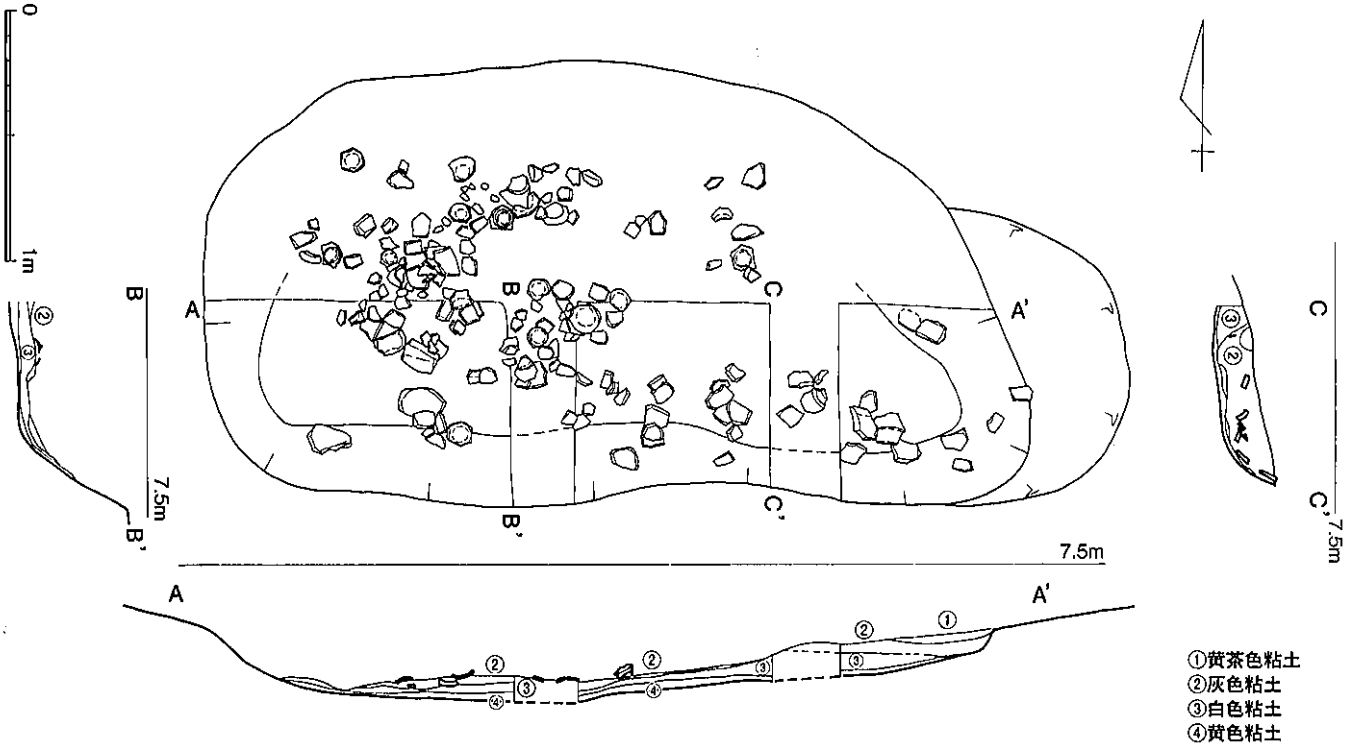


Fig.32　ＳＫ14308遺構実測図（1/30）

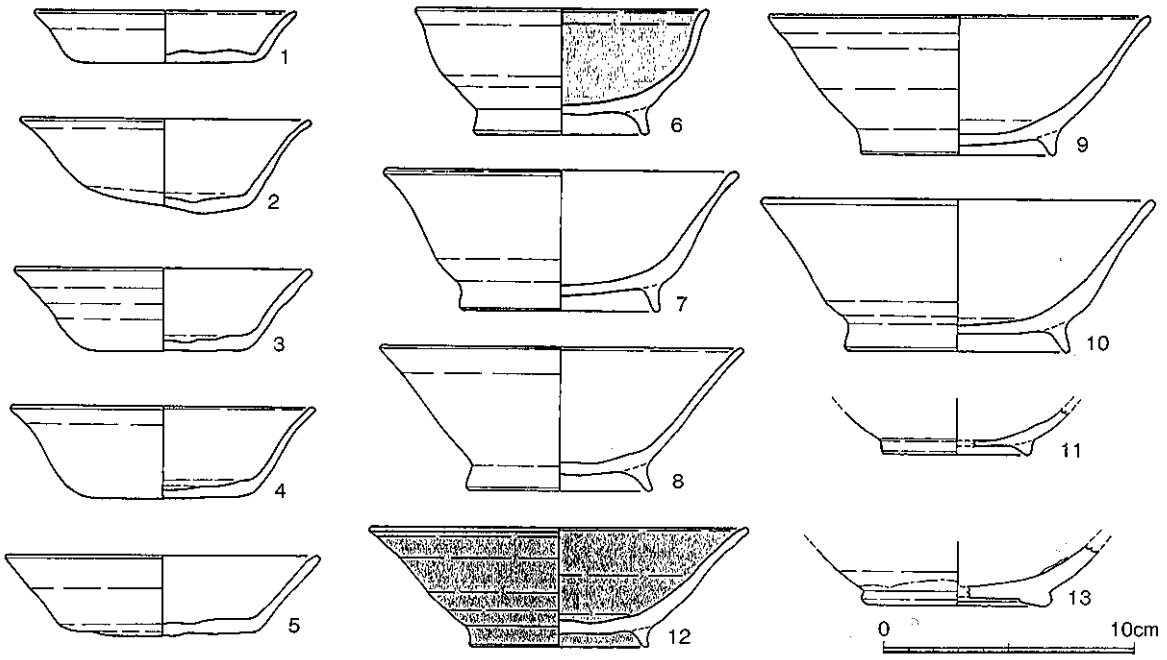
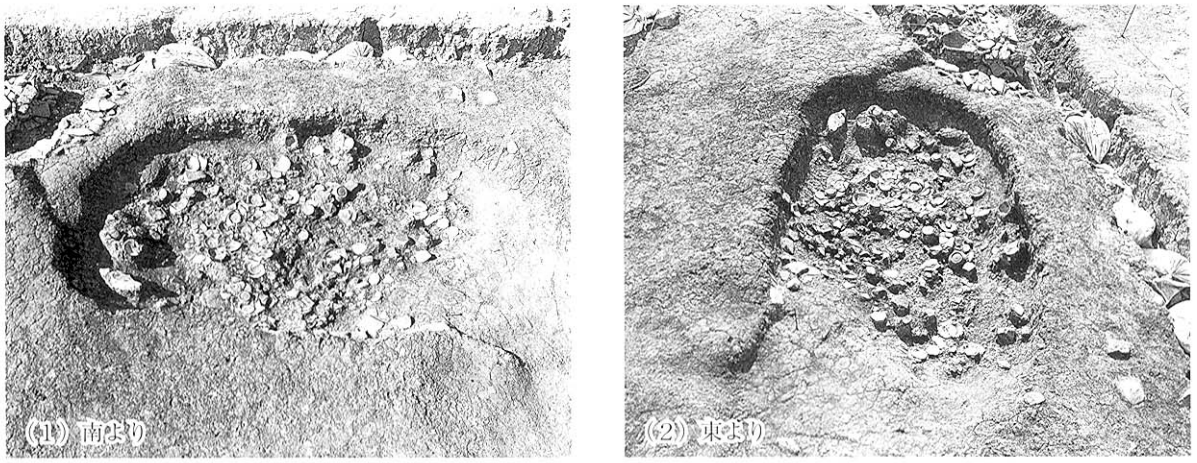


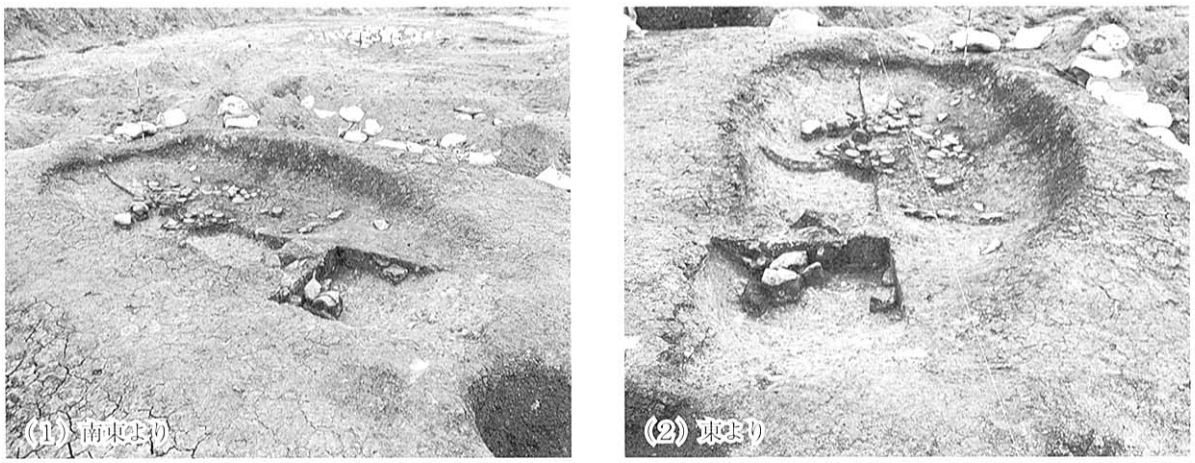
Fig.33　ＳＫ14308出土遺物実測図（1/3）



Ph.34　ＳＫ14308検出状況



Ph.35　ＳＫ14308遺物出土状況

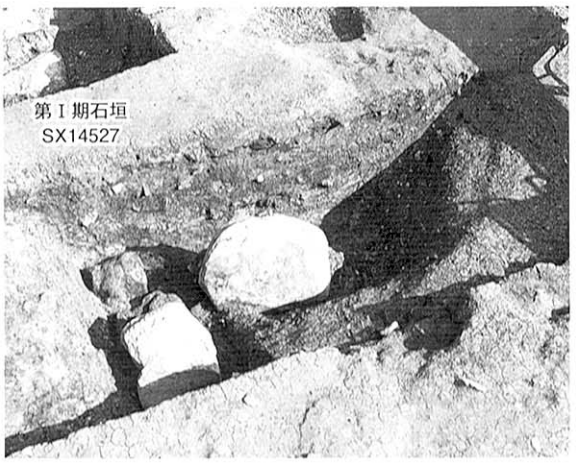


Ph.36　ＳＫ14308精査状況

括廃棄は、希少な例と言えよう。９世紀後半に属すると考えられる。

ＳＫ14339

02－3トレンチ北端で確認した土坑である。第Ⅰ期石垣の土部を破壊して掘り込まれた土坑で、トレンチ土層壁を残すため、西半分を調査している。検出面上で確認した限りでは、直径360cmの円形を呈する。埋土中に、径90cmほどの円形を呈する扁平な玄武岩が、縦に落ち込んでいた。石材や寸法から、第Ⅲ期鴻臚館の礎石と考えられる。



Ph.37　ＳＫ14339（西より）

出土遺物としては、土師器・輸入陶磁器・瓦などがみられるが、土師器・陶磁器は小片で量も少なく、図示に耐えない。Fig.34、Ph.55には、瓦を示す。１は、鴻臚館Ⅰ式の軒平瓦当である。鴻臚館Ⅰ式は、均等唐草文であり、中心部やや右側の破片である。２～５、８～12は平瓦である。２・３・９・10の叩き文様は、単線の斜格子に平行する縦線を加え、その区画内に十字を持つ。長側小口は、丁寧に篦削りで面取りする。11は、単線の方形の斜格子に十字を加えたものである。４は、

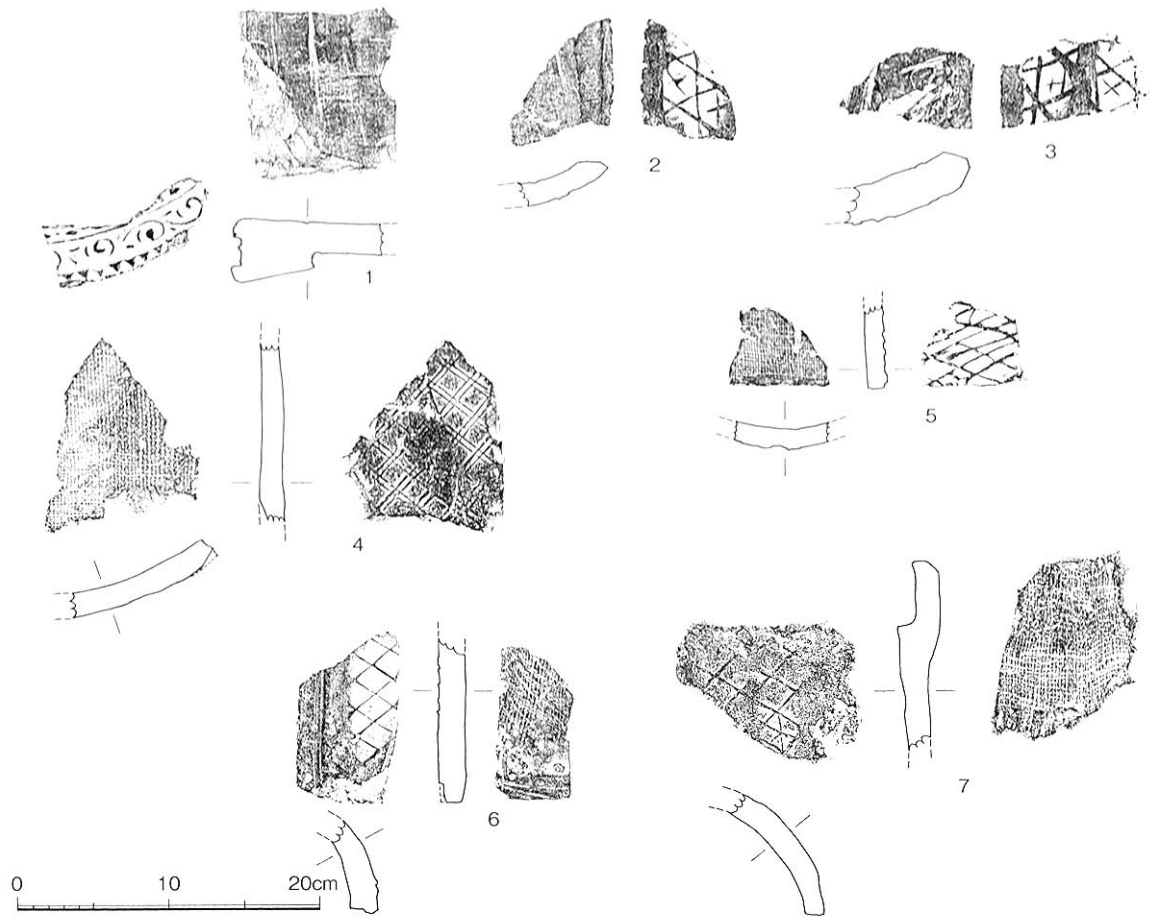
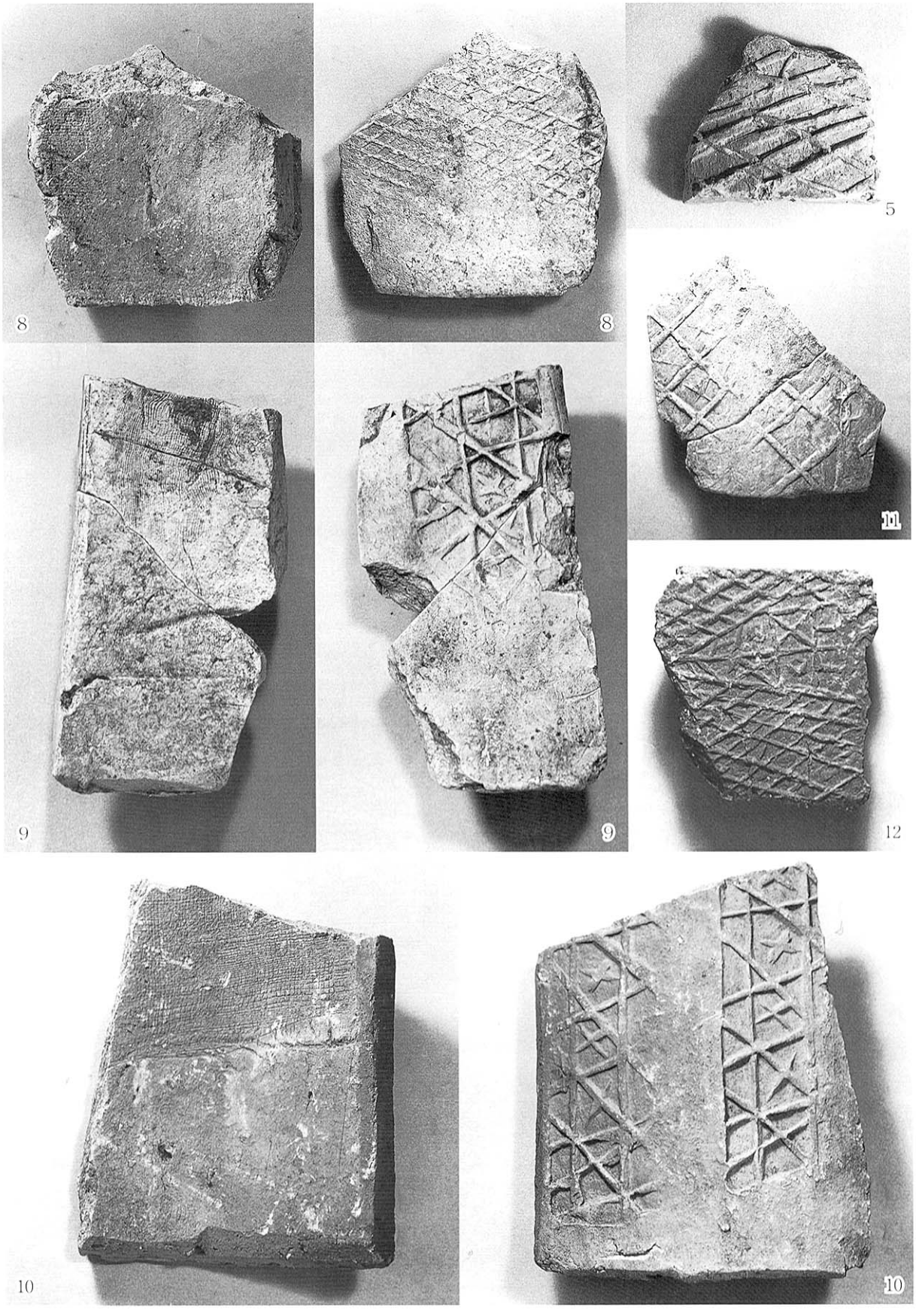


Fig.34　ＳＫ14339出土遺物実測図（1/5）



Ph.38　ＳＫ14339出土遺物

複線の方形斜格子で、比較的薄手、精緻な作りである。小口は、内側から切り込み、折り取る。**12**は、単線の斜格子に、魚鱗形の記号を加えたものである。**6・7**は丸瓦である。ともに単線の斜格子だが、**7**の一部には区画内に縦線と斜め十字を加えた文様が見られる。

図示できなかった土師器などから、10世紀代の土坑と推定される。

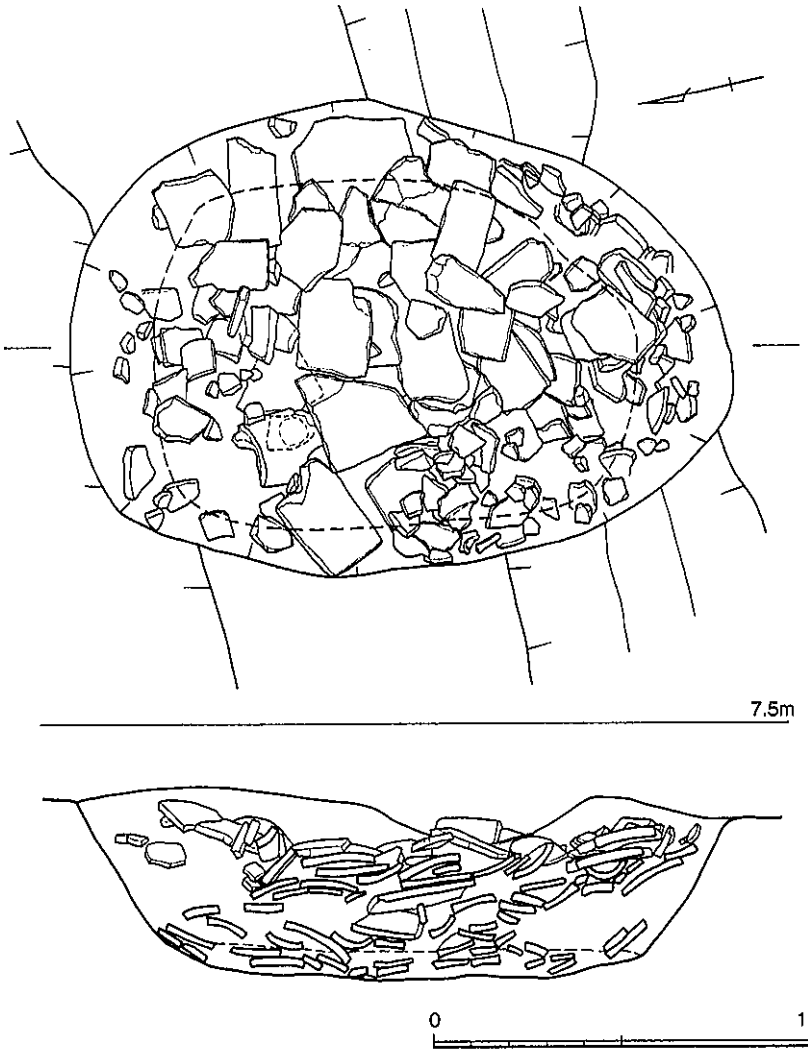


Fig.35　ＳＫ14510遺構実測図（1/20）

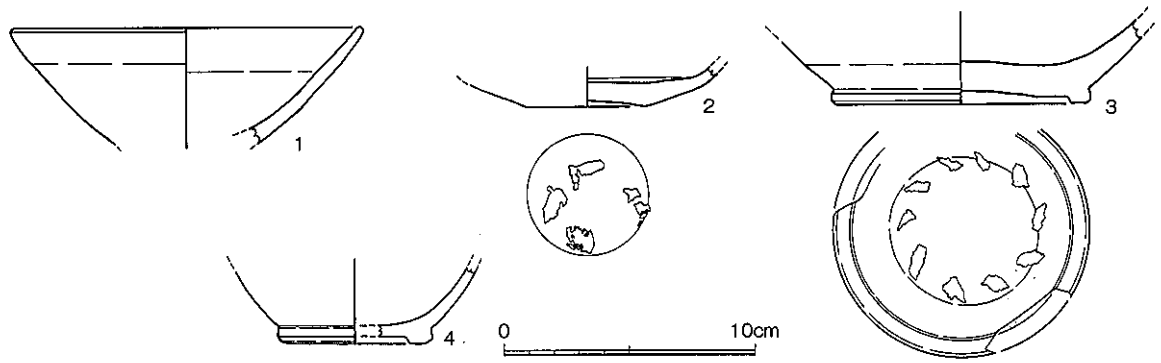


Fig.36　ＳＫ14510出土遺物実測図１（1/3）



Ph.39　ＳＫ14510（南西より）

ＳＫ14510

平成13年度調査区において、第Ⅰ期石垣ＳＸ1245の再調査のため、石垣前面を大きく掘削した。それに先だって、掘削範囲にかかる遺構の完掘を行なった過程で調査した土坑である。検出位置は、Fig.6に示す。

長軸178cm、短軸126cmの卵形を呈し、検出面からの深さは50cmをはかる。土坑内には、ほぼ全面にわたって、ぎっしりと瓦が詰っていた。廃棄されていた瓦に、大ぶりな破片が多いのが特徴である（Ph.40）。



Ph.40　ＳＫ14510瓦出土状況（東より）

これらの瓦には、Ph.41に見るように、葺いた際の下端側に焼け焦げた痕跡を持つものがみられ、屋根の上に葺かれた状態で、被熱したことを示している。もとより、火災にあった建物一棟分の瓦としてはかなり少ない量であり、おそらく、破損して再利用できなかった瓦だけを一括廃棄した土坑と考えられよう。

出土遺物としては、土師器・輸入陶磁器なども見られたが、土師器で図示に耐えるものはない。輸入陶磁器をFig.36に、瓦をFig.37 ～ 39、Ph.41 ～ 44に示す。

１～３は、**越州窯系青磁**である。１・３は碗、２は皿で、全面に施釉している。３は、あるいは鉢の可能性もある大ぶりな底部で、低平な角高台を持ち、高台の内側に重ね焼きの目跡がめぐる。４は、

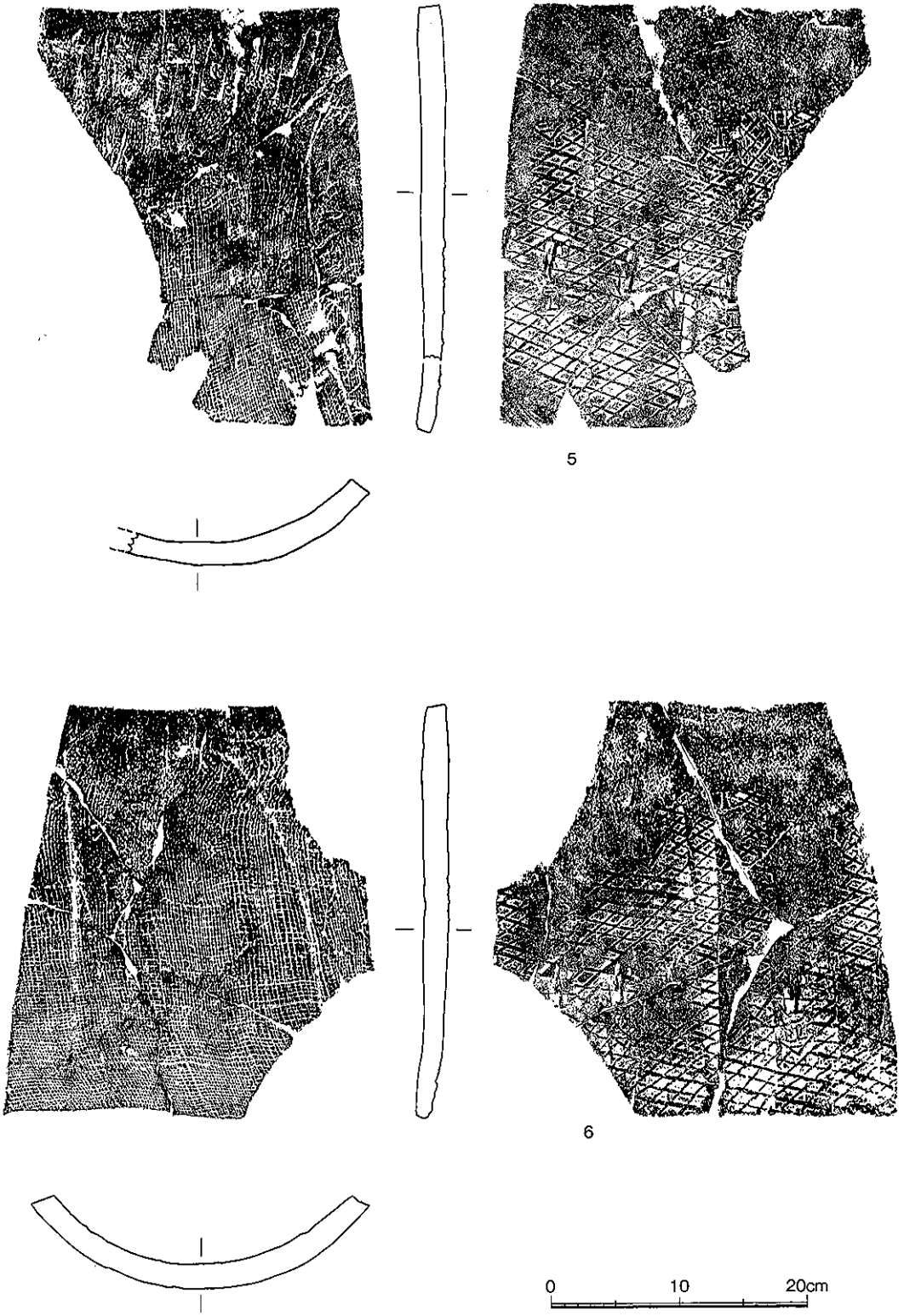


Fig.37　S K14510出土遺物実測図２（1/5）

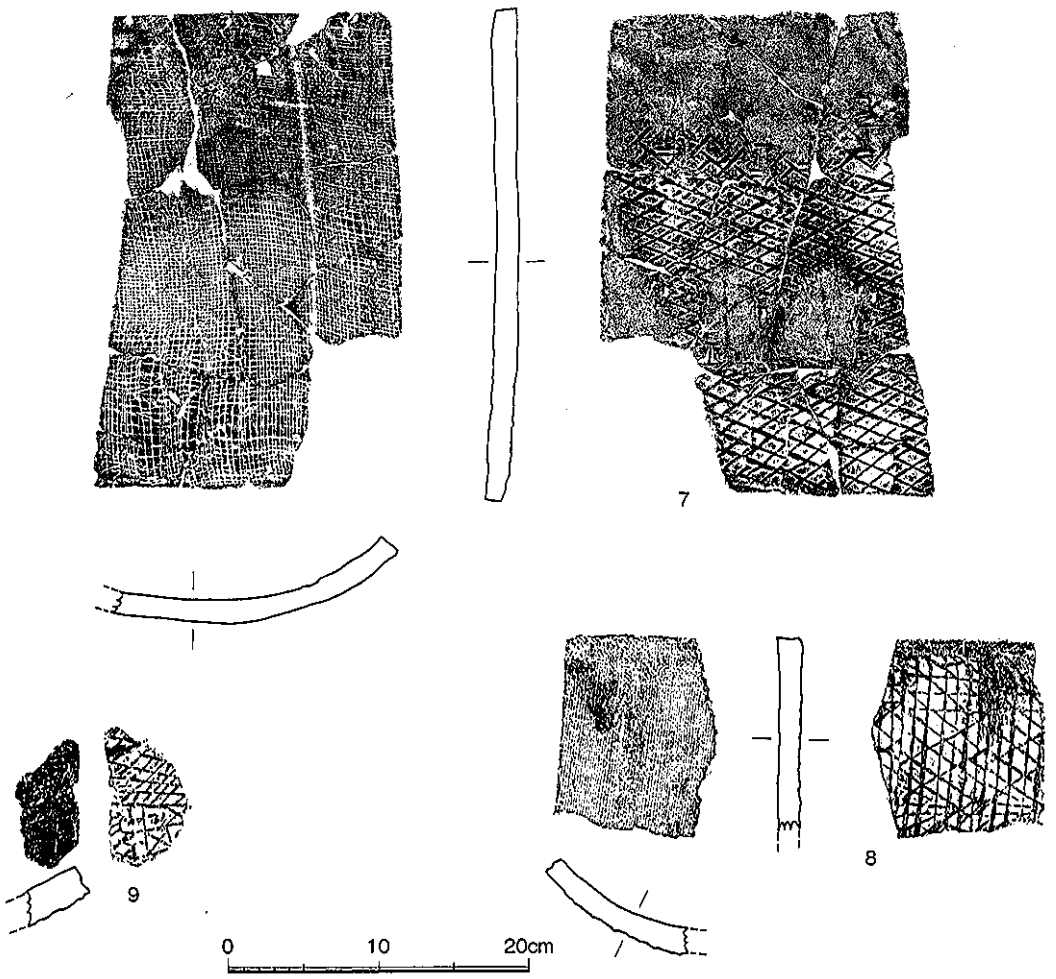


Fig.38　ＳＫ14510出土遺物実測図３（1/5）

白磁碗である。高台は、幅広で平坦に作る。

５～９、12～20は、**平瓦**である。**５～７、12・13**は、やや目の大きい単線の斜格子に文字を叩打するものである。文字は、「今行」の左字とされる。これらは、同じ叩き板を用いており、一括して生産された瓦と考えられる。瓦の縦寸法は、**５**で35cm、**６・７**で33cm、幅は**６**の中程で26cmをはかる。桶巻作りで、長側小口は内側から篦で切り込みを入れ、折り取っている。内面の円弧から推定して、一回の桶巻で４枚の瓦を分割したものと思われる。また、軒側の小口（実測図上側、写真下側）の内面には、工具による横方向の削り痕跡が残る。胎土には、砂礫を多く含むが、生地のきめは比較的細かい。瓦質に焼成されるが、表面は黒化せず、淡黄褐色を呈している。**８・19**の叩き文様は、単線の斜格子に平行縦線が加わる。**８**では、さらに部分的に横線と斜線が集約して蜘蛛巣状を呈する。長側小口は、内側から切り込んで折り取る。**９・20**は、単線の斜格子に魚鱗形の記号が加わる。長側小口は、内側から切り込んで折り取る。このタイプは、他に比べて厚みがあり、胎土も粗い。**14**は、細かい単線の斜格子叩きを持つ。**15～18**は、縄目叩きを施す。内面には、布目の下に粘土板から切り離した際のコビキ痕跡が明瞭に残り、一枚作りであることを物語っている。長側小口は、篦切りである。胎土は、若干の砂粒は含むものの、全体的にきめが細かい。焼成は、須恵質や硬い瓦質を呈するものが多く、総じて良好といえる。

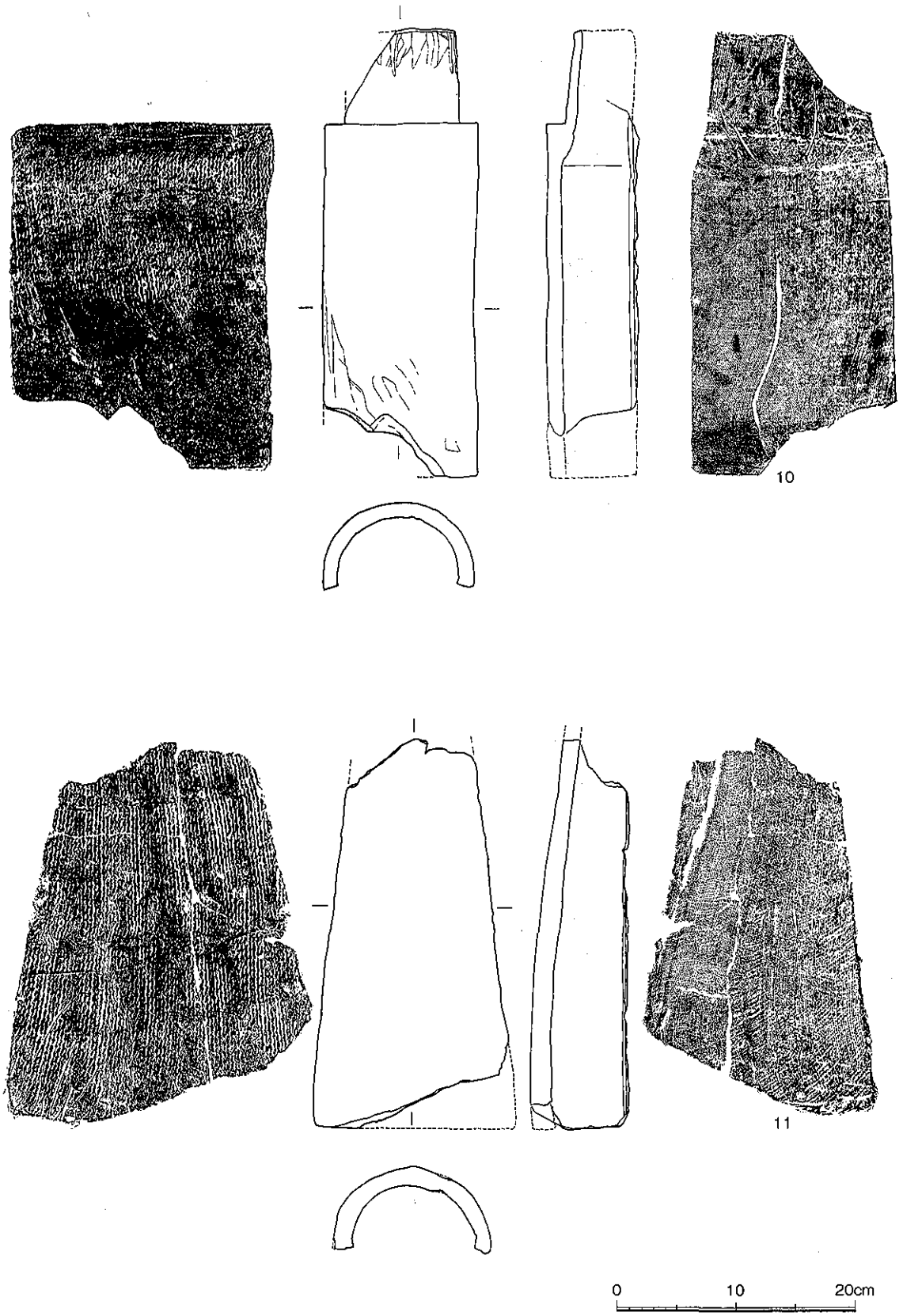
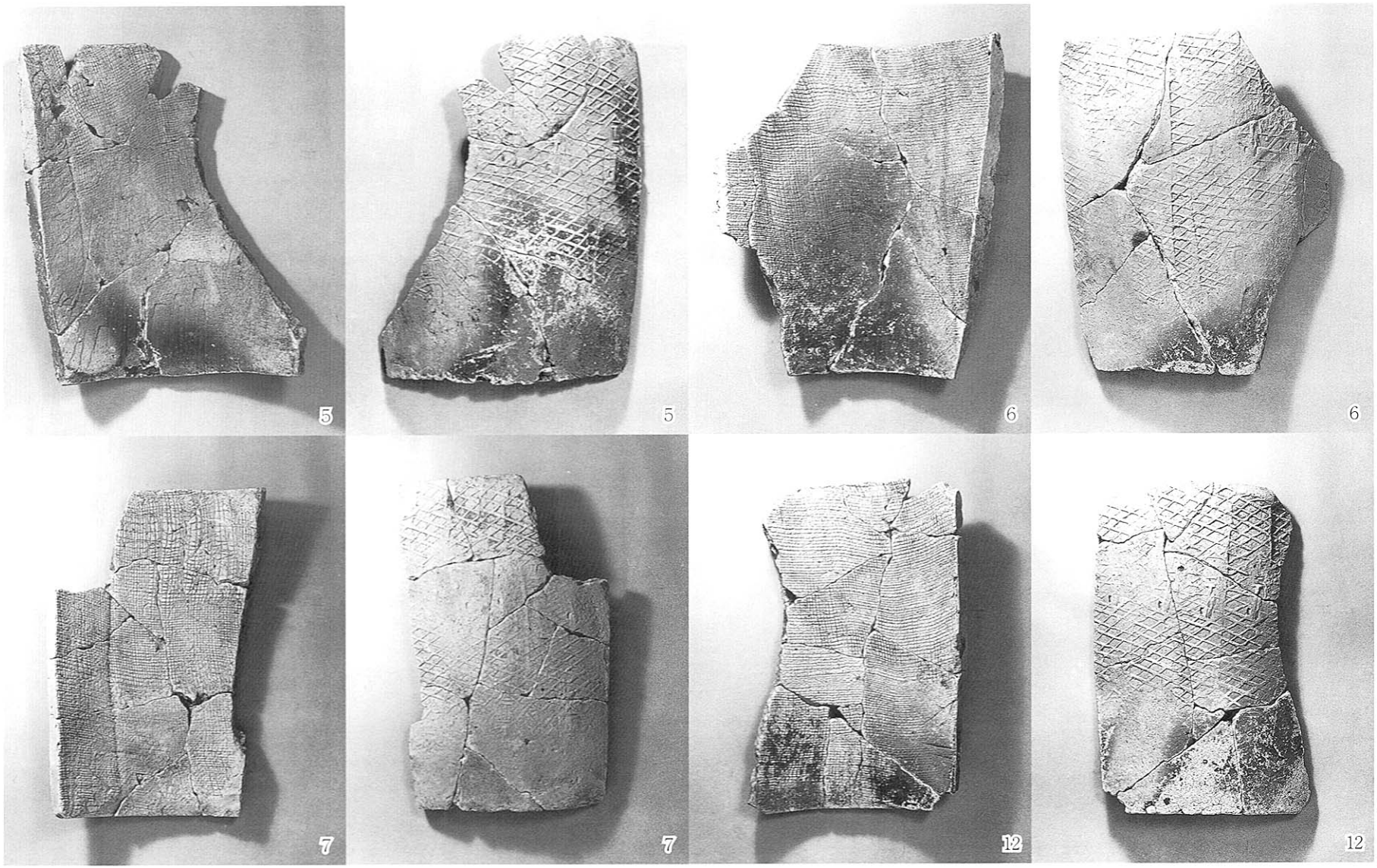
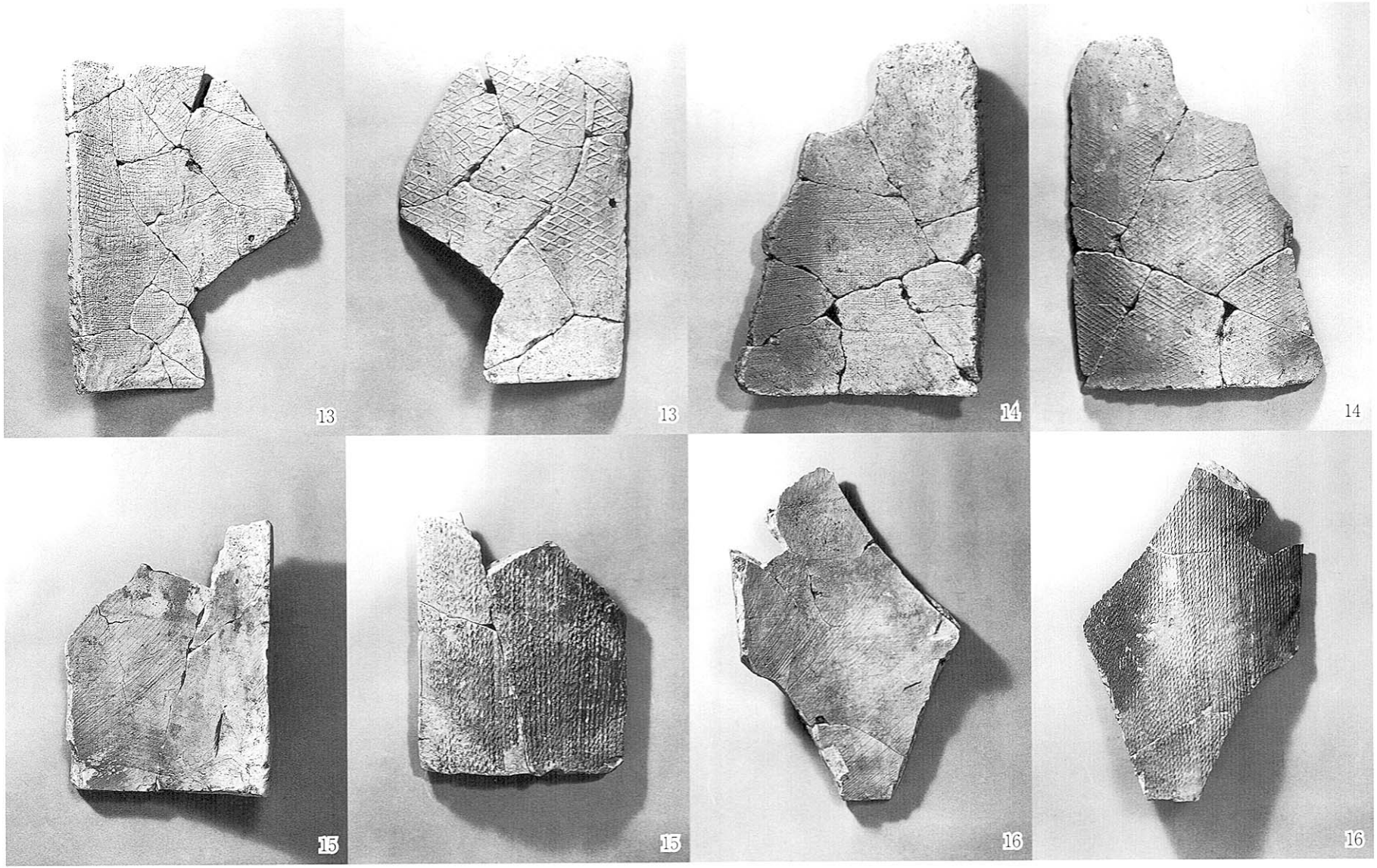


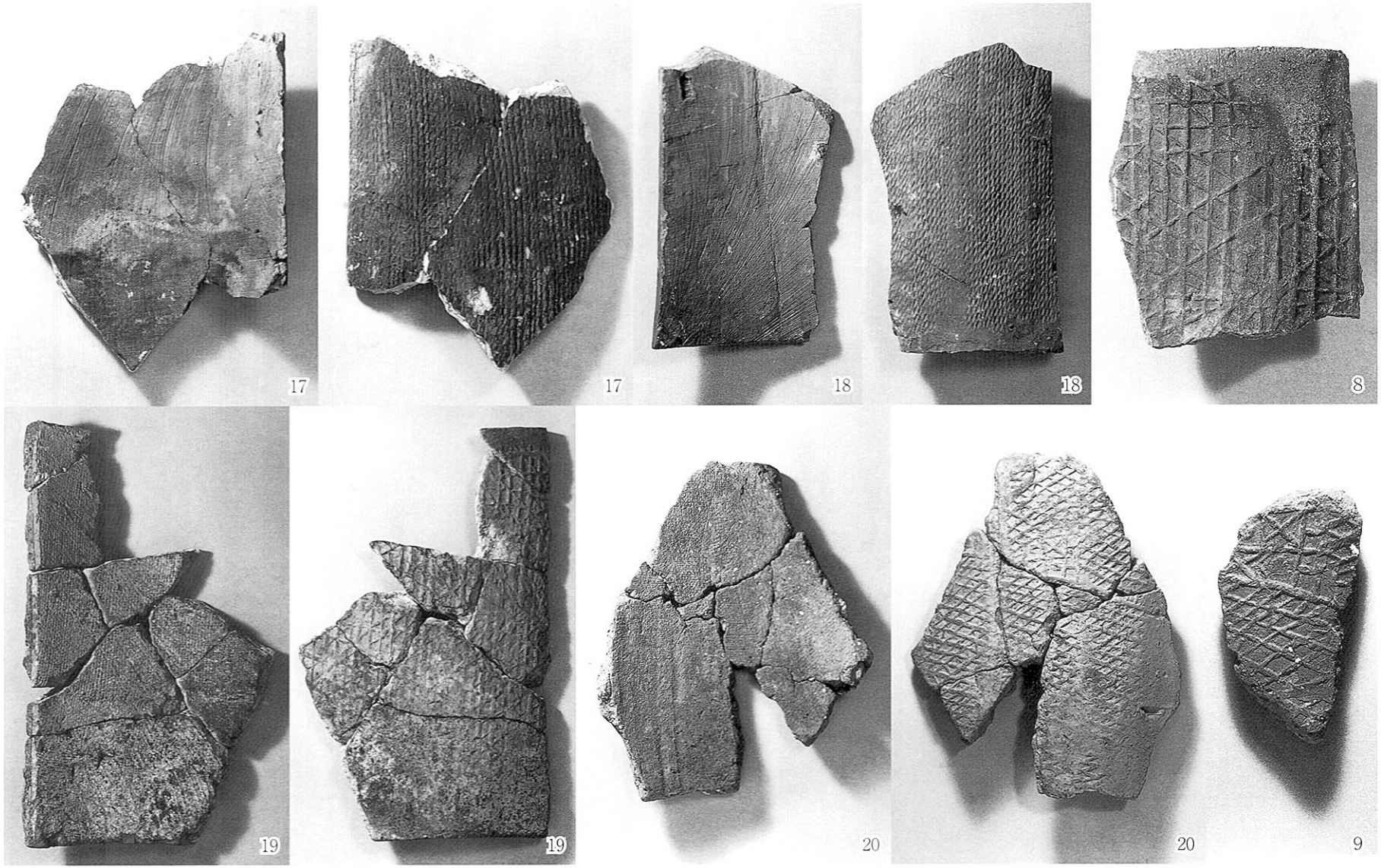
Fig.39　S K14510出土遺物実測図４（1/5）



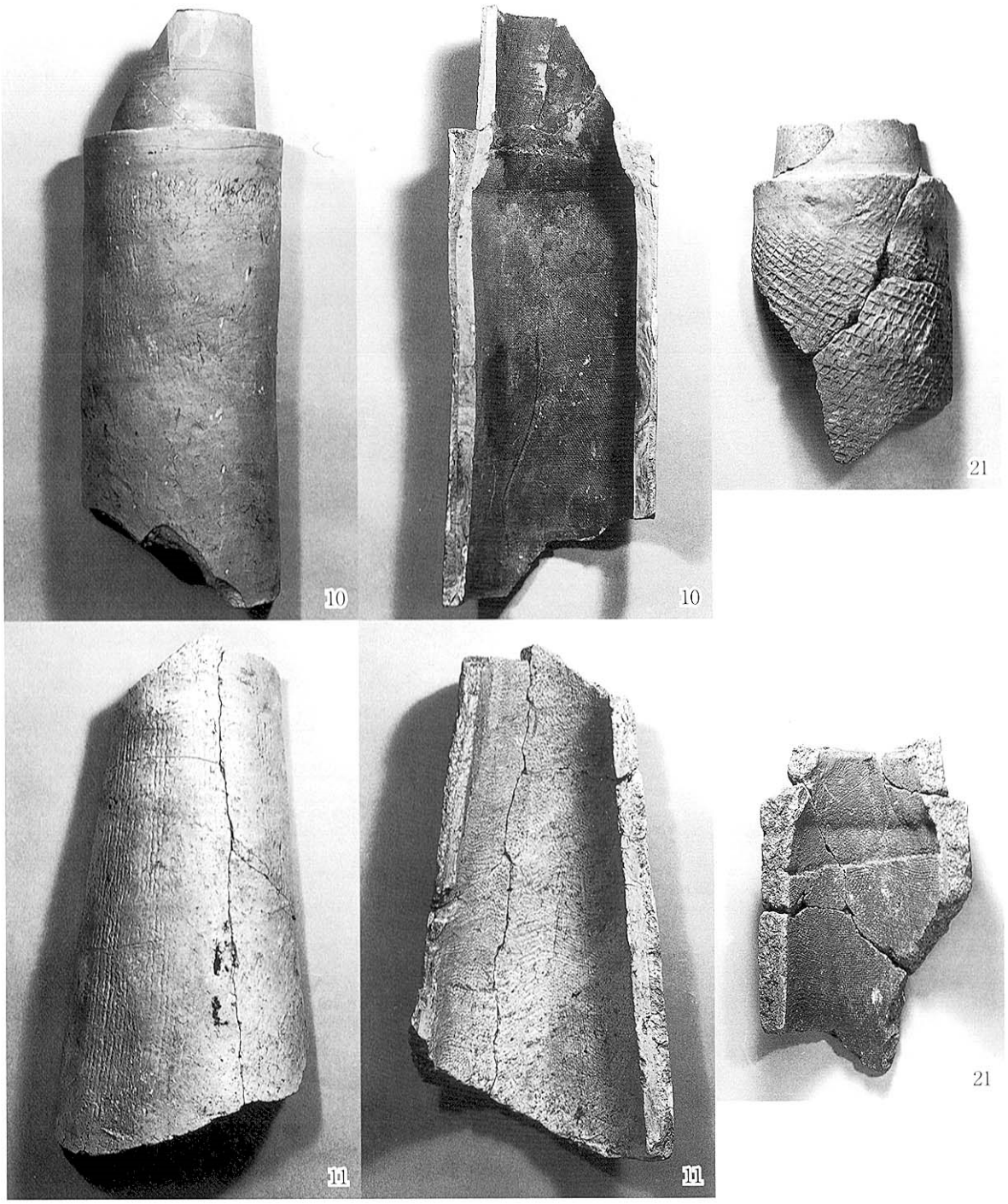
Ph.41　SK14510出土遺物1



Ph.42　ＳＫ14510出土遺物２



Ph.43　ＳＫ14510出土遺物３



Ph.44　ＳＫ14510出土遺物４

10・21は、一端に段差を設けた**玉縁式丸瓦**である。**10**の玉縁部分は、円筒状に長くのびる。凸面には縄目叩きが認められ、両端部分は、薄く削りをいれる。胎土は、きめ細かく精良で、須恵質に焼成されている。筒部の長さ29.3cm、玉縁長8.7cm。幅が狭く、精緻な作りである。**21**は、裁頭円錐状の玉縁を持つ。玉縁は短い。筒部の凸面は、単線の斜格子叩きである。胎土は、砂礫を多く含み、粗い。瓦質焼成である。**22**は、一端を細く作る**無段式丸瓦**で、いわゆる行基式丸瓦である。上端が残っていないので全長は不明だが、現存長33cmをはかる。凸面は縄目叩きされる。鴻臚館跡出土瓦では、無

段式は希少で、平成14年度調査でも明らかにそれと知れるのは、この一点だけである。

出土した陶磁器の特徴などから見て、10世紀後半の遺構とみて、大過ないであろう。

ＳＫ14511

ＳＫ14510と同様に、平成13年度調査区において調査した土坑である。検出位置は、**Fig.6**に示す。長軸155cm、短軸115cmの卵形を呈し、検出面からの深さは40cmをはかる。

埋土中から、土師器・陶磁器・瓦が出土したが、ＳＫ14510のように被災した瓦を一括廃棄したような状況はなく、通常の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物の一部を**Fig.41・42**に示す。**１～７**は、**土師器**の碗である。**１**は、直線的に開く坏部分に低平な高台がつく。**２～６**の体部は、腰に若干の丸みを持ち、やや外半気味に大きく開く。高台は、比較的高く、まっすぐに立つ。**７**は、全体的に内湾気味の丸みを持つ。高台は、**２～６**と同様に作る。いずれも、体部は横撫で調整している。**８**は、**黒色土器Ｂ類**の皿である。やや内湾気味の浅い皿部に、断面三角形の低い高台が付く。横撫で調整で、篦磨きは行なわれていない。内外面ともに炭素が吸着し、光沢のある漆黒色を呈する。**９**は、**緑釉陶器**である。内面には沈線で花文を描く。胎土は灰色でややきめは粗いが緻密で、須恵質に焼成されている。釉は、若草色で、光沢を持ち、全面に薄く施される。尾張の猿投窯の緑釉陶器で、黒笹90号窯式と思われる。平成13年度調査で出土した皿(『鴻臚館13』P.86、Fig.60－1)と同一個体の可能性が高い。**10**は、**土錘**である。半分ほどに折れているが、長い紡錘形に復元できる。土師質に焼成される。**18**は、**黒色土器Ａ類**の甕である。外面は横撫で調整、内面は横方向に篦磨きする。内面には炭素が吸着し、黒色を呈する。

11～14は、**越州窯系青磁**の碗である。**13**は、体部に縦に篦を当てて窪ませ、輪花に作る。**15・16**は、**白磁**碗である。**17**は、陶器の鉢である。赤褐色できめ細かい胎土に、ベージュ色の釉がかかる。ただし、火熱を受けている様で、釉色は、本来異なっていた可能性も考えられる。内面にも施釉されていたと思われるが、釉は飛んでしまい、下地と思われる白色の化粧土が全体に露出している。

19～27・30は、**平瓦**である。**19～24・27**は、縄目の叩き痕跡を持つものである。**19・20・22・23**の凹

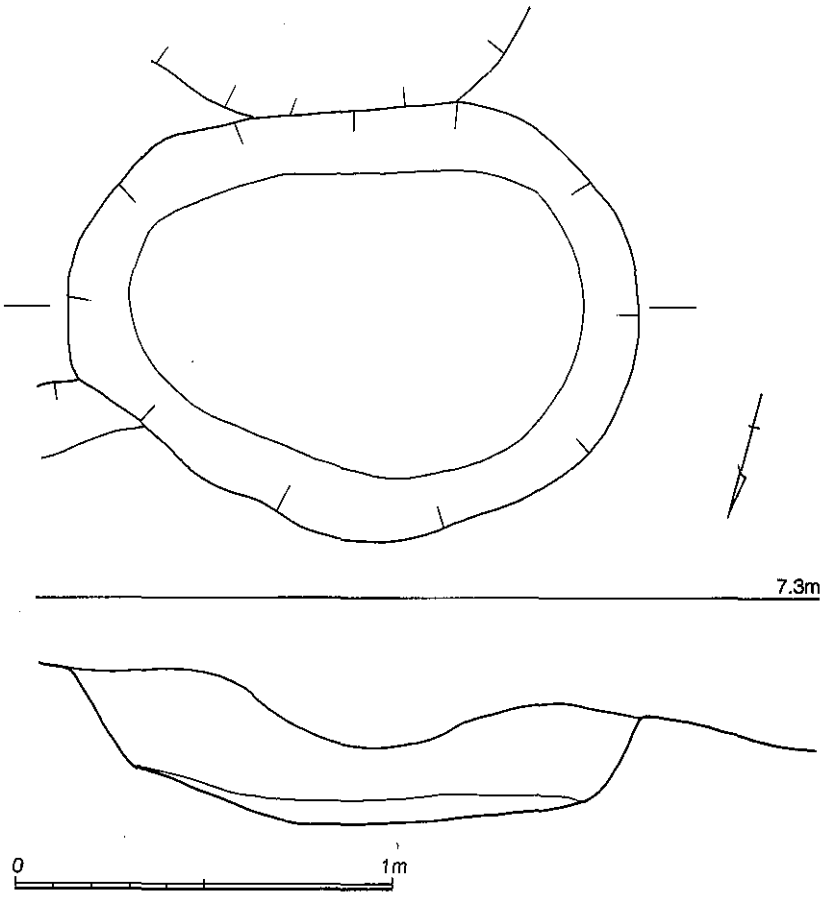


Fig.40　ＳＫ14511遺構実測図（1/20）

面には、粘土板から切り離した際のコビキ痕跡が残っており、長側小口は篦切りされている。21・24の小口も篦切りであるが、凹面側と凸面側から面取りする様に削られている。27は、非常にきめ細かい胎土で、薄手に作られており、厚さは1.25cmにすぎない。焼成は須恵質で、青灰色を呈する。長側小口は、内側から篦で切り込み、折り取る。25・26は、細かい単線の斜格子である。小口は、内側から切り込んで折り取る。30は、縦・横・斜めに単線が走る叩き文様である。胎土には、大小の砂礫が混じり粗い。焼成は不良で、土師質を呈する。28・29は、**丸瓦**である。28には、単線の斜格子叩きが見られる。29の叩き痕跡は不明瞭だが、平行線する斜線である。二次的に火熱を受け、焼き締まっている。

13の背磁が後出する要素を持つが、出土遺物を全体的にみて、９世紀後半に位置付けられる。

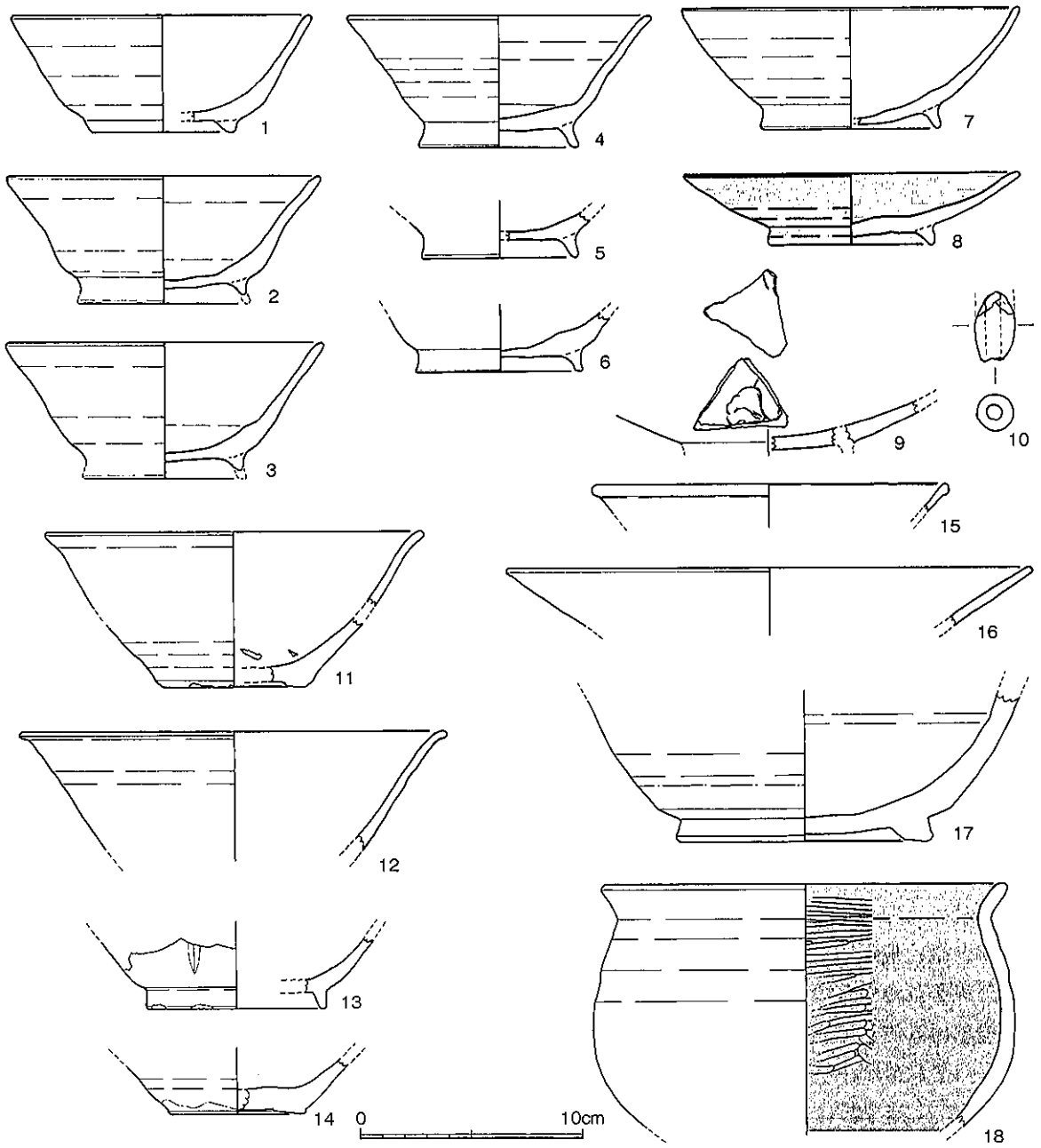


Fig.41　ＳＫ14511出土遺物実測図１（1/3）

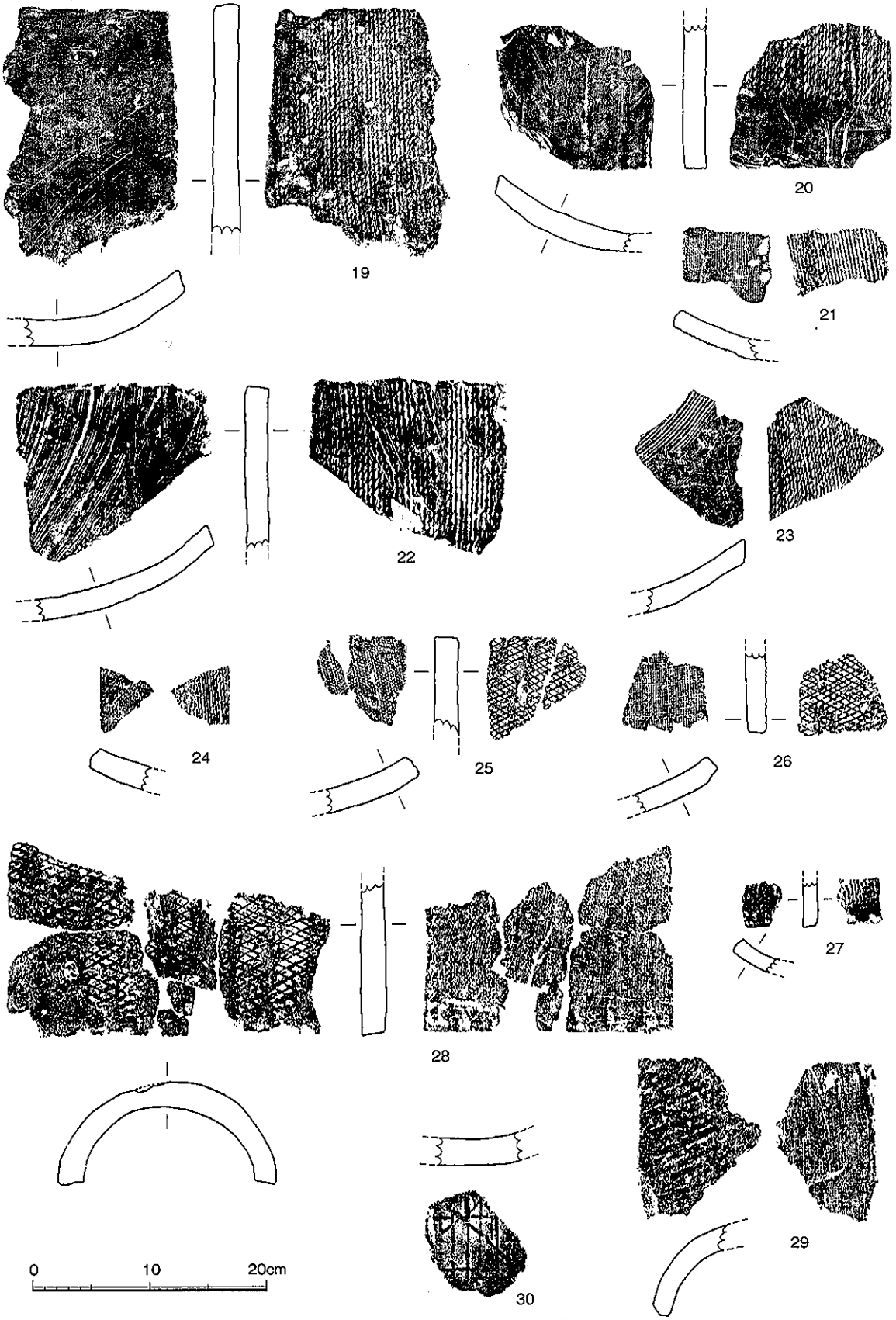


Fig.42　ＳＫ14511出土遺物実測図２（1/5）

ＳＫ14513

調査区東辺近くから検出した土坑である。土坑の東端部は、第Ⅰ期石垣調査に際して設定したグリッド掘削後の、降雨による崩落で失われている。

瓦を主として廃棄しているが、土師器と少量の陶磁器が出土している。遺物の包含量が多く、密に廃棄されていたため、保存することとし、半裁して断面図を作成した状態で、埋め戻した。

出土遺物の一部を、Fig.44～48に示す。1～20は、**土師器**である。1～10は、坏である。底部は回転ヘラ切りで、板目圧痕が認められる。11～17は、碗である。高台は高く、径が大きい。18は、**黒色土器Ａ類**の小碗である。内面はへら磨きで黒色処理、外面は横なで調整する。19は、高台付き鉢である。底部は、円盤貼り付けで、さらに高台を付けている。20は、甕である。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横位のへら削りで、口縁部は横なで調整する。21～24は、**越州窯系青磁**である。21は、壺の口縁部であろう。頸部から短く外反し、丸く収める。22～24は、碗である。22・23は、火熱に合い、釉が剝離気味となる。外面の下半部は露胎であり、粗製品に分類される。24は、全面施釉で、畳付きのみ露胎とする。25～28は、**白磁**である。25～27は、碗である。27は蛇の目高台で、全面施釉の後、畳付きの釉を掻き取る。28は、鉢であろうか。口縁直下には、



Ph.45　ＳＫ14513（南東より）

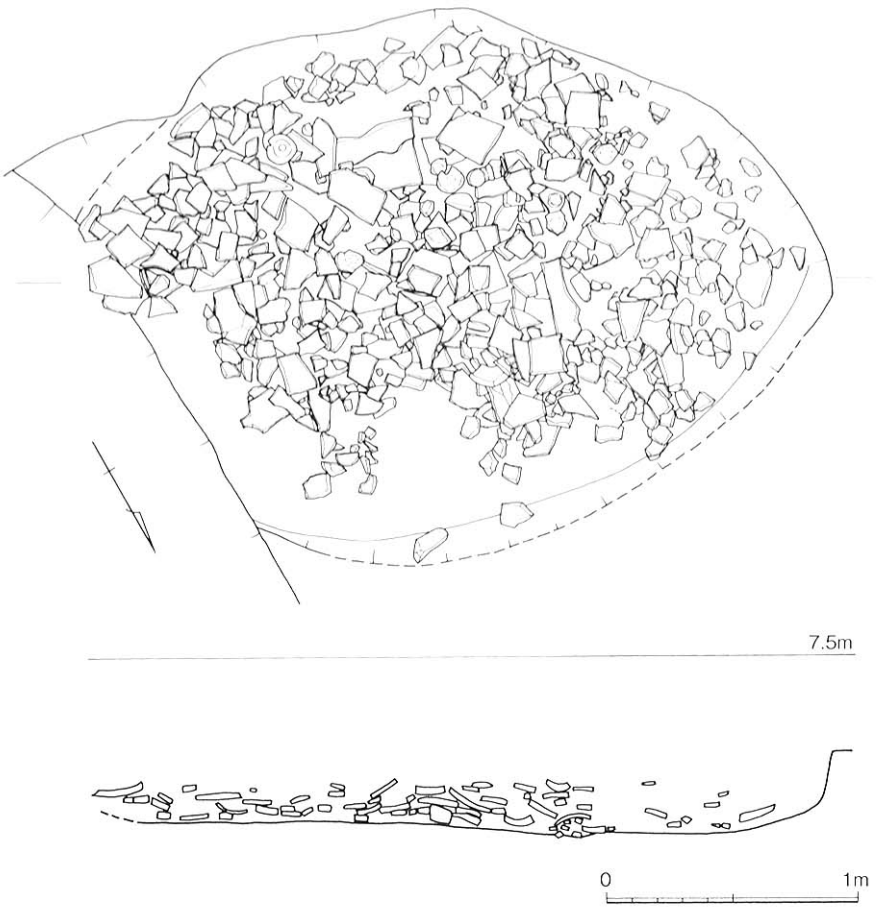


Fig.43　ＳＫ14513遺構実測図（1/30）

小さい鍔上の突帯が廻っている。この他、長沙窯の水注破片が数点出土している。

29～53には、瓦を示す。29～45は、平瓦である。29～33は、縄目叩きである。凹面には、粘土板から切り離した際のコビキ痕跡が見られる。一枚作りで、長側小口は篦切りされている。34～36は、単線の細かい斜格子である。長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。37は、単線の斜格子であるが、ところどころに縦線と横線がかむ。長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。38・40は、単線の斜格子であるが、平行横線が、部分的に加わる。長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。39は、単線の斜格子に間隔の狭い平行縦線を加えるもので、下端近くに

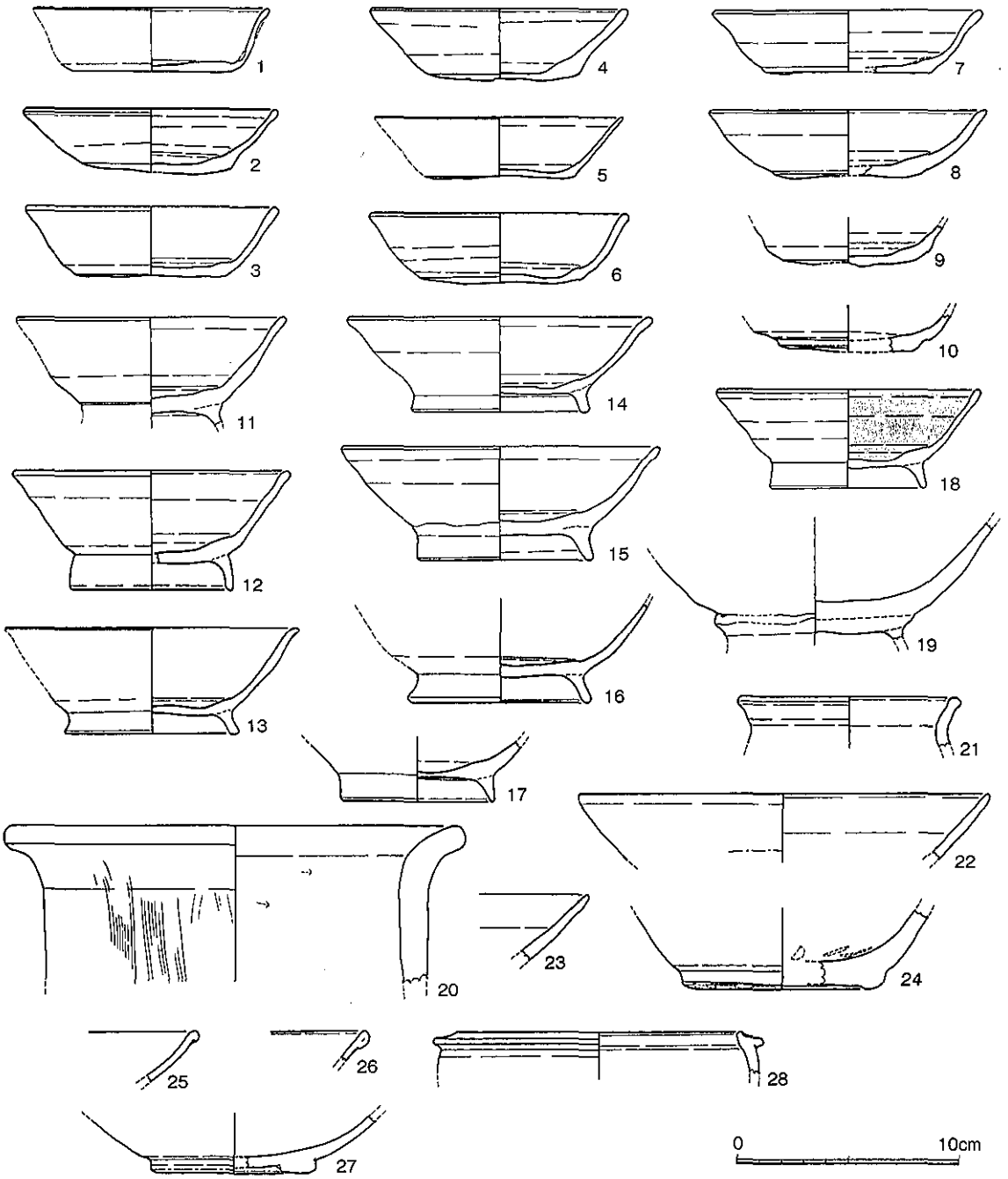


Fig.44　ＳＫ14513出土遺物実測図１（1/3）

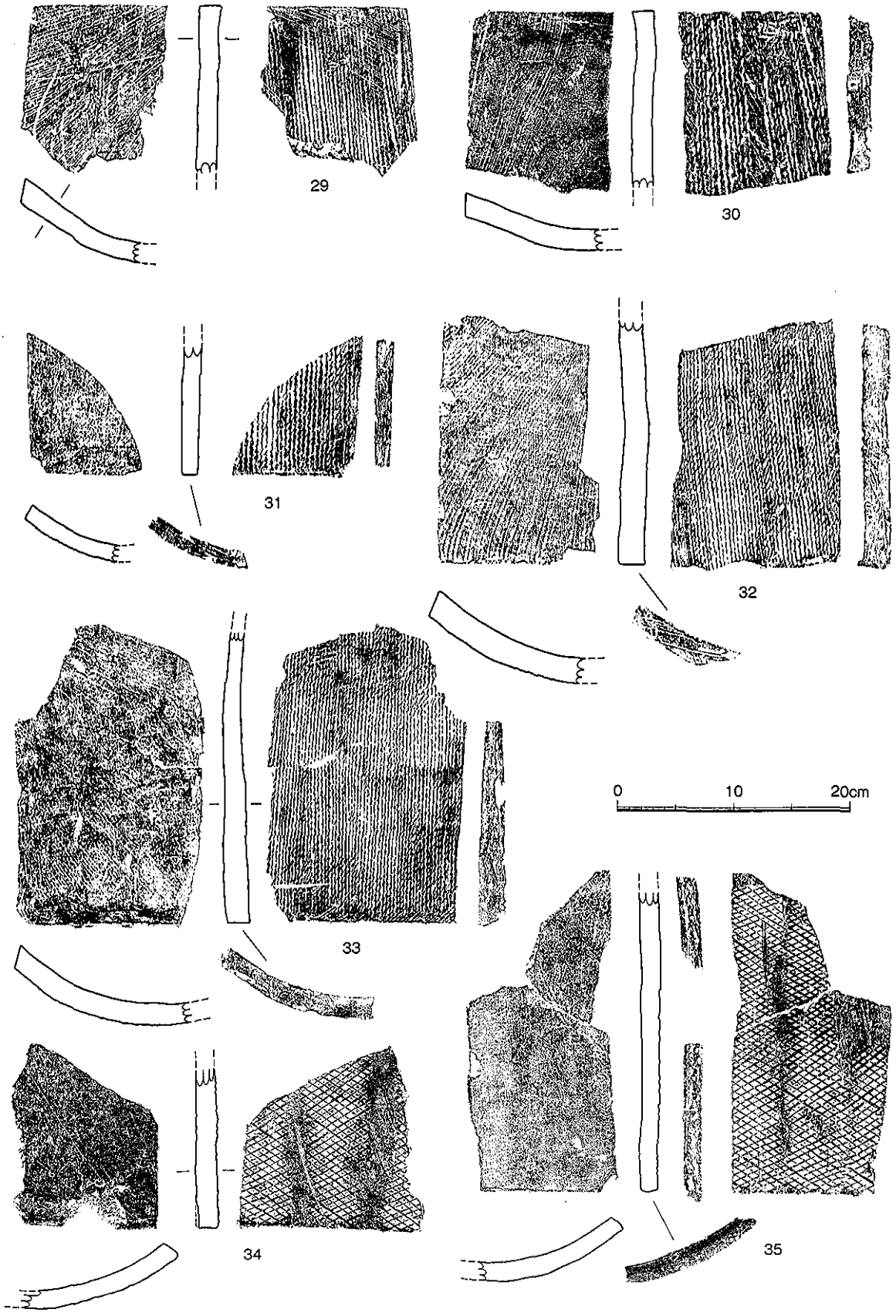


Fig.45　ＳＫ14513出土遺物実測図２（1/5）

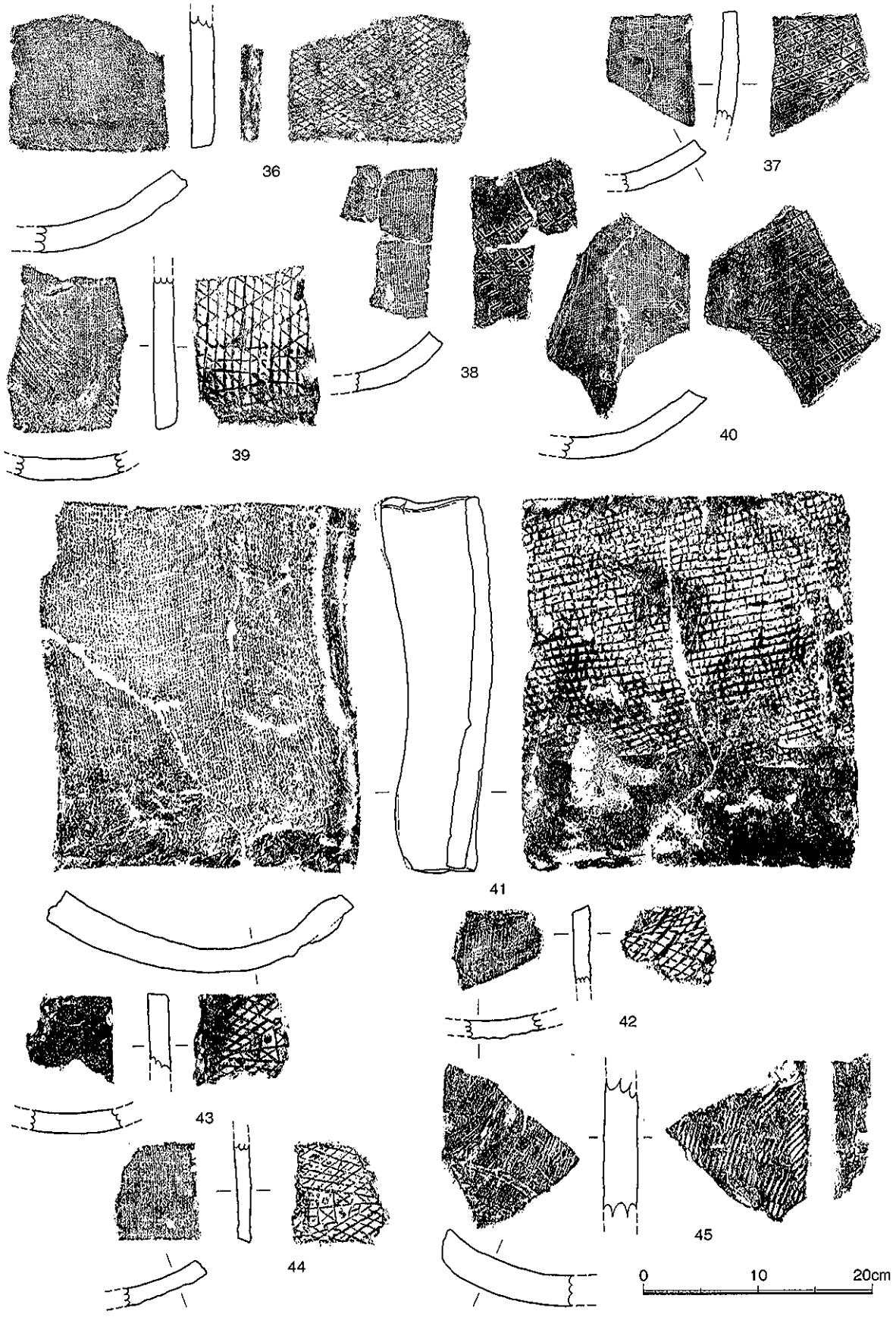


Fig.46　ＳＫ14513出土遺物実測図３（1/5）

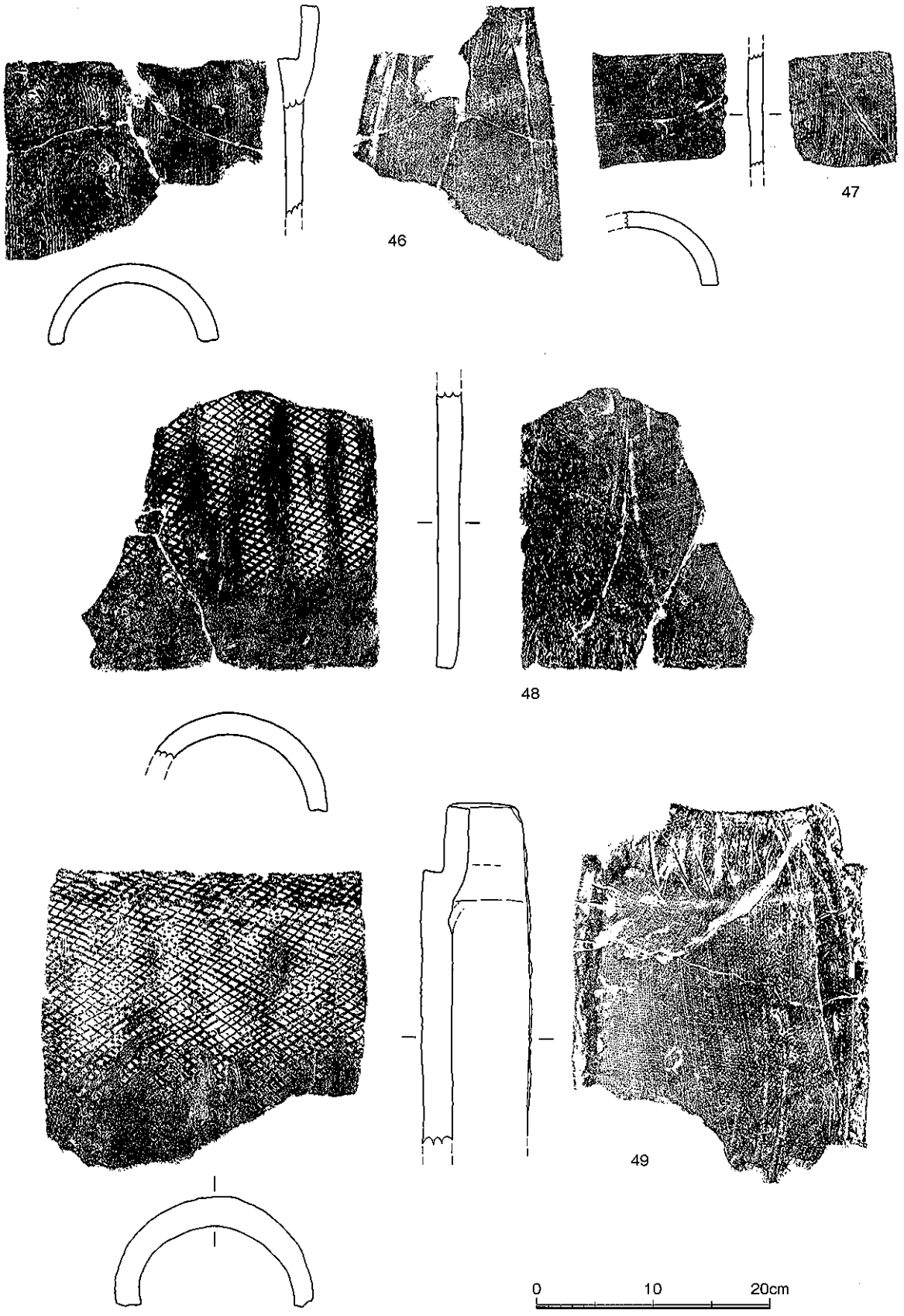


Fig.47　ＳＫ14513出土遺物実測図４（1/5）

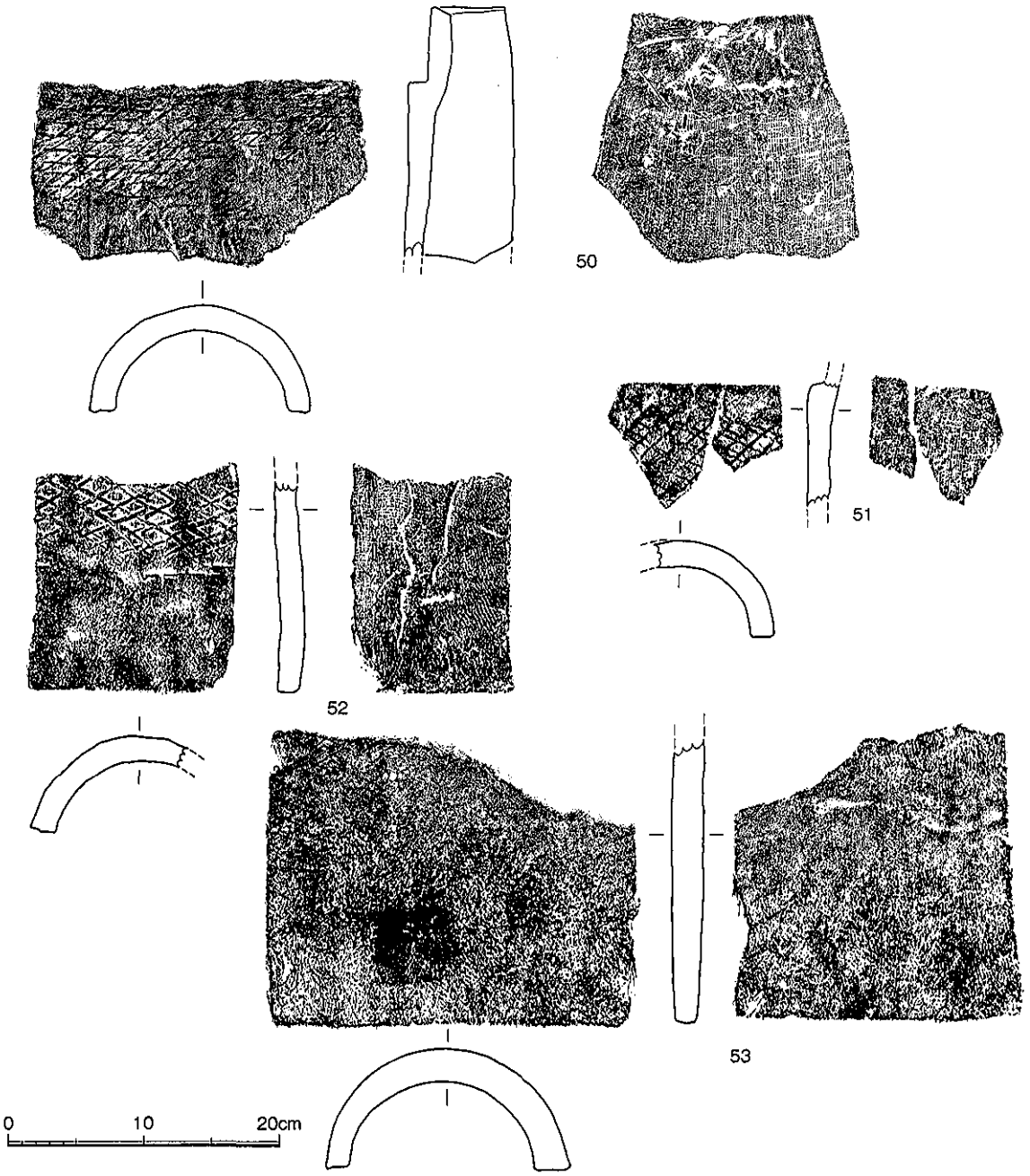
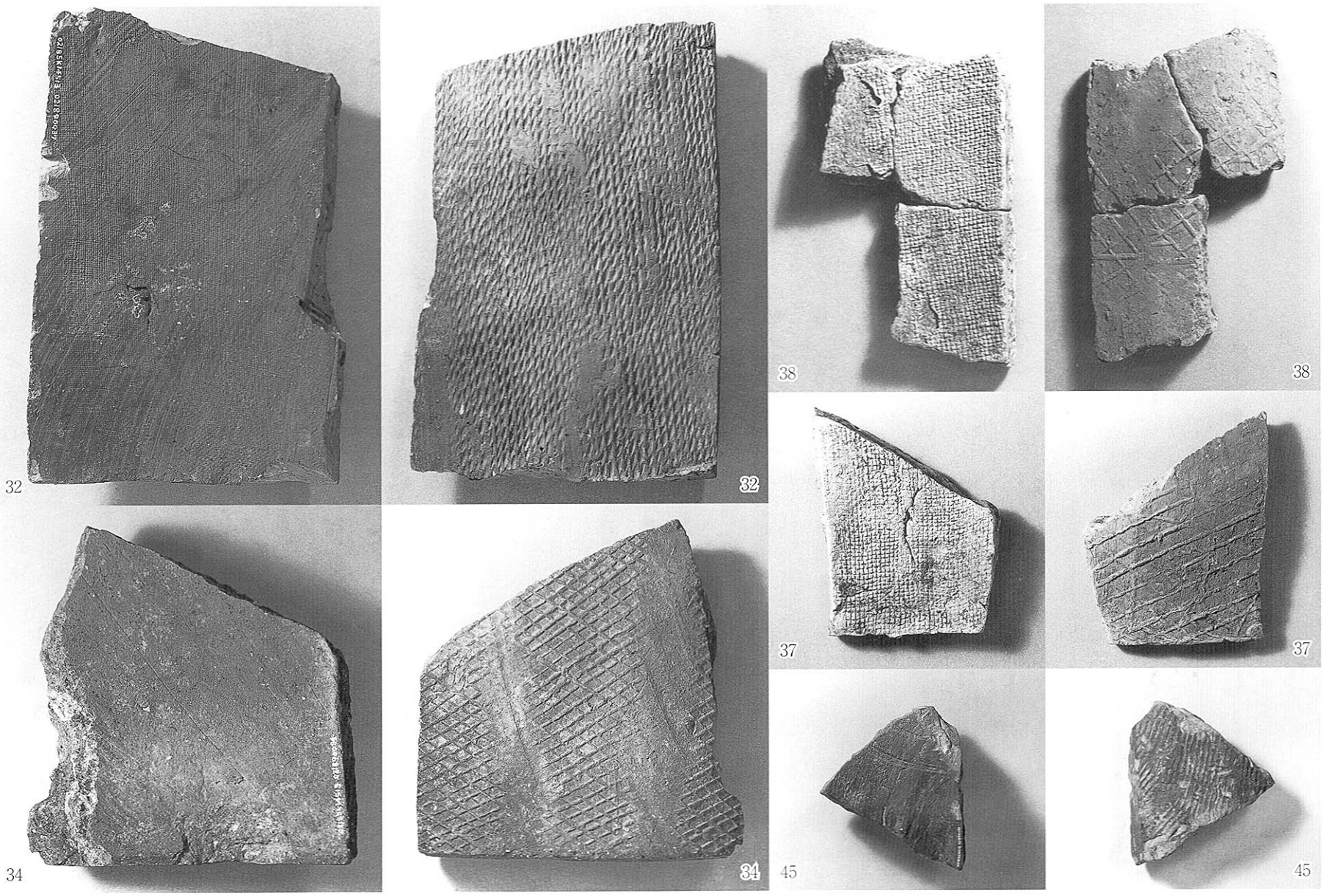


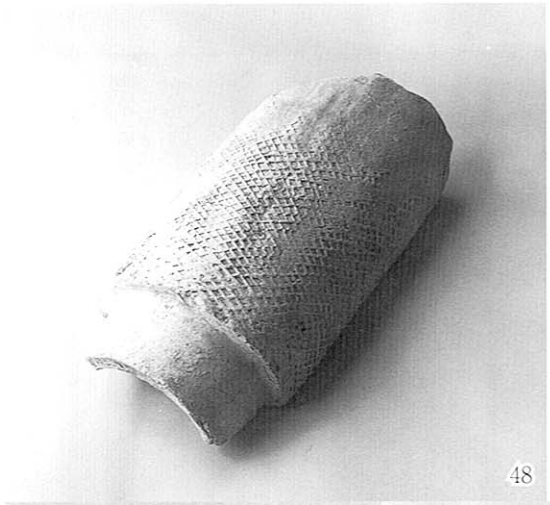
Fig.48　ＳＫ14513出土遺物実測図５（1/5）

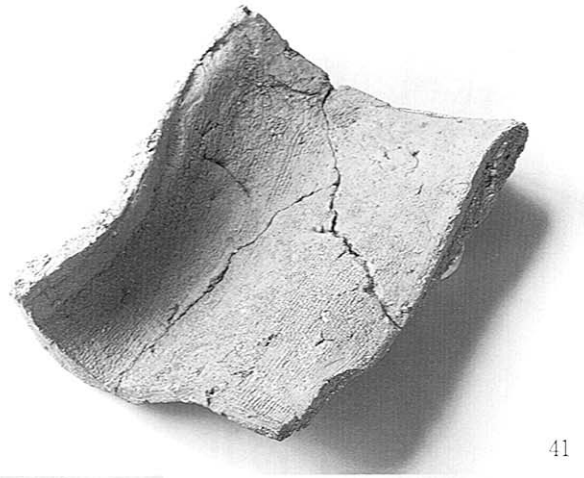
は平行横線も加わる。41は、目は細かいが不規則な単線の格子目叩きである。全体が遺存するが、火災にあった為か、大きく歪んで湾曲している。長側小口は、内側から切れ目を入れて折り取る。42は、蜘蛛巣状の叩き文様、43・44は、単線の斜格子に魚鱗形の記号を打つ。44の長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。45は、平行線の叩き目である。厚手に作り、小口は篦で面取りしている。46～53は、丸瓦である。46は縄目、48･49は細かい斜格子、50～52はやや目の大きい斜格子となる。47と53には、叩き痕跡が認められない。47は、胎土が精良で、作りも精緻であり、Fig.37－10のタイプになるものと思われる。

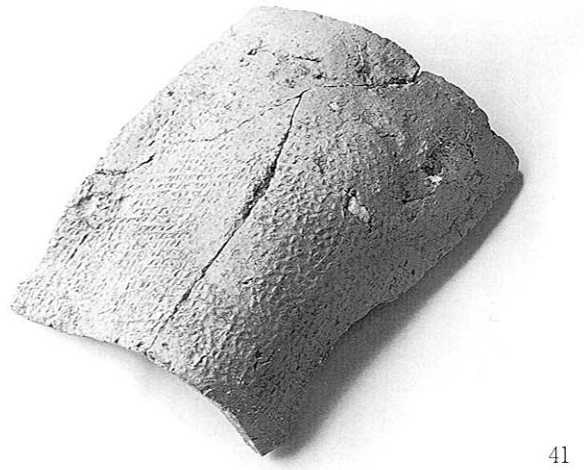
出土した土師器から、９世紀末～10世紀初頭に属するものと思われる。



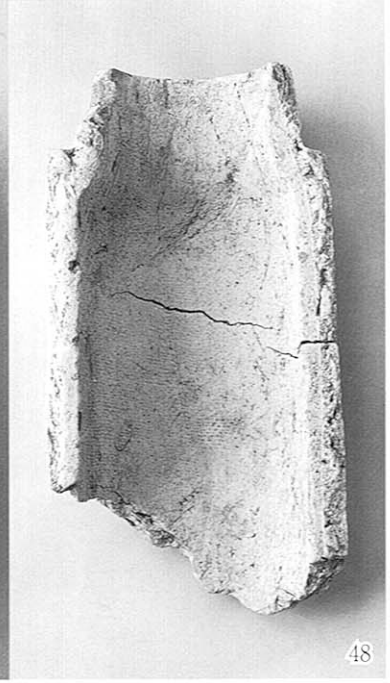
Ph.46　ＳＫ14513出土遺物１















Ph.47　ＳＫ14513出土遺物２

ＳＫ14524

ＳＫ14273の下部から検出した土坑である。土師器・瓦を主に廃棄していた。埋土上位から出土した遺物に関しては、ＳＫ14273出土遺物との分離が困難で、一部の遺物がＳＫ14273出土遺物に紛れ込んだものと思われる。

出土遺物を、Fig.50に示す。１～18は、土師器である。１～６は坏で、体部は内湾気味の丸みを持ち、底部も丸底気味を呈するようになっている。７は、小碗である。体部は、直線的に開く。８～18は、碗である。体部は、下位にクッションを持って、丸味を持った内湾気味を呈する。高台は高く、外方に踏ん張る。少数ではあるが、16のように体部下半の丸みが強く、高台径の小さいものが混じるようになる。これらの碗の体部は、横撫で調

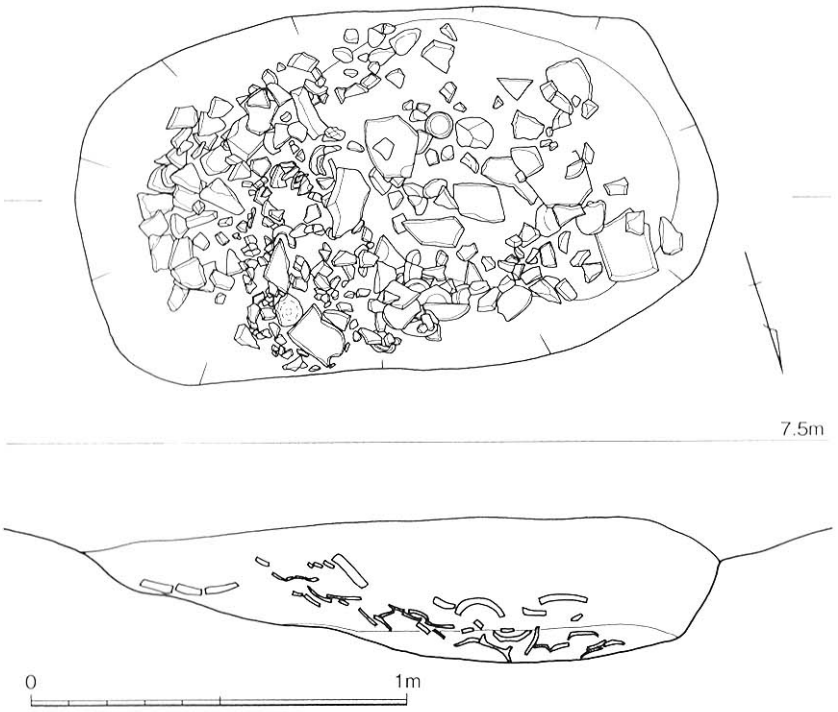


Fig.49　ＳＫ14524遺構実測図（1/20）



Ph.48　ＳＫ14524（北より）

整されており、篦磨きは認められない。19・22は、**須恵器**である。19は、蓋である。全体に薄手で、焼成が良く暗灰色を呈する。22は、壺の口縁で、大きくラッパ型に開いている。20・21は、**越州窯系青磁**である。体部下位を露胎とする粗製品で、見込みには目跡が並んでいる。23は、**軒丸瓦**の瓦当である。外区には珠文が並び、内区には単弁の花弁が見られる。

土師器・陶磁器から見て、10世紀前半の廃棄土坑であると考えられる。

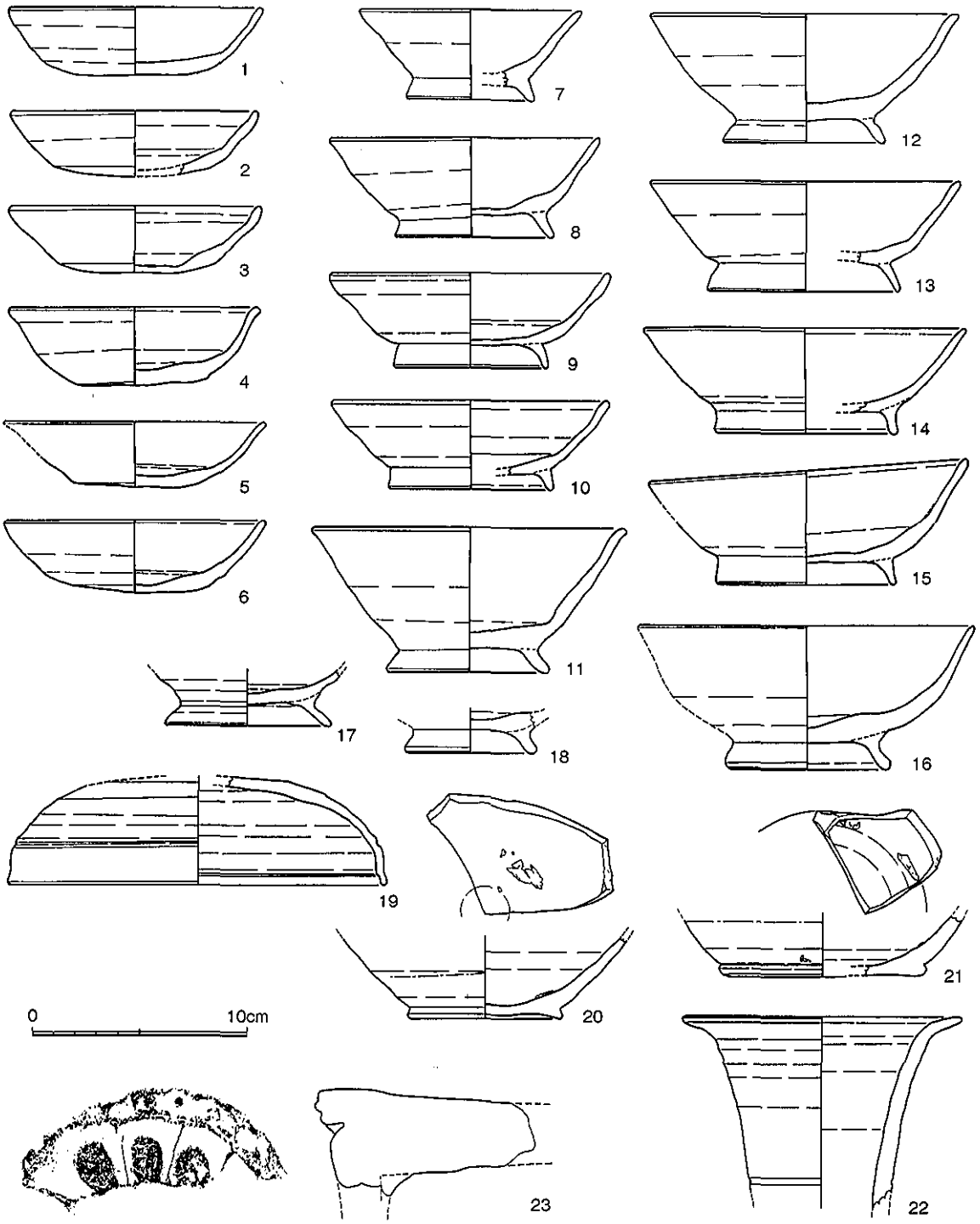


Fig.50　ＳＫ14524出土遺物実測図（1/3）

ＳＸ14529

調査区東辺付近から検出した遺構で、第Ⅱ期布掘り掘立柱列ＳＡ14526の上位にあたる。**Ph.49**に示すように瓦と土師器・陶磁器の集中分布が見られた箇所で、精査したが特に土坑を示すような掘り方などは見られなかった。

出土遺物を**Fig.51**に示す。**１～３**は、**土師器**の碗である。体部の丸みは強く、口縁部が小さく外反する。体部の磨耗が激しく、調整混は観察できない。**４**は、**黒色土器Ａ類**の碗である。丸みの強い体部に小さく外反した口縁を持つ。体部外面は磨耗しているが、内面には篦磨きが認められる。**５**は**越州窯系青磁**、**６・７**は**白磁**である。**８**は、**丸瓦**である。ほぼ完品で、長さ33cmと若干短めである。**９**は、**平瓦**である。複線の斜格子で、長側小口は篦切りしている。

土師器の特徴から、11世紀前半に属すると思われる。

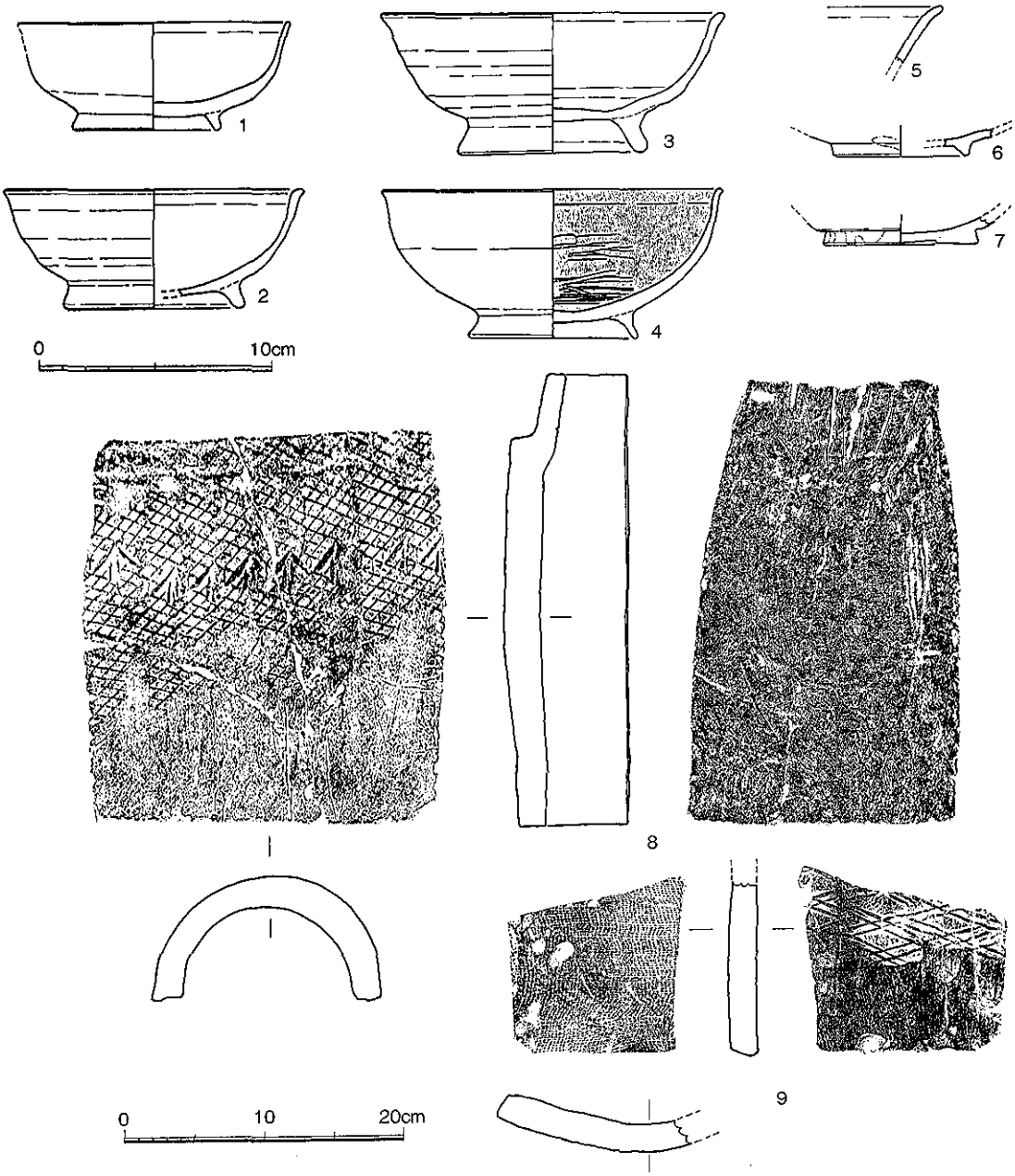


Fig.51　ＳＫ14529出土遺物実測図（1/3, 8, 9…1/5）



Ph.49　ＳＸ14529（南東より）



Ph.50　ＳＸ14529出土遺物

ＳＫ14534

02－４トレンチの壁面で確認した土坑である。トレンチの東端近くの北壁と南壁に、土坑の落ちが顕れたもので、トレンチの東側、前述した中世の池状遺構であるＳＸ14340Ｂの下層に広がると思われるが、検出・確認はおこなわなかった。

Fig.52に図示した遺物は、トレンチ壁面に露出して出土したものである。１は、**土師器**の碗である。体部は失われているが、遺存部分から見て、丸味を持つ大振りな碗と推測できる。２～４は、**越州窯系青磁**の碗である。いずれも器壁は薄く、優品であろう。２は、内面全体に大きく花文を描く浅碗である。片切り彫りで花弁を描き、毛彫りでうめている。外底部の高台内側には、大きな目跡がみられる。５～９は、**白磁**碗である。５は小碗で、釉は若干青味を帯びている。６は、『鴻臚館跡14』で報告した際には底部の破片であったが、その後の整理で口縁部まで接合ができたので、実測図を改める。５～８は、体部下位から外底部を露胎とする。胎土は緻密だが、きめはやや粗い。９は、大振りで鉢とするべきか。胎土はきめ細かく精良で、純白色を呈する。釉調も均質で貫入などは全くなく、全面施釉の後、畳付の釉を掻き取る。

以上の出土遺物から、11世紀前半の土坑と考えられる。

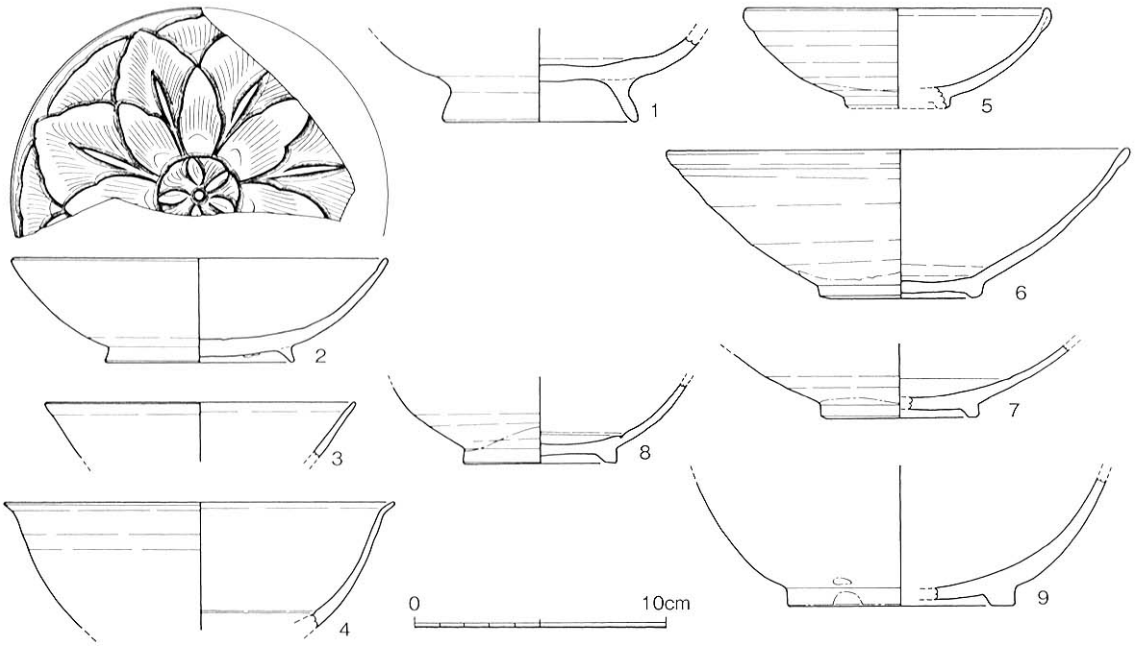
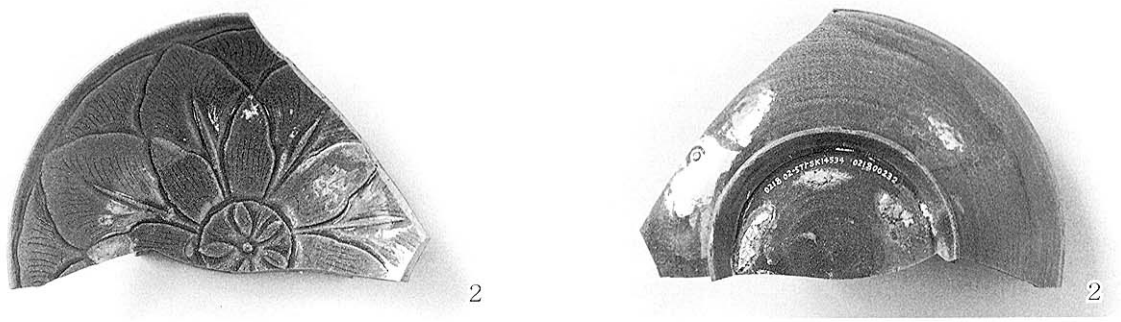


Fig.52　ＳＫ14534出土遺物実測図（1/3）



Ph.51　ＳＫ14534出土遺物

（6）古墳時代の遺構

鴻臚館跡の発掘調査では、これまでしばしば古墳時代の須恵器、円筒埴輪片が出土している。とりわけ、円筒埴輪は、福岡平野では前方後円墳に伴うことが多く、また福岡城天守台の下に箱式石棺が露出していることが知られており、前方後円墳を含んだ群集墳がかつて存在したことは確実視されてきた。しかし、発掘調査で、古墳そのものが確認されたことはなかったのである。

平成14年度の発掘調査では、前述した第Ⅰ期掘立柱建物ＳＢ14601の柱穴に接して石室敷石の残存が出土し、初めて古墳の遺構を確認することができた。

ＳＯ14512、ＳＤ14530

石室ＳＯ14512は、ＳＢ14601の東側から検出した。石室は、腰石まで失われており、規模は判然としない。明瞭に腰石抜き跡と判断できる遺構もないが、抜き跡と思われる窪みならびに敷石の分布状況から、幅1.6～2.0m、奥行き2.8～3.0mの内法が推測できる。長軸を北西－南東にとり、南側に開口した横穴式石室と考えられる。敷石は、拳大の礫を敷き詰めたもので、二面程度作られているようだが、床面の完掘は行なわずに保存したので、確認はしていない。敷石の随所からガラス小玉が出土している。また、奥壁側と左側壁側から鉄鏃が、羨道側と右側壁中ほどから銅地に金箔を貼った耳環３点が出土したが、鉄鏃・ガラス小玉などの出土状況から見て、かなり撹乱された状況がうかがわれる。石室部分からの土器類の出土はなかった。**ガラス小玉・耳環**を**Fig.57**、**鉄鏃**を**Fig.58**に図示する。なお、

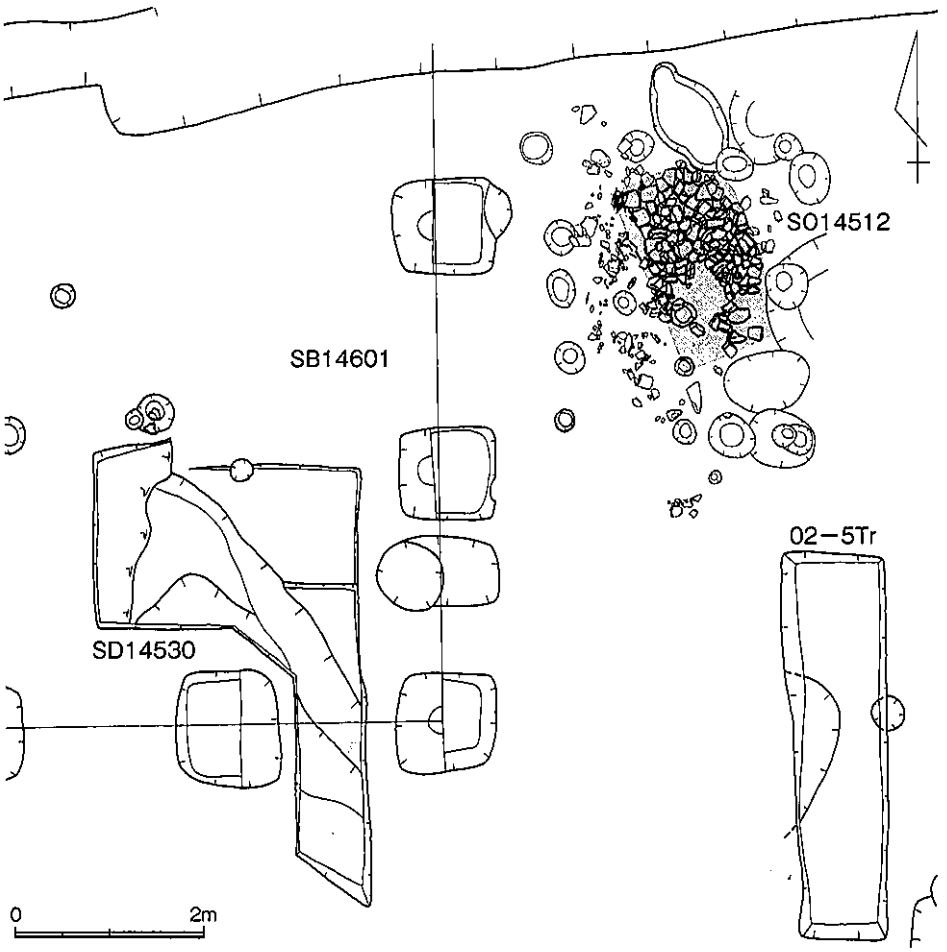


Fig.53　１号墳実測図（1/80）

小玉の内24は瑪瑙製で、橙色を呈する。鉄鏃はすべて同形式で、56は鉄剣であろう。

ＳＢ14601の柱穴周囲の遺構がない部分を掘削して精査したところ、地山に掘り込んだ周溝の一部ＳＤ14530を検出した。位置関係から、周溝は石室に伴うものと考えられる。石室の南側で、周溝の検出を狙って設定した02－５トレンチでは、傾斜する地山の旧表土と鴻臚館段階での盛り土層は確認できたが、古墳に由来する盛り土は認識できなかった。

周溝は、鴻臚館時代の盛土整地層の下、地山面で検出した。浅い窪み状に残っていたもので、削平を受けた残存と思われる。須恵器の蓋坏が、重ねて置かれた状態で出土したが、蓋と身が合口で出土したものはない。

周溝から出土した須恵器をFig.56に図示する。１は、コップ型の鉢である。体部中ほどに二条の浅い沈線が廻る。外底部は回転ヘラ削り、体

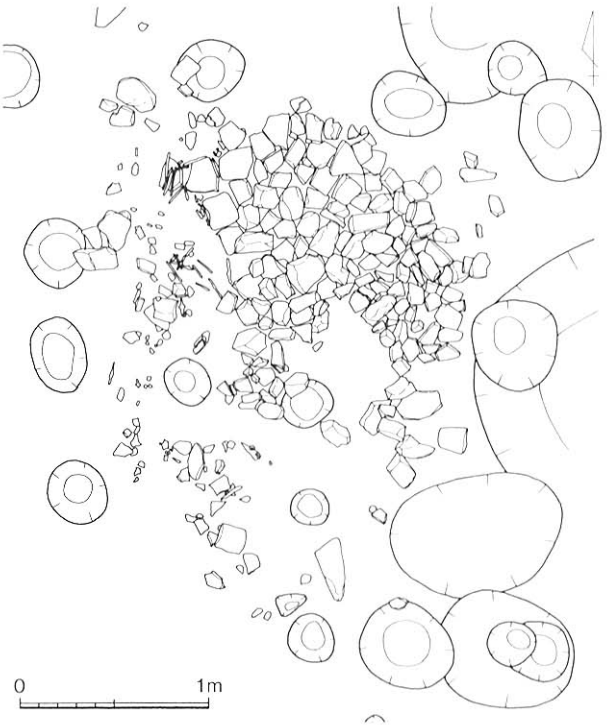
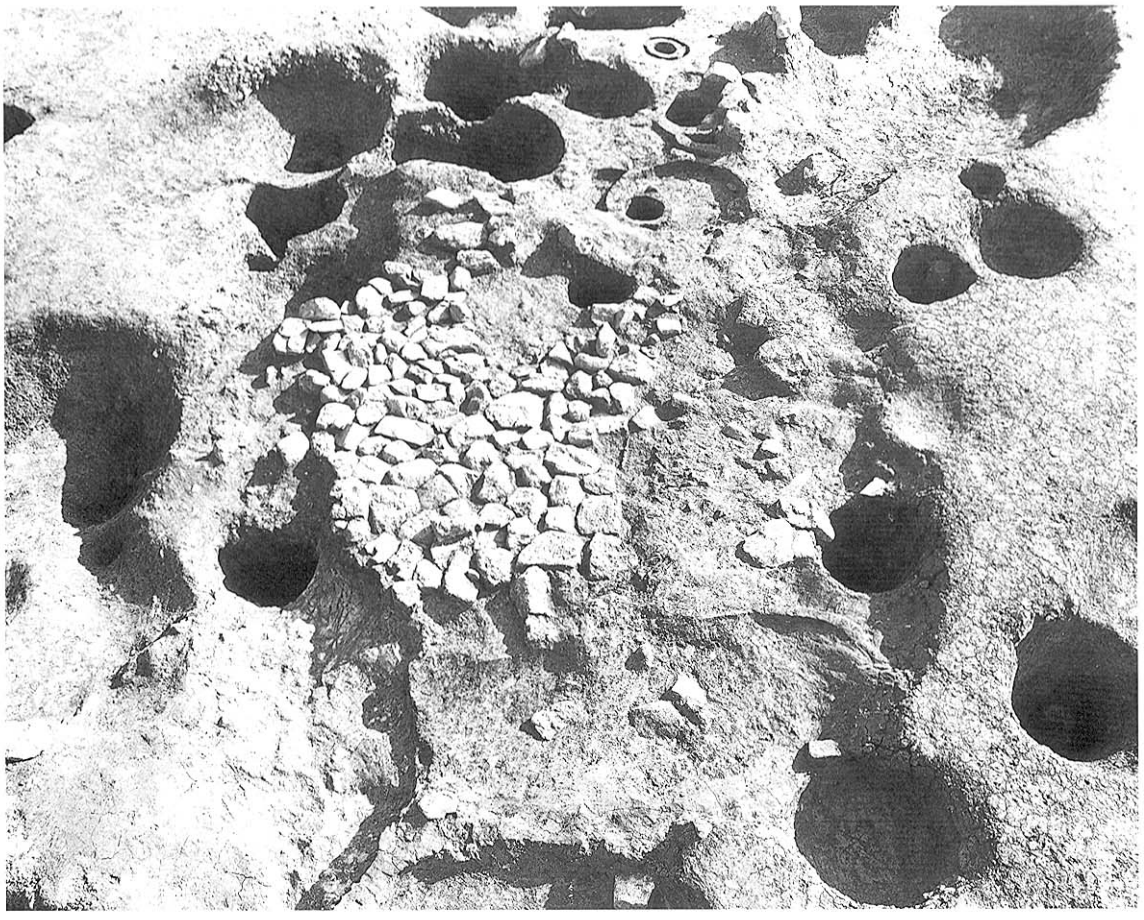


Fig.54　ＳＯ14512遺構実測図（1/40）



Ph.52　１号墳石室　ＳＯ14512（南より）



Ph.53　ＳＤ14530遺物出土状況（南東より）

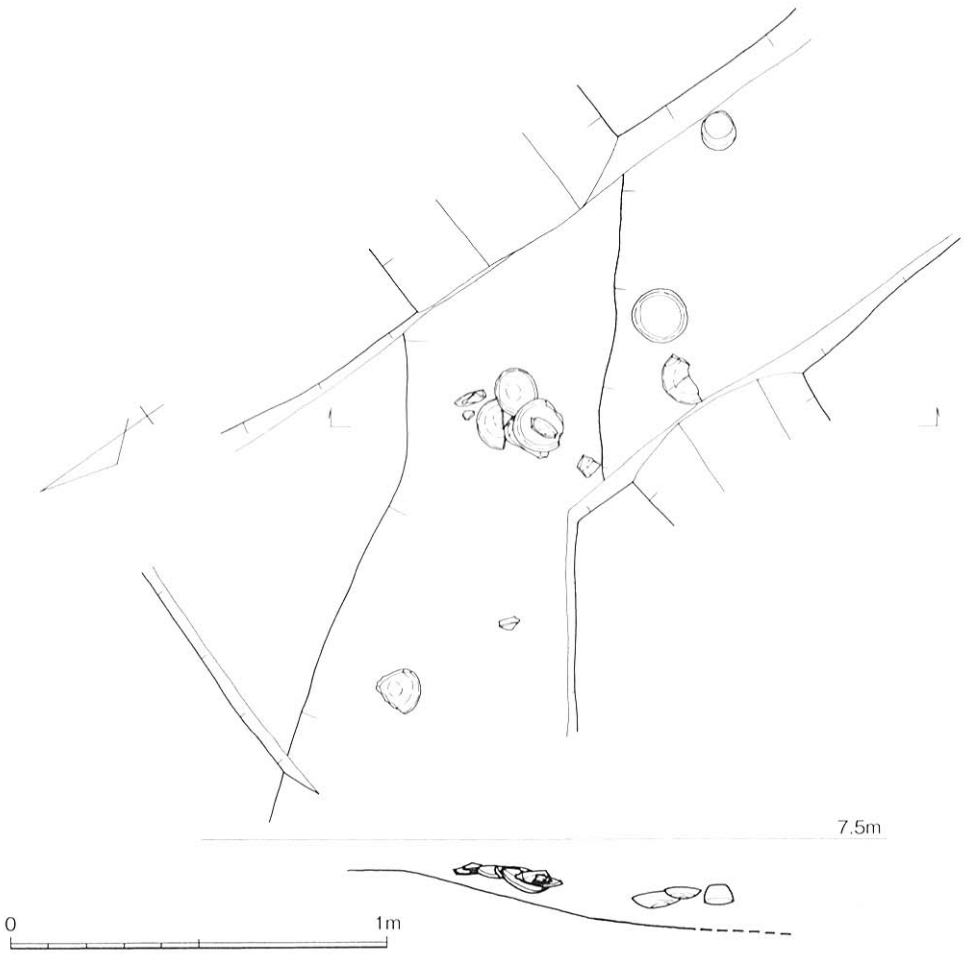


Fig.55　ＳＤ14530遺構実測図（1/20）

部・口縁部は横なで調整する。2～5は、坏蓋である。丸みが強く、天井部と口縁部との間の沈線は失われている。6～10は、坏身である。蓋受けの返りがつくが、6～9は、細く、高く立ち上がるのに対し、10では厚く短くなっており、後出する要素が見られる。なお、5の蓋と10の身には、三叉形のヘラ記号が見られ、セットであった可能性がある。11は、甕の口縁部である。

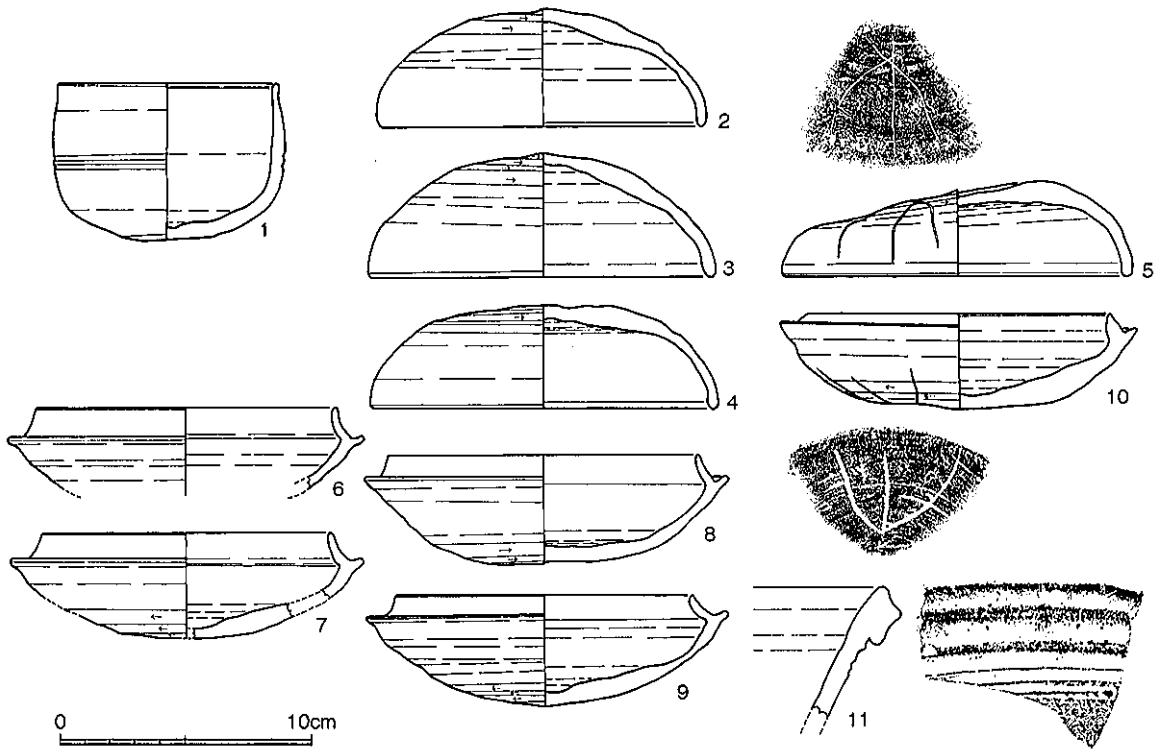


Fig.56　ＳＤ14530出土遺物実測図（1/3）

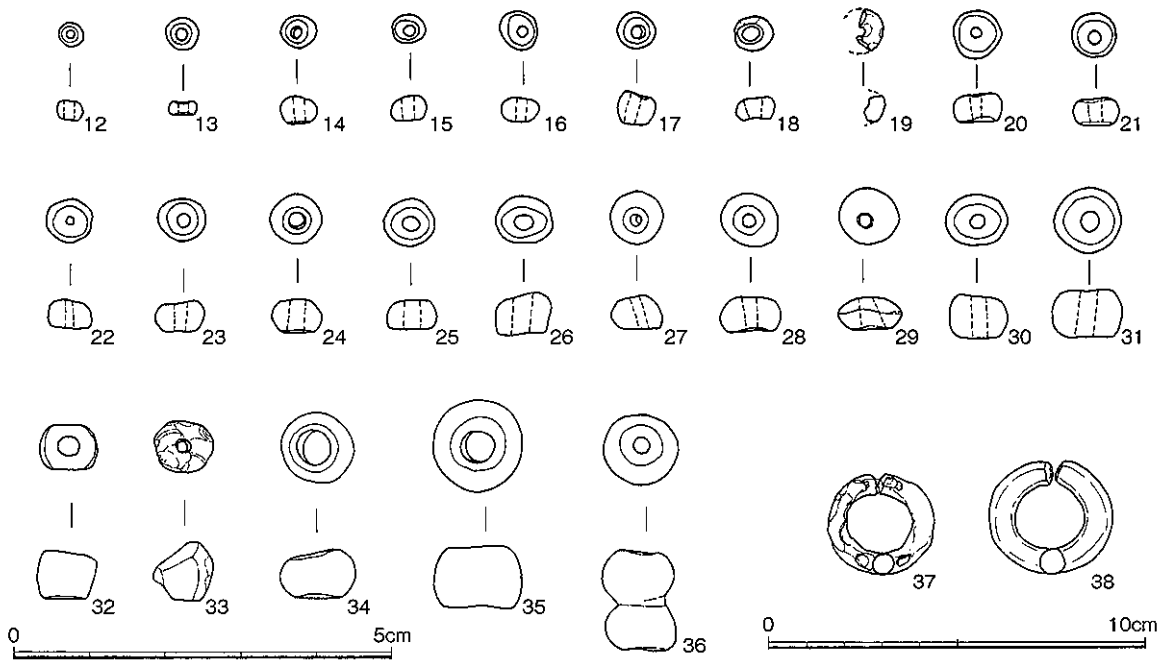


Fig.57　ＳＯ14512出土遺物実測図１（1/1, 37・38…1/2）

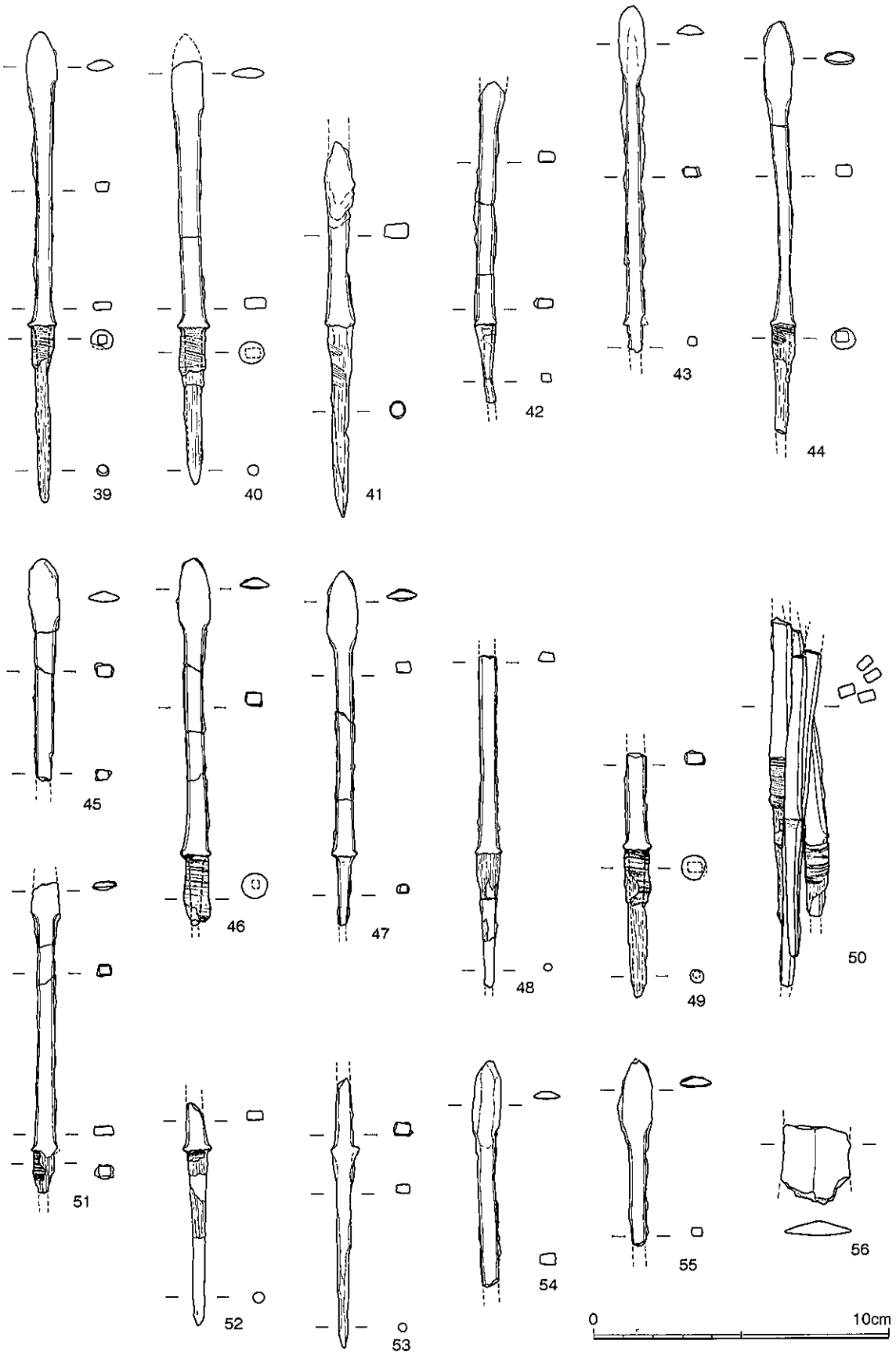


Fig.58　ＳＯ14512出土遺物実測図２（1/2）

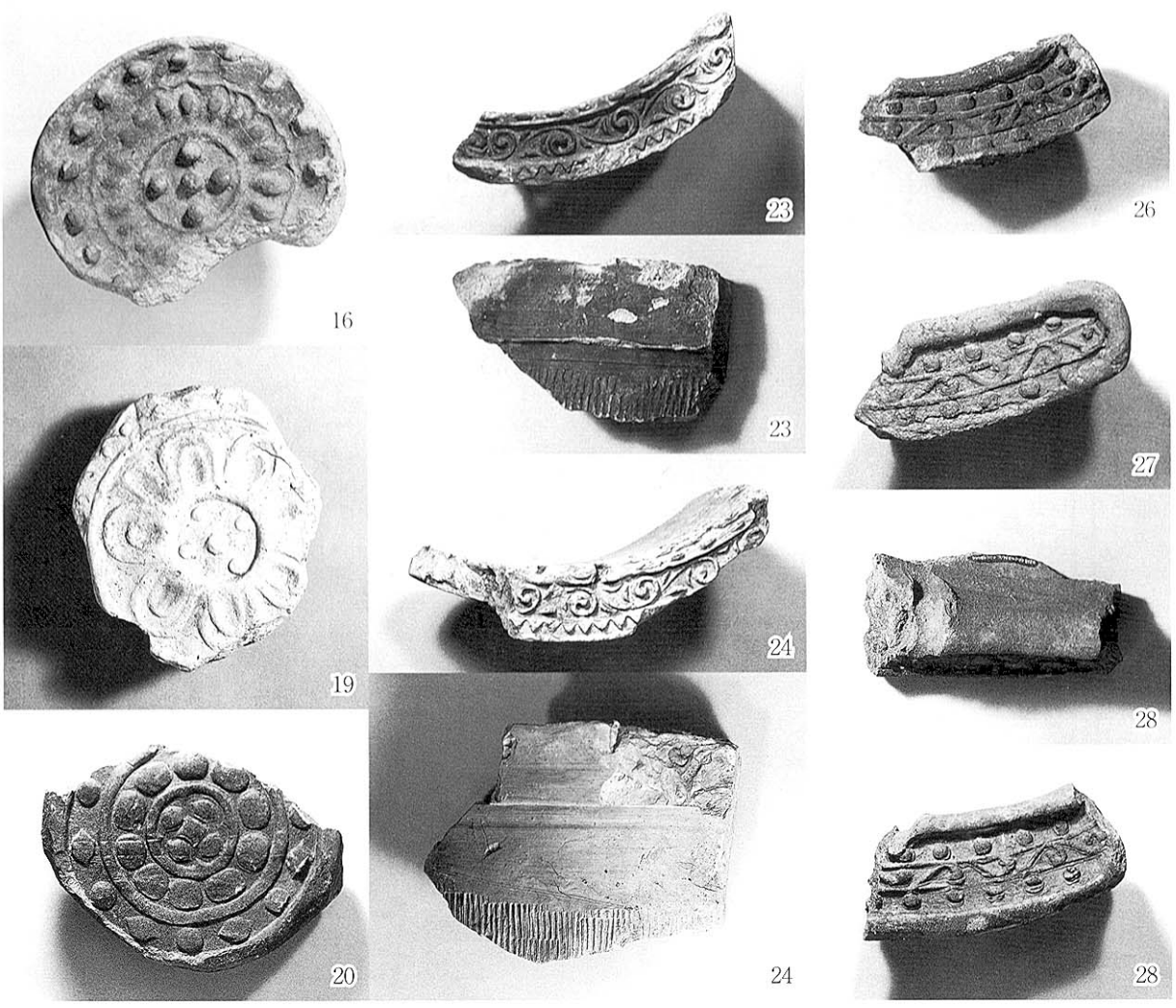
旧地形は石室の北側で高く、南に向かって傾斜を強めて下降している。したがって、本来周溝は石室背面の丘陵側に馬蹄形に掘られたものであったが、鴻臚館造営に伴う丘陵の削平で、頂部側の周溝は失われ、斜面部分に一部分が残ったものと考えられる。

これらの須恵器から、６世紀末から７世紀初めの古墳と考えられる。なお、石室中央から周溝内側までは５mを測り、これを半径とすれば、径10mほどの円墳を復元することができる。

（７）その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺物の内、特徴的な遺物を、まとめて報告する（Fig.59・60）。

１は、**越州窯系青磁**の合子蓋である。上面には、沈線で花文を描く。２・３は、明代の**竜泉窯系青磁**で、２は小壺、３は碗である。４・５は、**長沙窯の青磁**水注で、褐彩の部分にあたる。４は、貼花部分である。６は、**朝鮮王朝の白磁**皿である。７～９は国産の**緑釉陶器**である。７・８は東濃窯の、９は洛西窯の製品と思われる。10は、**須恵器**であるが、器種不明。11は、京都**篠窯産須恵器**の鉢である。12は、**備前焼**Ⅴ期のすり鉢である。　13は、**砂金**である。柱穴からの出土で、古代に属すると思われるが時期を特定できない。長さ16.08mm、幅8.9mm、最大厚３mm、重さ2.75gをはかる。福岡市埋蔵文化財センターにおいて行なった蛍光Ｘ線分析値は、Au99.5％。ただし、標準試料による



Ph.54　その他の出土遺物

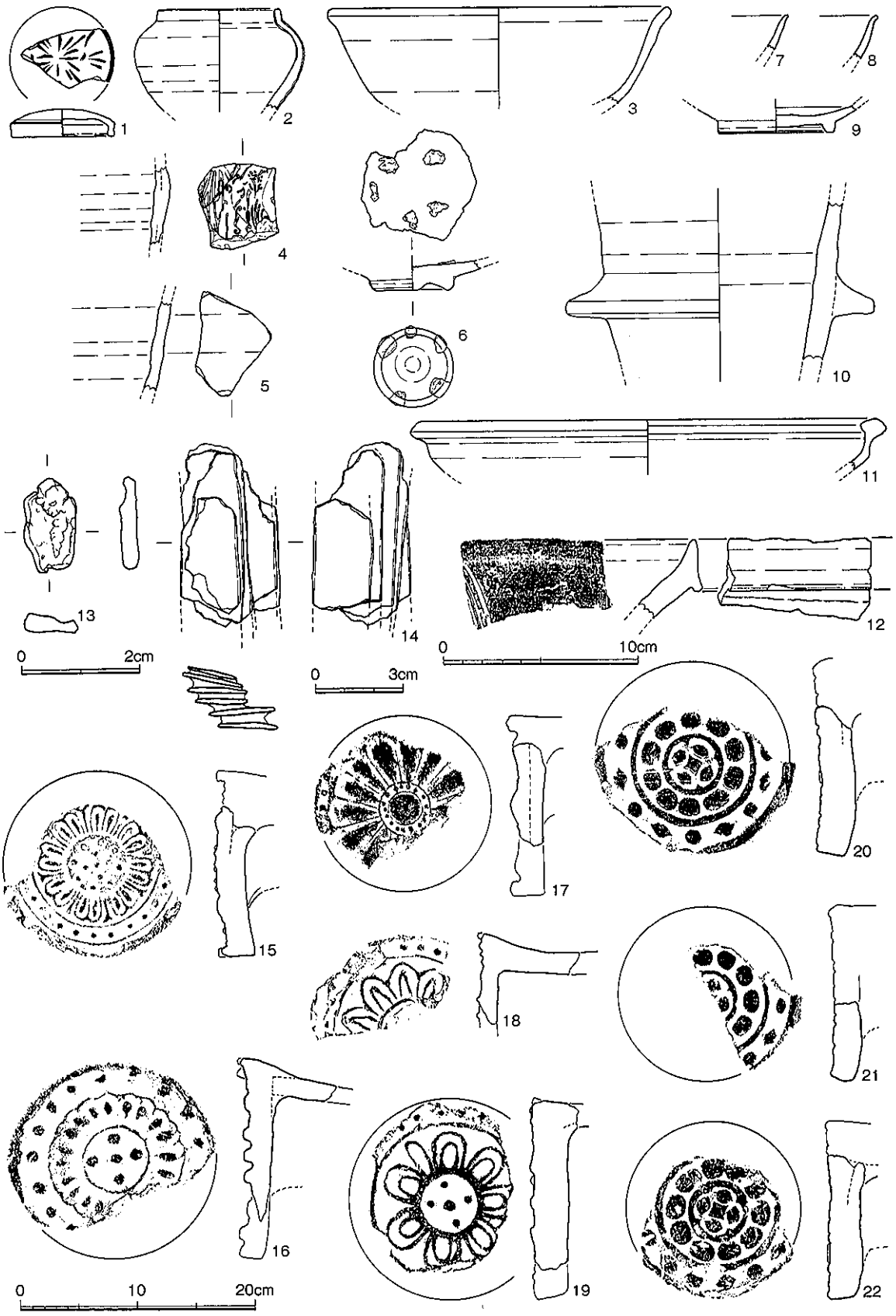


Fig.59　その他の出土遺物実測図1（1～12…3/1, 13…1/1, 14…1/2, 15～22…1/5）

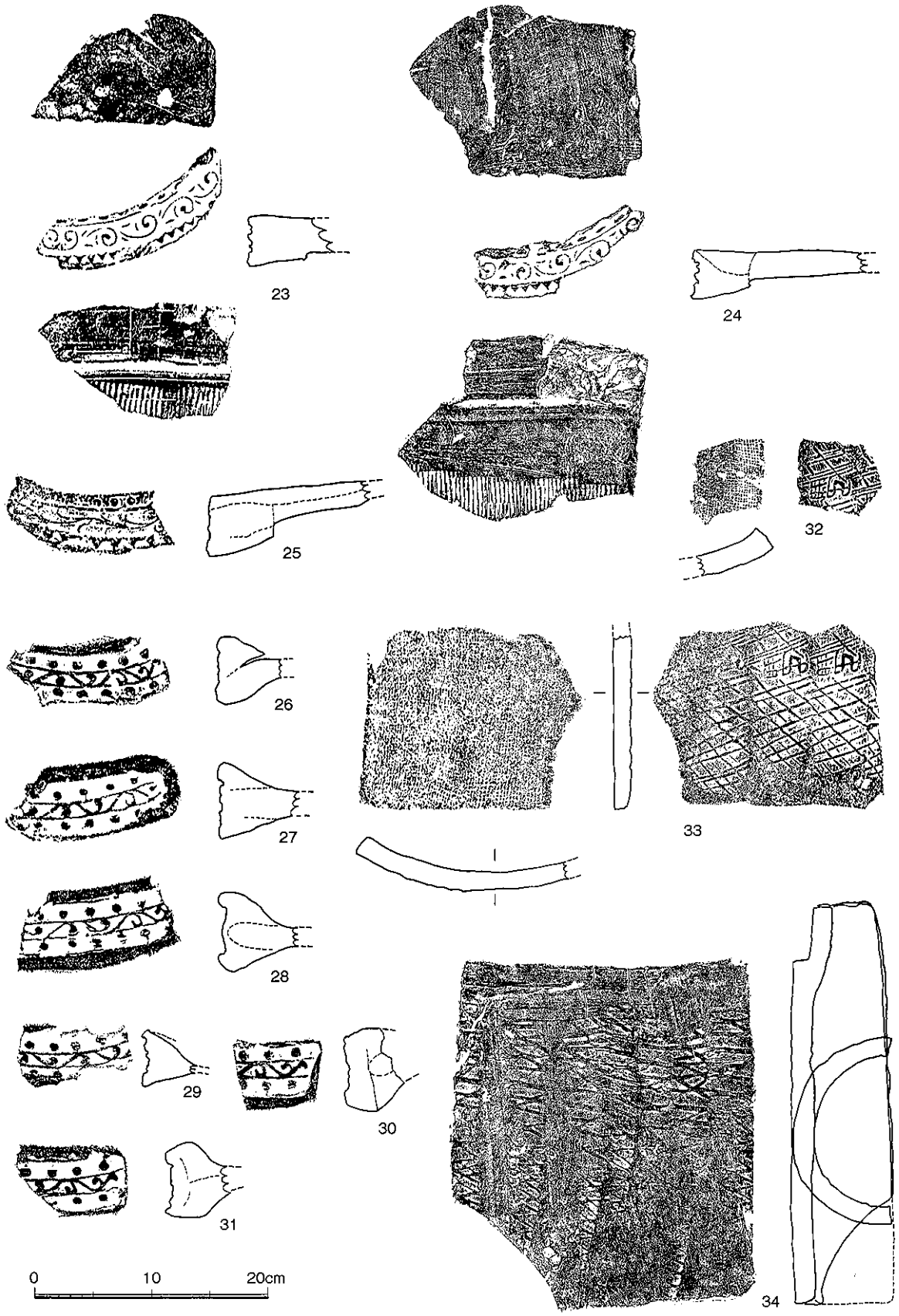


Fig.60　その他の出土遺物実測図２（1/5）

補正はしていない。14は、**挂甲鉄小札**である。６枚が錆付いている。X線で透過したが、綴穴は確認できなかった。札幅は、2.1～2.3cmをはかる。**15～22**は、**軒丸瓦**である。15は、鴻臚館式である。16は、退化した複弁を持つ。歪んだ楕円形で、外形そのものが崩れている。**17～19**は、単弁に作る。**20～22**は、花弁が失われ、楕円に変わっている。**23～31**は、**軒平瓦**である。**23･24**は鴻臚館式、25は老司式である。鴻臚館式の平瓦部分には、縦方向の平行叩きが見られる。**26～31**は、**20～22**の軒丸瓦に対応する型式であろう。退化した唐草文が配される。上面の中ほどに、指で押さえ込んだ溝が見られる（**Ph.54－28**）。**32･33**は、**平瓦**である。崩れた斜格子に文字様の叩打が加えられている。34は、**丸瓦**である。崩れた網状の斜格子叩きが施されている。

第三章　まとめ

平成14年度調査の成果について、鴻臚館の変遷を中心にまとめを試みる（Fig. 2・3参照）。

（1）遺構の変遷　鴻臚館造営以前には、東に大きく開口した谷を挟む二本の尾根筋に、群集墳が営まれていた。７世紀後半の第Ⅰ期鴻臚館造営に当たっては、尾根を切り崩し、谷に盛土整地を行なって敷地を確保し、掘立柱建物による施設を営んだ。この段階で、群集墳の多くは、姿を消したと思われる。

第Ⅰ期の盛土整地は、部分的に石垣を用いたものである。第Ⅰ期段階では、谷の南と北の施設は、主軸方位を異にし、現在知られる建物形状を見ても、北館では二間×四間の南北棟と塀、南館では桁行の長い東西棟と南北棟の矩形配置と、相違点が大きい。

第Ⅱ期には、さらに大規模な埋め立てを行ない、北館では高さ４mを越える石垣を築いて盛土を支えた。この石垣を築く整地によって、旧来の谷は、幅20mで東西に伸びる堀状を呈することとなる。石垣の内側には、東に門を構えた布掘り掘立柱の塀が矩形に巡る。塀内部の建物遺構は見つかっていないが、瓦が出土する事から見て、礎石建物が営まれていたと考えられる。なお、第Ⅱ期の盛土層中にも少なからず瓦が含まれており、第Ⅰ期段階で瓦葺建物に移行した可能性がある。第Ⅱ期の塀区画は、北館と南館で同一主軸・同規模で並立しており、統一した規格で営まれた事は明らかである。第Ⅱ期石垣は、８世紀後半の早い時期に埋められており、第Ⅱ期の年代としては８世紀前半を当てることが妥当であろう。

第Ⅲ期は、礎石建物の時期である。遺存状態は悪いが、第Ⅱ期石垣の直上に、東西棟の礎石抜き跡が乗っており、早くて８世紀後半の造営と考えることができる。なお、この東西棟の位置には、９世紀後半には廃棄土坑が掘られており、第Ⅲ期建物が９世紀前半までで廃されたことがわかる。以後、土坑の検出例は続くが、建物遺構として把握できるものは見られない。

（2）瓦　Tab. 4に平瓦の叩き文様に関する時期別、遺構別出土傾向を示す。叩き文様の分類はFig.61に示すが、『鴻臚館跡12』に依拠しているので、詳細はご参照頂きたい。また、長側小口の切り離し痕跡を指標に、造瓦技法を識別している。すなわち、小口を箆切りするものは一枚作り、内側から切れ目を入れて折り取るものは桶巻作りとみなした。Tab. 4からは、10世紀前半を境に、3Bｄ、3Bｅ、5B、5C、6A、6C、6G、6Hが出現したことが読み取れる。また、4A、4Bａは、おそらく10世紀末頃以降に見られるようになった叩き文様であろう。

（3）砂金　田島公氏によれば、大宰府では、９世紀後半を境に対外交易の代価が大宰府の貢綿から砂金に変わったという（田島公「大宰府鴻臚館の終焉－八世紀～十一世紀の対外交易システムの解明－」、日本史研究389、1995年）。当時、砂金は陸奥に産し、朝廷によって管理されていたことを思えば、

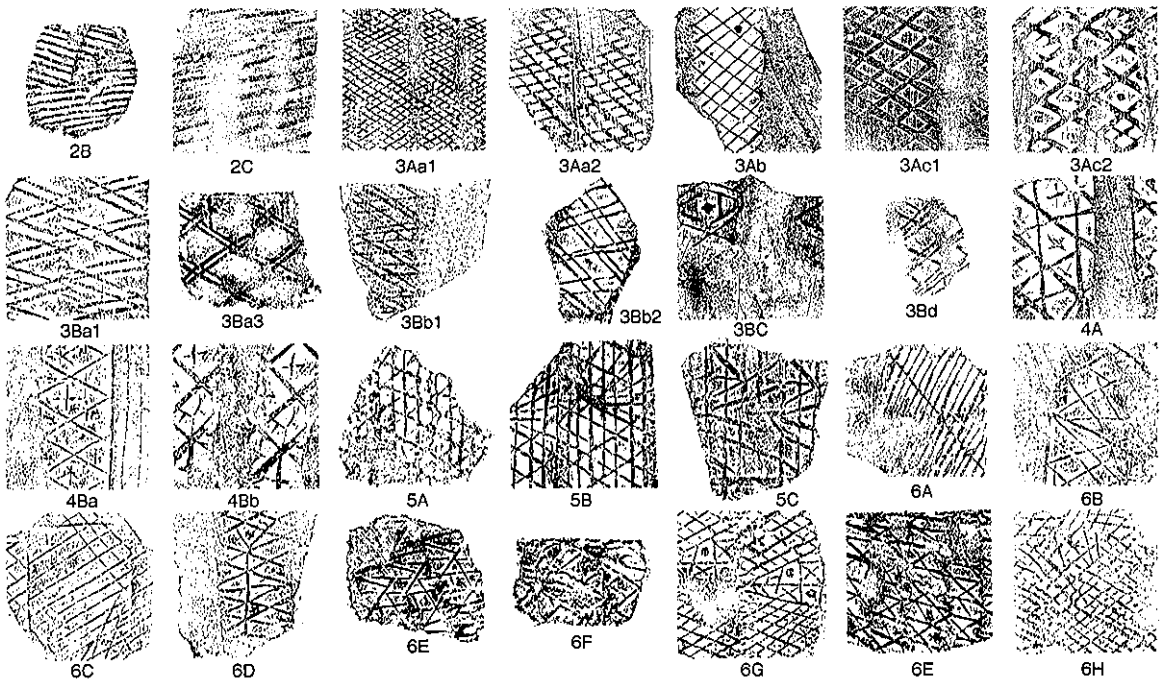


Fig.61　瓦叩き文様分類図（1/5）

Tab.4　瓦の文様と製作技法との対応関係

時期	遺構	文様／作り	縄目	2C	3Aa1	3Aa2	3Ab	3Ac1	3Ba1	3Ba2	3Bb2	3Bd	3Be	4A	4Ba	5A	5B	5C	6A	6C	6G	6H
9C後	SK14271	桶巻			○	○										○						
		一枚	○						○													
		不明																				
9C後	SK14277	桶巻	○		○	○																
		一枚	○																			
		不明		○												○						
9C後	SK14511	桶巻	○		○	○	○															
		一枚	○																			
		不明																				
9C末～10C初	SK14513	桶巻	○	○	○	○	○		○				○			○	○	○		○	○	
		一枚	○		○												○				○	○
		不明																				
10C前	SK14273	桶巻	○		○	○	○	○	○				○			○			○			
		一枚	○					○	○		○	○										
		不明																				
10C後	SK14188	桶巻			○	○	○	○	○		○							○				
		一枚	○		○	○	○				○	○										
		不明																				
10C後	SK14510	桶巻			○	○	○	○	○							○	○		○		○	
		一枚	○				○															
		不明																				
10C	SK14339	桶巻			○	○	○			○											○	
		一枚	○			○	○	○			○			○	○							
		不明																				

わずか１点の出土に過ぎないが、**Fig.59－13**の砂金が対外交易代価として鴻臚館に運ばれた可能性は高いといえよう。

（4）圭甲小札　９世紀後半に新羅海賊による西北九州沿岸の襲撃事件が頻発するようになると、鴻臚館の軍備増強が図られた。日本三代実録、類聚三代格によれば、869年12月５日に鴻臚館・津厨防衛のため俘囚50人を一番として二番の交代で配備、同12月28日に大宰府の統領１人・選士40人・甲冑40具を鴻臚館に遷す、870年１月15日に大宰府の甲冑110具を鴻臚館に遷す、895年３月13日に夷俘50

人を博多警固所（鴻臚館）に増置、などの勅が出されている。鴻臚館は、博多津の防衛を担っていたのである。Fig.59－14の圭甲小札は、こうして配備された甲冑であった可能性が考えられる。さらに博多津が、「隣国輻輳之津、警固武衛之要」（『日本三代実録』貞観11年12月28日条、『類聚三代格』貞観11年12月28日太政官符）と認識されていたとすれば、これはまさに国防問題に他ならない。鴻臚館は、国防の軍事拠点という性格も与えられていたのである。

第四章　平成15年度調査の概要

平成15年度調査は、鴻臚北館の遺構の状況を確認するため、第Ⅱ期布掘り掘立柱列の北東角・北西角が予想される部分の確認調査、および鴻臚南館第Ⅱ期布掘り掘立柱列の北東角、および谷の北向き斜面を検出することを目的とする発掘調査を行なった。面積は2300㎡である。

（１）発掘調査の概要

03－１調査区において第Ⅱ期布掘柱列の北西角、03－２調査区において北東角を検出し、鴻臚館跡の北辺が平和台野球場跡地の北半分に遺存していることを確認した。また、北東角・北西角の位置、検出面の整地状況から、平和台野球場跡地の北端付近で海岸に落ち込むものと推測される。

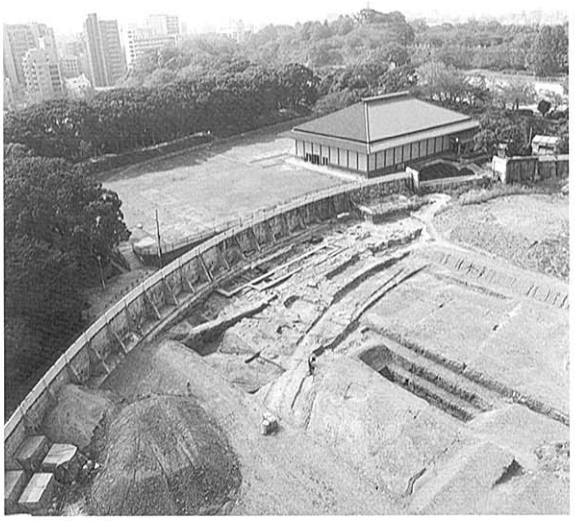
平成13年度調査区の南、平成11年度調査区の東に接する03－３調査区において、鴻臚南館の第Ⅱ期布掘柱列の北東角～北辺を調査した。第Ⅱ期布掘柱列は、盛土整地層に掘り込まれている。第Ⅲ期以降の建物遺構は大規模な削平によって遺存していないが、瓦溜まりの土壙を検出した。また、10世紀後半～11世紀前半に営まれた鴻臚南館の北と東を画する溝を検出した。南館と北館を隔てる堀の肩と、東に下る造成面の落ち際に掘削されたもので、直角に配されるが、連続せずに角部分で途切れる。この南北溝の埋土中程から、「開」字を刻んだ石製印が出土した。

また、南館と北館を隔てる谷を横断し設定したトレンチでは、下層から柱穴を３基検出した。橋脚の可能性が考えられる。

（２）まとめ

北館の北辺が遺存していることを確認、これをもって、国史跡の申請を行なった（平成16年９月30日付、官報号外で指定告示）。

南館の調査区においては、第Ⅲ期以後の建物遺構は失われているものの、第Ⅴ期（10世紀後半から11世紀前半）の溝が、東西・南北の区画をなして掘られていたことが明らかとなった。これにより、鴻臚館廃絶まで、南館が何らかの機能を負っていたことは明らかとなった。また、谷に設けたトレンチ最下部の柱穴が、橋脚であったとすると、南館と北館の正面（東門）を結んで行き来できる橋が谷を跨いでいた景観が復元できる。橋の高さは４m以上、長さは20m以上と思われる。



Ph.55　平成15年度調査区全景（北東より）

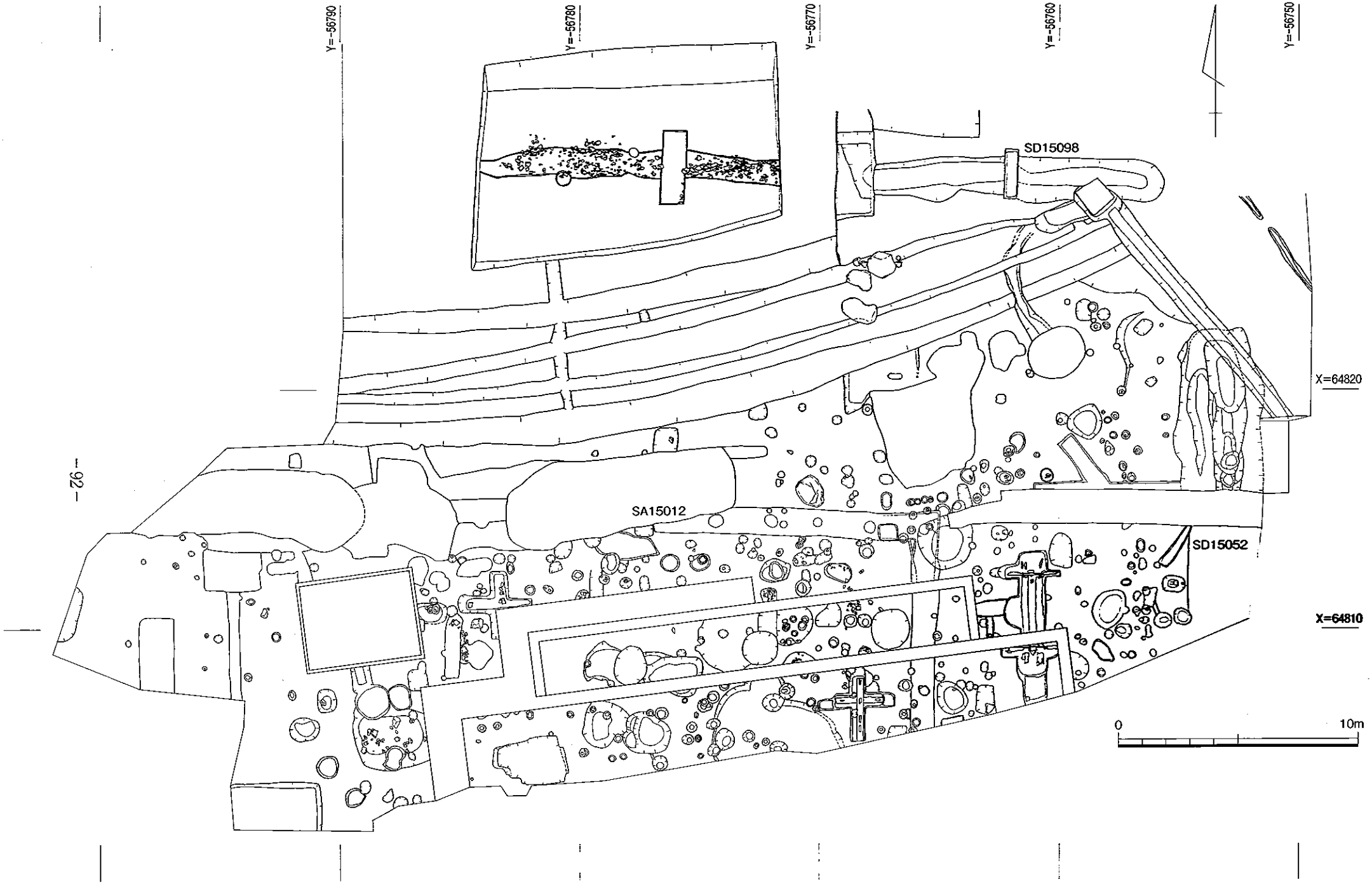


Fig.61　平成15年度調査遺構全体図（1/200）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こうろかんあと
書　　名	鴻臚館跡
副 書 名	平成14年度発掘調査報告書
巻　　次	15
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 838 集
編 著 者 名	大庭康時
編 集 機 関	福岡市教育委員会　鴻臚館跡調査担当
所 在 地	〒810-0043　福岡市中央区天神1-8-1　　TEL 092-711-4783
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こうろかんあと 鴻臚館跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ちゅうおうくじょうない 中央区城内１	40132	0192	33° 45′ 01″	130° 23′ 17″	2004.5.9 ～2005.6.4	約1200	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鴻臚館跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	古墳　1基 掘立柱建物　1棟 掘立柱塀　3棟 土坑　36基 柱元　430基 石垣　2基 溝　4条	須恵器 土師器 石製品 貿易陶磁器 砂金	古代の迎賓館である 鴻臚館の遺構

福岡市埋蔵文化財調査報告書第838集

鴻臚館跡15

－平成14年度発掘調査報告書－

平成17年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　ダイヤモンド印刷株式会社
〒812-0064 福岡市東区松田3丁目9番32号